

千葉東南部ニュータウン 9

—六通遺跡・御塚台遺跡—

1 9 8 0

財 団 法 人 千葉県文化財センター

千葉東南部ニュータウン 9

—六通遺跡・御塚台遺跡—

1 9 8 0

財 団 法 人 千葉県文化財センター

序 文

千葉市南部を流れる村田川流域は、恵まれた自然環境等により縄文時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が残されております。

近年、首都圏の人口増加は著しく、各所で大規模な宅地造成事業が行れております。当県も例外でなく日本住宅公団による約 600 ヘクタールに及ぶ千葉東南部地区土地区画整理事業が計画されました。

そこで千葉県教育委員会では、昭和46年度に事業地内に所在する埋蔵文化財の分布調査を実施するとともに、その取扱いについて日本住宅公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねてまいりました。

その結果、できるだけ公園・緑地に取り込んで現状保存をはかる一方、現状保存の困難な遺跡については十分な記録保存の措置を講ずることとなり、当初（昭和49年度）は財團法人千葉県都市公社文化財調査事務所が調査に当たり、昭和50年度からは当センターが調査機関の指名を受け、計画的に調査を実施しております。

このたび、昭和52・53年度に発掘調査を実施した「六通遺跡」・「御塚古遺跡」の調査成果を『千葉東南部ニュータウン－9－』として刊行する運びとなりました。学術的な資料としてはもとより、文化財保護・普及のために広く一般に活用されることを望んでやみません。

終わりに、日本住宅公団のご協力と千葉県教育委員会の指導・助言にお礼申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和55年9月30日

財團法人 千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は、日本住宅公団首都圏開発本部による千葉東南部地区におけるニュータウン建設計画（土地区画整理事業）に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書に所収される内容は、昭和52・53年度に調査の対象となった千葉市大金沢に所在する六通（ろくつう）遺跡と昭和53年度に調査の対象となった千葉市小金沢に所在する御塚台（おつかだい）遺跡についての資料報告である。
3. 発掘調査は、六通遺跡については昭和53年1月5日から昭和53年5月31日、御塚台遺跡については昭和53年11月19日から昭和54年2月25日に実施した。
4. 発掘調査は、日本住宅公団首都圏開発本部の依頼で、千葉県教育庁文化課の要請と指導を得て、財団法人千葉県文化財センターが受託し、調査部千葉東南部班が担当した。
5. 発掘調査は、調査部長 西野元、班長 栗本佳弘の指導の下に、六通遺跡については調査研究員 田坂浩・相京邦彦が担当し、御塚台遺跡については調査研究員 篠原国勝・小宮孟が担当した。
6. 整理作業は、調査部長 白石竹雄、班長 栗本佳弘の指導の下に、調査研究員 郷田良一・雨宮龍太郎・栗田則久が担当した。
7. 本書の執筆は、六通遺跡については郷田良一・雨宮龍太郎が、御塚台遺跡については郷田良一・栗田則久が行い、栗本佳弘が加筆・補正して全体をまとめた。
8. 本書に使用した遺跡・遺構・遺物等の表記文法、挿図の表現等々は、本文中に併記したところである。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課・日本住宅公団首都圏宅地開発本部の関係者各位をはじめとして、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。深く謝意を表する次第であります。

本文目次

序文

例言

I 発掘調査に至る経緯	1
II 発掘調査の経過と方法	1
III 六通遺跡	
1 六通遺跡の位置と周辺の遺跡	5
2 検出した遺構と遺物	5
1 (DW03) 号跡	5
2 (DW04) 号跡	6
3 (DW02) 号跡	7
4 (DW01) 号跡	10
5 (DW05) 号跡	12
6 (P 4) 号跡	22
7 (P14) 号跡	23
8 (P 24) 号跡	23
9 (P 25) 号跡	23
10 (P 34) 号跡	23
11 (P 35) 号跡	23
12 (P 37) 号跡	25
13 (P 43) 号跡	25
14 (P 27) 号跡	25
15 (P 44) 号跡	26
16 (P 32) 号跡	26
17 (P 36) 号跡	26
18 (P 31) 号跡	27
19 (P 40) 号跡	27
20 (P 13) 号跡	28
21 (P 20) 号跡	28
22 (P 26) 号跡	30
23 (P 28) 号跡	30
24 (P 16) 号跡	30
25 (P 18) 号跡	30

26 (P 19)号跡	30
27 (P 30)号跡	30
28 (P 29)号跡	32
29 (P 38)号跡	32
30 (P 39)号跡	32
31 (M 01)号跡	34
32 (M 02)号跡	34
33 (M 03)号跡	34
34 (M 04)号跡	35
35 (M 05)号跡	35
3 包含層出土の遺物	35
4 小 結	37
IV 御塚台遺跡	
1 御塚台遺跡の位置と周辺の遺跡	40
2 検出した遺構と遺物	42
1 (004)号跡	42
2 (005)号跡	45
3 (006)号跡	48
4 (008)号跡	50
5 (009)号跡	53
6 (010)号跡	55
7 (011)号跡	60
8 (012)号跡	63
9 (013)号跡	68
10 (016)号跡	71
11 (001)号跡	73
12 (002)号跡	74
13 (003)号跡	75
14 (007)号跡	77
3 先土器時代の遺物	78
4 包含層出土の遺物	81
5 小 結	83

挿 図 目 次

第1図 六通道跡と周辺遺跡 (1/25000)	3
第2図 六通道跡周辺地形図 (1/5000)	4
第3図 道構配置図 (1/800)	折込
第4図 1(DW03)号跡実測図 (1/60)	5
第5図 2(DW04)号跡実測図 (1/60)	6
第6図 3(DW02)号跡実測図 (1/60)	7
第7図 3(DW02)号跡カマド実測図 (1/30)	8
第8図 3(DW02)号跡出土遺物 (1/4)	9
第9図 4(DW01)号跡実測図 (1/60)	10
第10図 4(DW01)号跡カマド実測図 (1/30)	11
第11図 4(DW01)号跡出土遺物 (1/4・1/3)	12
第12図 5(DW05)号跡実測図 (1/60)	13
第13図 5(DW05)号跡カマド実測図 (1/30)	14
第14図 5(DW05)号跡出土遺物(1) (1/4)	15
第15図 5(DW05)号跡出土遺物(2) (1/4)	16
第16図 5(DW05)号跡出土遺物(3) (1/2・1/4・1/3)	17
第17図 土壌実測図(1) (1/40)	22
第18図 土壌実測図(2) (1/40)	24
第19図 土壌実測図(3) (1/40)	25
第20図 土壌実測図(4) (1/40)	27
第21図 土壌実測図(5) (1/40)	28
第22図 土壌実測図(6) (1/40)	29
第23図 土壌実測図(7) (1/40)	31
第24図 土壌実測図(8) (1/40)	32
第25図 土壌実測図(9) (1/40)	33
第26図 31(M01)号跡出土遺物 (1/3)	34
第27図 包含層出土遺物 (1/4・1/3・1/2)	36
第28図 御塚台遺跡と周辺遺跡 (1/25000)	39
第29図 御塚台遺跡周辺地形図 (1/5000)	40
第30図 道構配置図 (1/800)	41
第31図 1(004)号跡実測図 (1/60)	42
第32図 1(004)号跡カマド実測図 (1/30)	43

第33図	1(004)号跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2).....	44
第34図	2(005)号跡実測図 (1/60).....	46
第35図	2(005)号跡カマド実測図 (1/30).....	47
第36図	2(005)号跡出土遺物 (1/4・1/2).....	47
第37図	3(006)号跡実測図 (1/60).....	49
第38図	3(006)号跡出土遺物 (1/4).....	50
第39図	4(008)・5(009)号跡実測図 (1/60).....	51
第40図	4(008)号跡カマド実測図 (1/30).....	52
第41図	4(008)号跡出土遺物 (1/4・1/2).....	52
第42図	5(009)号跡カマド実測図 (1/30).....	53
第43図	5(009)号跡出土遺物 (1/4).....	54
第44図	6(010)号跡実測図 (1/60).....	55
第45図	6(010)号跡カマド実測図 (1/30).....	56
第46図	6(010)号跡出土遺物 (1/4).....	58
第47図	7(011)号跡実測図 (1/60).....	60
第48図	7(011)号跡カマド実測図 (1/30).....	61
第49図	7(011)号跡出土遺物 (1/4).....	62
第50図	8(012)号跡実測図 (1/60).....	63
第51図	8(012)号跡カマド実測図 (1/30).....	64
第52図	8(012)号跡出土遺物 (1) (1/4).....	65
第53図	8(012)号跡出土遺物 (2) (1/4・1/2).....	66
第54図	9(013)号跡実測図 (1/60).....	69
第55図	9(013)号跡カマド実測図 (1/30).....	69
第56図	9(013)号跡出土遺物 (1/4).....	70
第57図	10(016)号跡実測図 (1/60).....	72
第58図	10(016)号跡カマド実測図 (1/30).....	73
第59図	10(016)号跡出土遺物 (1/4).....	73
第60図	11(001)号跡実測図 (1/40・1/80).....	74
第61図	12(002)号跡実測図 (1/80・1/160).....	75
第62図	13(003)号跡実測図 (1/80・1/40).....	76
第63図	14(007)号跡実測図 (1/40・1/80).....	77
第64図	小グリッド分割図.....	78
第65図	先土器時代グリッド配置図 (1/800).....	79
第66図	5-B-99グリッド平面図・断面図 (1/20).....	80
第67図	先土器時代出土遺物 (1/2).....	81

第68図 包含層出土遺物(1) (1/4・1/3).....	82
第69図 包含層出土遺物(2) (1/3).....	83

図 版 目 次

六通遺跡

図版1 (1) 六通遺跡調査前の状況(南西から)	(2) 10(016)号跡全景
(2) 六通遺跡調査前の状況(北東から)	
図版2 (1) 1(DW03)号跡全景	(2) 11(001)号跡全景
(2) 2(DW04)号跡全景	(2) 12(002)号跡全景
図版3 (1) 3(DW02)号跡全景	(2) 13(003)号跡全景
(2) 4(DW01)号跡全景	(2) 14(007)号跡全景
図版4 (1) 5(DW05)号跡全景	図版18 1(004)号跡出土遺物(1)
(2) 5(DW05)号跡遺物出土状態	図版19 (1) 1(004)号跡出土遺物(2)
図版5 (1) 3(DW02)号跡出土遺物	(2) 2(005)号跡出土遺物
(2) 4(DW01)号跡出土遺物	(3) 3(006)号跡出土遺物
(3) 5(DW05)号跡出土遺物(1)	図版20 (1) 4(008)号跡出土遺物
図版6 5(DW05)号跡出土遺物(2)	(2) 5(009)号跡出土遺物
図版7 5(DW05)号跡出土遺物(3)	(3) 6(010)号跡出土遺物(1)
図版8 5(DW05)号跡出土遺物(4)	図版21 6(010)号跡出土遺物(2)
図版9 (1) 31(M01)号跡出土遺物	図版22 (1) 7(011)号跡出土遺物
(2) 包含層出土遺物	(2) 8(012)号跡出土遺物(1)
	図版23 8(012)号跡出土遺物(2)

御塙台遺跡

図版10 御塙台遺跡調査前の状況(南から)	
図版11 (1) 1(004)号跡全景	(2) 10(016)号跡出土遺物
(2) 2(005)号跡全景	
図版12 (1) 3(006)号跡全景	図版25 (1) 先土器時代出土遺物
(2) 4(008)・5(009)号跡全景	(2) 包含層出土遺物
図版13 (1) 6(010)号跡全景	
(2) 7(011)号跡全景	
図版14 (1) 8(012)号跡全景	
(2) 8(012)号跡遺物出土状態	
図版15 (1) 9(013)号跡全景	

I 発掘調査に至る経緯

六通遺跡・御塚台遺跡は、日本住宅公団首都圏宅地開発本部によって計画された、千葉東南部地区における土地区画整理事業によるニュータウン建設に際して記録保存の対象となった遺跡である。

六通遺跡(10,000m²)は、昭和52年10月にニュータウン造成工事中に発見され、千葉県教育庁文化課ではその取扱いについて日本住宅公団と協議を重ねた結果、現状保存は困難であるとの結論に達し記録保存の措置をとることで協議が整った遺跡である。発掘調査は、当センターが昭和52・53年度の2次(第1次:昭和53年1月5日より同年3月31日、第2次:昭和53年4月1日より同年5月31日)に亘って実施した。

御塚台遺跡(3,500m²)は、昭和46年度に実施されたニュータウン造成地区内の遺跡分布調査によってその所在が確認され、千葉県教育庁文化課と日本住宅公団との協議の結果、記録保存の措置をとることで協議が整った遺跡である。発掘調査は、当センターが昭和53年11月19日より54年2月25日に亘って実施した。

II 発掘調査の経過と方法

六通遺跡の発掘調査は、昭和53年1月5日から5月31日に亘って実施した。また御塚台遺跡は、昭和53年11月19日から昭和54年2月25日に亘って調査を実施した。

両遺跡とも公共座標に従って方眼に基準杭を設定し、さらに、この基準杭に従ってトレントを設定した。手掘によるトレント発掘により表土層から遺構の所在確認面までの状況・深さを十分に把握した後、表土層除去専用に開発された特殊バケットを装着したバック・ホーを導入し、調査員の指示のもとに熟練したオペレーターによって調査区全域の表土層除去を行った。

豊穴住居跡の調査方法

1. 平面実測は、平板測器を用い、出土遺物は原則として遺存状態の良好なもの、共伴の可能性のあるものなどを実測図に記録した。縮尺は1/50とした。
2. 土層断面の観察は、原則として直交する十字のセクション・ベルトを残し、良好な一方を実測図に記録した。また、單一層あるいは遺存状態の悪いものについては、所見を記録するにとどめた。縮尺は1/50とした。
3. カマドは、平面実測・全景撮影終了後、縦断面・横断面の実測を行った。縮尺は1/50とした。

方形周構遺構の調査方法

平面図・土層断面図は、竪穴住居跡に準じた。縮尺は平面図 $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{50}$ 、断面図 $\frac{1}{50}$ とした。

土塙の調査方法

原則として土層断面の観察のために、遺構を半裁し、土層断面観察後に完掘した。縮尺は $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{50}$ とした。

遺物の取り上げ方法

1. 出土状況等を明確に記録するため、ポリ袋に付けるラベルと遺物台帳を使用した。出土状況は覆土と床面（底面）に区別するとともに共件の有無を記載した。また、付属施設等より出土した場合は、カマド内・ピット内など記載した。

2. (財)千葉県文化財センターでは発掘調査を実施する遺跡には市町村コードと調査の順序を示すコードとの組み合せによって遺跡コードを付している。六通遺跡は201-005、御塚台遺跡は201-012である。

3. 遺構は3ヶタの数字で記載し、調査順に001から通し番号を付していった。ただし、土塙についてはP1, P2, P3…とした。

4. 遺物は4ヶタの数字で記載し、遺構ごとに0001から通し番号を付した。

整理の方法

1. 遺構実測図は、現場で記録した平面図・土層断面図等を第1原図とし、これを整理・縮少して第2原図を作製し、挿図の原図とした。

2. 遺物の整理は以下の順で作業を進めた。

1) 水洗・注記——混乱を防ぐため、遺物台帳と照合しながらポリ袋単位で行った。

2) 復元・遺物の抽出——遺構との関連性の高いものを中心に作業を進めた。

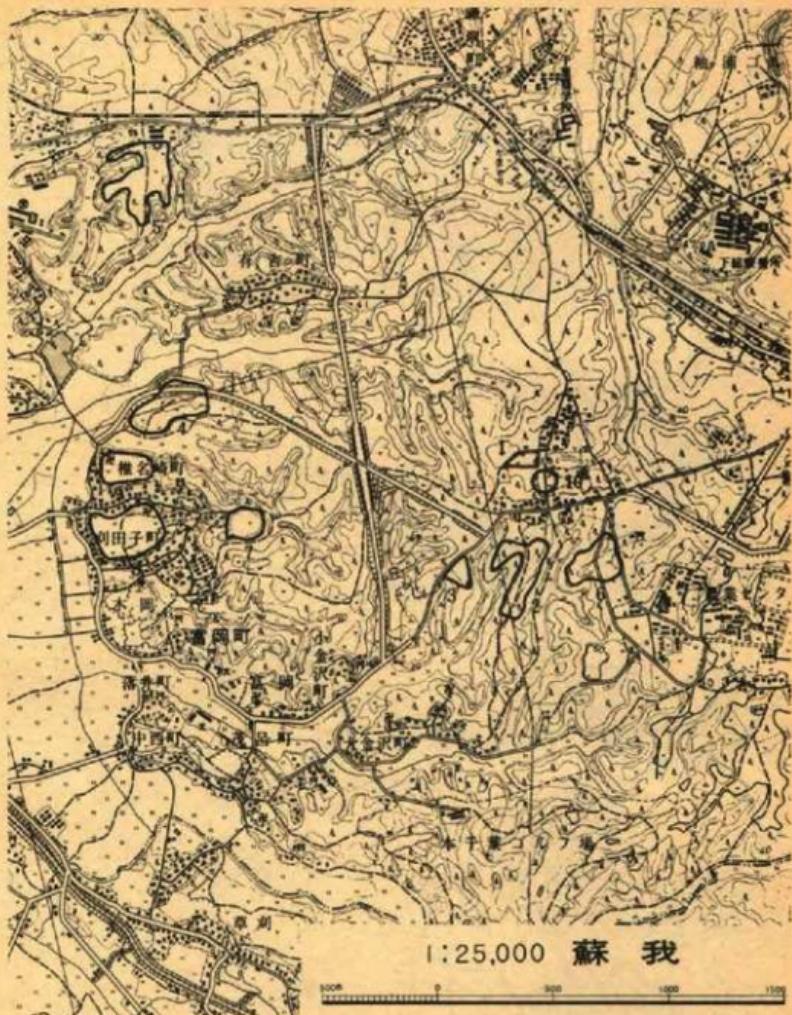
3) 実測——遺物の所見は、遺跡ごとに記載内容を統一した。土器類については出土土器一覧を作製した。

4) 写真撮影——完形品、またはそれに近い状態を中心にし、遺物の特徴を観察できる撮影に努めた。

以上が、図面・遺物の整理概要である。これらの作業を基礎に挿図・図版の作製を行ったがこの段階で遺構番号は新しいものに全て置き替え、現場で使用した遺構番号は新しい遺構番号の後にカッコに入れて示した。

なお、出土土器一覧の焼成焰の欄でAとしたものは酸化焰焼成によるもの、Bとしたものは還元焰焼成によるもの、CとしたのはA・Bの中間的焼成のものであることを示す。

III 六 通 遺 跡

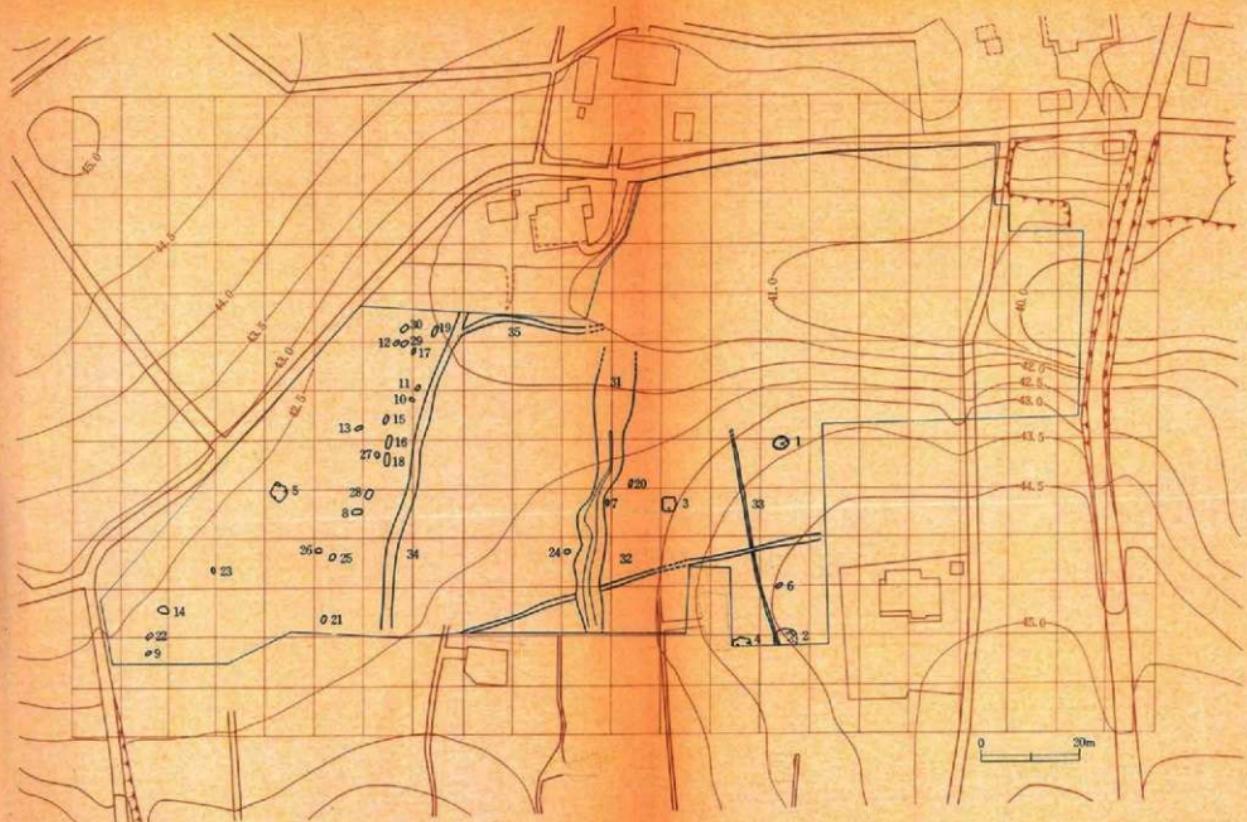


- | | | |
|----------|------------|-----------|
| 1. 六通遺跡 | 2. ムコアラク遺跡 | 3. 御坂台遺跡 |
| 4. 椎名崎遺跡 | 5. 有吉遺跡 | 6. 六通金山遺跡 |
| 7. 今台遺跡 | 8. 刈田子台遺跡 | 9. 伯父名台遺跡 |
| 10. 六通貝塚 | | |

第1図 六通遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)



第2図 六通跡周辺地形図 (1:5,000)



第3図 造構配置図 (1/800)

1 六通遺跡の位置と周辺の遺跡

六通遺跡は、千葉市大金沢902-3他に所在する。

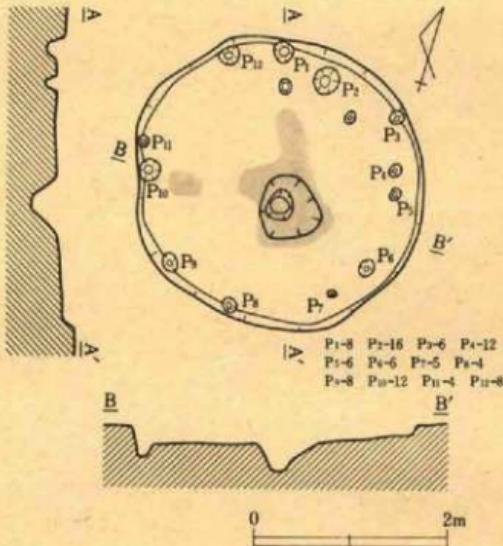
下総台地は千葉市東南部において、北は市街を流れる都川、南は市原市と市域を画する村田川との両河川の開折作用によって北東から南西にのびる一支台を形成している。この支台には海岸部から多数の小支谷が樹枝状に入り組んで小規模な舌状台地が縁辺部に派生している。遺跡はこの支台の南端に近い一舌状台地の基部に立地しており、村田川から北へ約3km程の位置にある。遺跡の標高は約41m、周囲の谷津田面との比高差は12~13mを測る。

六通遺跡とはほぼ同時代と思われる周辺の集落遺跡にはムコアラク遺跡、御塙田遺跡、椎名崎遺跡、有吉遺跡、六通金山遺跡等が調査確認されている。他に遺物散布地としては今台遺跡、刈田子台遺跡、伯父名台遺跡等があげられる。

2 検出した遺構と遺物

1(DW03)号跡 (第4図、図版2)

調査区東端の平坦部に位置する堅穴住居跡である。



第4図 1(DW03)号跡実測図 (1/60)

構造

平面形——直径約3mの不整円形を呈する。

床面——全体に堅緻であるが、凹凸が著しい。

壁——残存壁高は5~15cmで、外側に開いている。

柱穴——P₁~P₁₂が柱穴と考えられる。直径10~30cm、深さ4~16cmで壁に沿って巡る。

いわゆる壁柱穴である。柱穴相互の間隔は一定しない。

が——中央よりわずかに南に偏して位置する。平面形は、直径約60cmの不整円形を呈し、

その断面形は深さ約25cmのスリバチ状を呈する。炉の内壁は火熱によって赤化して

おり、その内部には焼土が充満していた。また、炉から搔き出したと思われる焼土

が炉址北側と西側の床面に広がっている。

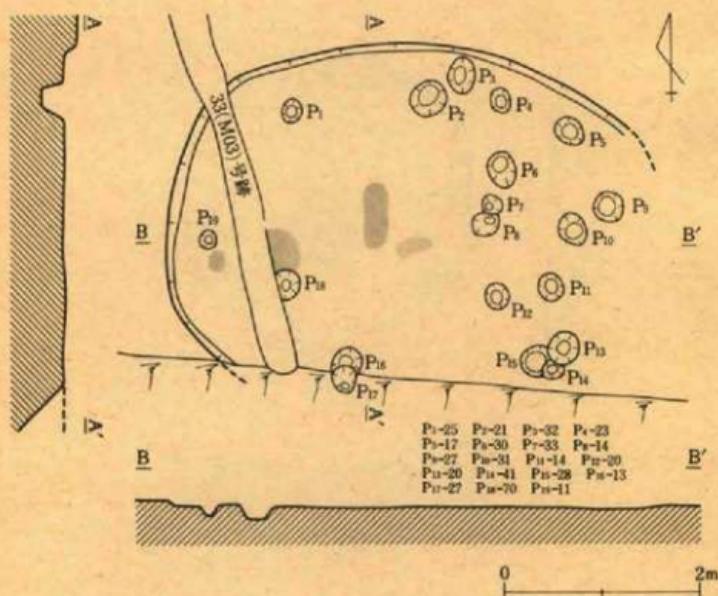
覆土の状態

焼土粒を含む暗褐色土の單一層である。

出土遺物

覆土中より縄文時代後期中葉（加曾利B式）の土器片が出土したが、いずれも細片のため図示できない。

2(DW04)号跡 (第5図・図版2)



第5図 2 (DW04) 号跡実測図 (1/60)

調査区南東隅の平坦部に位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—南東側の約 $\frac{1}{2}$ が失われているため全体は不明であるが、遺存する北西側を手掛りとすれば長径 5m 、短径 4m 前後の楕円形を呈するものと推定される。

床面—平坦であるが、全体に軟弱である。

壁—壁を検出することができた北西側で残存壁高 5cm 前後を測る。

柱穴—P₁～P₁₉のピットを検出したが、いずれが柱穴であるかを判定するのは困難であった。

炉—一西側床面に4個所の焼土を検出したが、炉は存在しない。

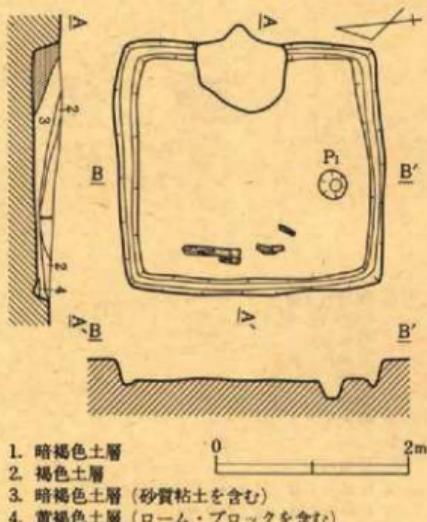
覆土の状態

焼土粒を含む暗褐色土の単一層である。

出土遺物

1号跡と同じく、覆土中より縄文時代後期中葉（加曾利B式）の土器片が出土したが、いずれも細片のため図示できない。

3(DW02)号跡 (第6・7図、図版3)



第6図 3 (DW02)号跡実測図 (1/60)

調査区東側の平坦部に位置する竪穴住居跡である。床面より炭化材を検出し、本址は火災を受けていることが判明した。

構造

平面形—東壁 2.6m、南壁 2.4m の整った方形を呈する。

壁—確認面からの壁高は 10~20cm で、わずかに外側に開く。

床—面全体に堅緻であるが、小さな凹凸がみられる。

壁溝—カマド下を除いて、壁直下を全周する。幅 10~20cm、深さ 5cm 前後で、底面は四凸が著しい。

柱—穴一南壁寄りの中央に P1-18cm のみを検出した。

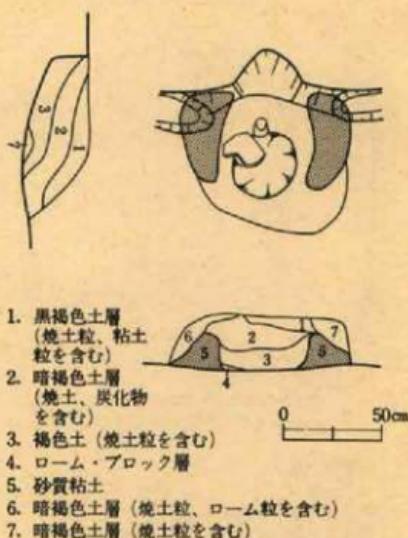
カマド—東壁のはば中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは急で、垂直に近い。壁外への切り込みは約 20cm を測る。

覆土の状態

4 層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

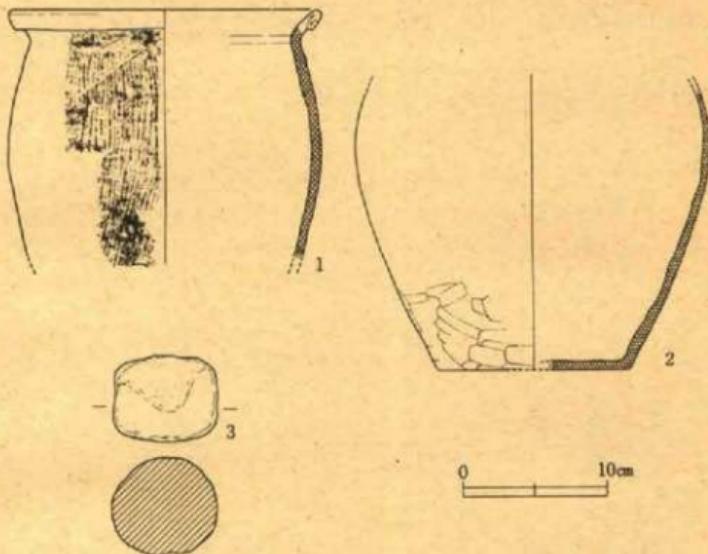
遺物量は少ない。2・3 はカマド内の各々暗褐色土層、褐色土層中より出土した。また 1 はカマド前面の床面から、わずかに浮いた状態で検出された。



第 7 図 3 (DW02) 号跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物（第8図、図版5）

1は甕で、胴部最大径は低く、胴中央部よりやや上にある。二重口縁部の成形は折返し法に扱っている。この個体では上端部の粘土板を下方に折り曲げた後、さらにその先端を上方に折り曲げている。二重口縁の上下両端は丸味を帯び純い。特にその下端部は、粘土帶の幅は一定せず、直線状を呈さない。



第8図 3 (DW02) 号跡出土遺物 (1/4)

土器と須恵器との中間的焼成段で焼かれた土器の色調について「桜色」という名前を用いている場合がある。「広辞苑」によれば「桜色」とは「満の桜の色。赤みを帯びた黄色」とある。

3 (DW02) 号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	重存度	法寸(㎝)	焼成段	成形・調整	胎度	色調	備考
1	甕	口縁-胴部 另	口径(復) 21.0 胴部最大径(復) 20.8 現高 16.5	C	外面 口頭部から胴部に平行タグキを施した後 口縁部を横ナギ 内面 口縁部横ナギ 胴部ナギ	微細な白石・ 雲母片を含む	器壁内 桜色 器壁面 暗褐色	0001, 0005 0006
2	甕	胴部-底 部另	胴部最大径(復) 24.6 底径(復) 13.3 現高 17.1	C	外面 脇部付近は平行明き後ヘラナギ。 胴部はヘラケズリ [→] 内面 横力向へのヘラナギ 底部 ヘラケズリ後 ヘラナギ	微細な白石・ 雲母片を含む	器壁内 中央は青 灰色 周縁は赤 褐色 器壁面 桜色	0004-6

2は腰で、1よりも肩の張りが大きい。胸部と底部との接合部は、面取りが全く行われずに鋭い棱を形成する。胸部に付された平行タタキ目が、ヘラナデによって大方消されている点もこの個体の特徴である。

3は土製支脚である。底径6.3cm、器高5.4cmを計る。粘土は砂質で脆い。上端面が若干欠失する。

4(DW01)号跡 (第9・10図、図版3)

調査区南西側の平坦部に位置する竪穴住居跡である。

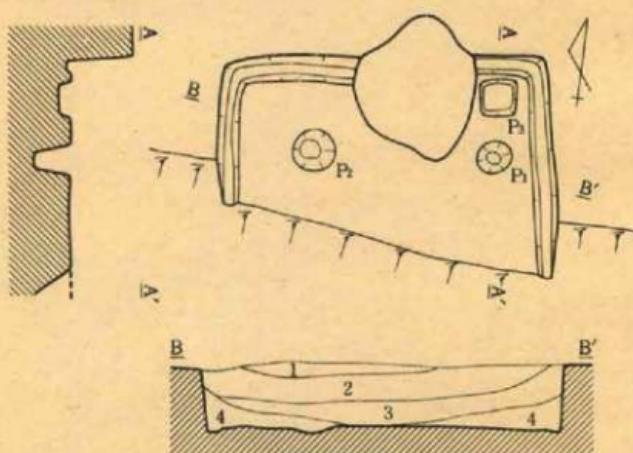
構造

平面形—南側の約半分が宅地造成工事によって失われているため全体は不明であるが、北壁の状態よりして1辺3.5m前後の方形を呈するものと推定される。

壁—遺存状態の最も良い北壁で、確認面からの壁高60cmを測り、ほぼ垂直に掘り込まれている。

床—全体に堅緻であるが、小さな凹凸が著しい。

壁溝—遺存する北側部分ではカマド下を除いて壁直下に溝っている。



1. 黒褐色土層
2. 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
3. 暗褐色土層 (ローム・ブロックを含む)
4. 黄褐色土層 (砂質土、ローム粒を含む)

第9図 4 (DW01) 号跡実測図 (1/60)

柱穴—P₁—36cm, P₂—27cmで、やや東側へ偏している。

貯藏穴—カマド東側に位置し、長辺40cm、短辺35cmの長方形を呈する。深さは13cmで、底面は平坦で堅緻である。

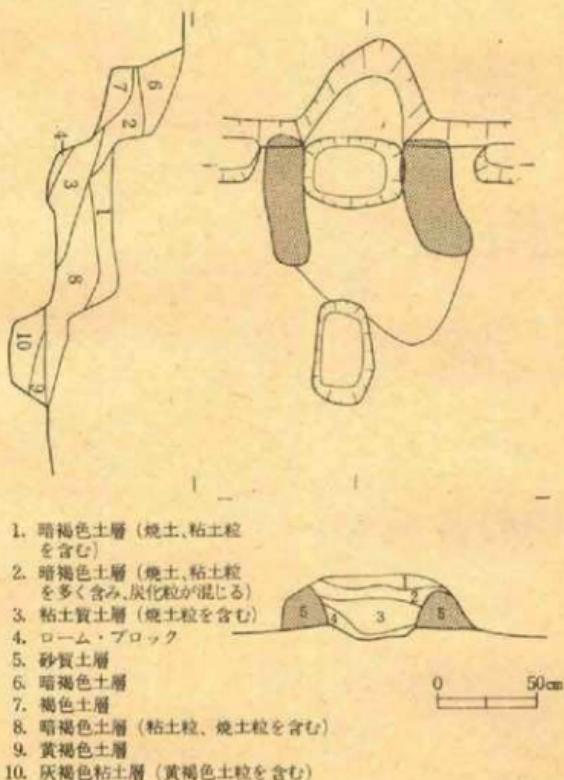
カマド—北壁の中央よりやや東に位置しP₁, P₂が東に偏している点と対応している。袖部は砂質粘土を部材として用い、遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは急で、壁外への切り込みは約40cmを測る。

覆土の状態

4層に分けられる。砂質粘土を含む第4層はカマドの崩壊による土層と思われる。

遺物の出土状態

遺物量は少なく、いずれもカマド付近の覆土中より出土した。

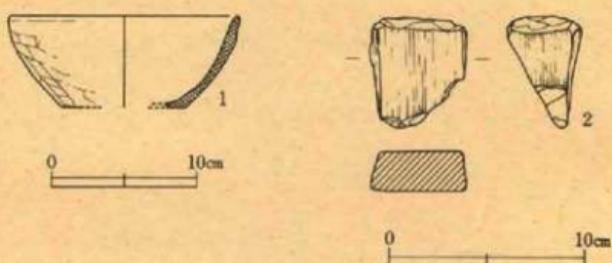


第10図 4 (DW01) 号跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物（第11図、図版5）

1は環で、底部を欠失する。体部が長く伸び、塊形に近い。体部外面の横ナデの範囲が小さい点が特徴である。

2は砾石で凝灰岩製である。相対する2面が主要され、磨滅しているが他面にも擦痕が見られる。



第11図 4 (DW01) 号跡出土遺物 (1/4・1/3)

4 (DW01) 号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	直呑-度	法量(cm)	焼成度	成形・調整	胎土	色調	備考
1	环	3/4	口径(腹) 15.4 底径(腹) 8.4 現高(腹) 6.1	C	外面 口縁ヨコナデ、 胸部へラケズリ(←) 内面 横ナデの後へ ラミガキ(←) 底部 ヘラケズリ	微細な雲母片 を含む	器壁内 褐色 器壁面 暗褐色	0003

5(DW05)号跡 (第12・13図、図版4)

調査区西端の平坦部に位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—北壁約3.5m、南壁約2.5m、東西壁約2.8mで、南壁は北壁に比べて約1m狭く、平面形は台形を呈する。

壁 一確認面からの壁高は30~40cmを測り、やや外側に向く。

床 全体に堅緻であるが、小さな凹凸が著しい。

壁 清一北壁および西壁の北側の一部を除いて壁直下を巡る。幅5~10cm、深さ10cm前後で

底面は平坦である。

柱穴一カマド両脇のP₁-21cm, P₃-30cm, および南壁近くのP₂-40cmの3本が柱穴と思われる。

貯藏穴一北側隅に位置する(P₄)。長辺45cm、短辺30cmの長方形を呈する。深さは13cmで、底面は平坦で堅緻である。

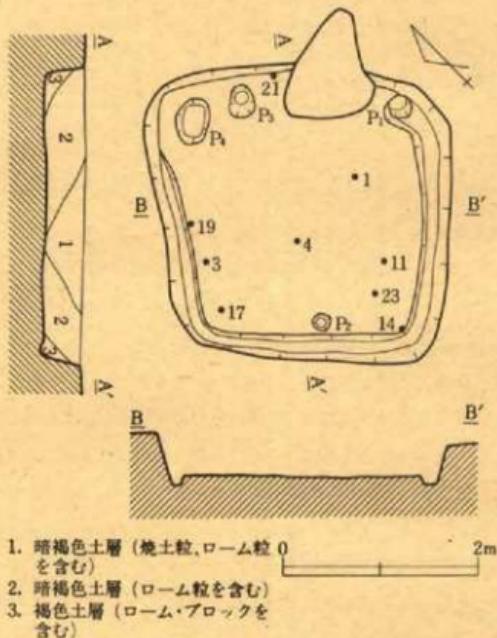
カマド一北壁の中央よりやや東に偏って位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、左袖部の遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは緩やかで、壁外への切り込みは約60cmを測る。

覆土の状態

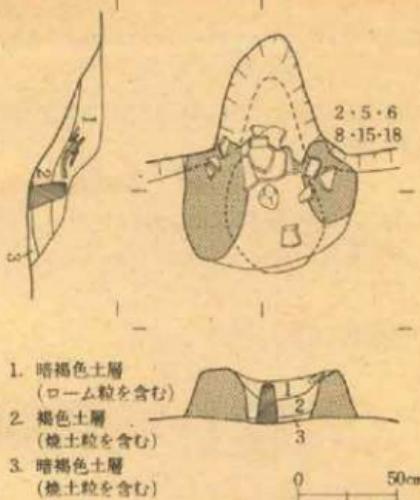
3層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

遺物量は比較的多い。出土状況別に見れば、カマド内、床面および床面よりわずかに浮いた状態、覆土中の3群に分けることができる。



第12図 5 (DW05) 号跡実測図 (1/60)



第13図 5 (DW05) 号跡カマド実測図 (1/30)

カマド内中央の燃焼部から煙道部にかけての暗褐色土層中からは、2・5・6・8・15の各個体が一括出土した。また18の土製支脚はカマド燃焼部の床面上に直立していた。

床面および床面よりわずかに浮いた状態で1・3・4・11・14・17・19・23の各個体が出土した。これらは住居跡内に散在しており、出土地点が集中するような傾向はない。住居跡の西側コーナーから西北壁中央にかけて3・17・19が、南側コーナーからは14がカマド西隔壁ぎわからは21が、また住居跡中央部付近からは1・4・11・23の各個体が出土した。

覆土中から出土したものには、7・9・10・12・13・16・20・21の各個体がある。

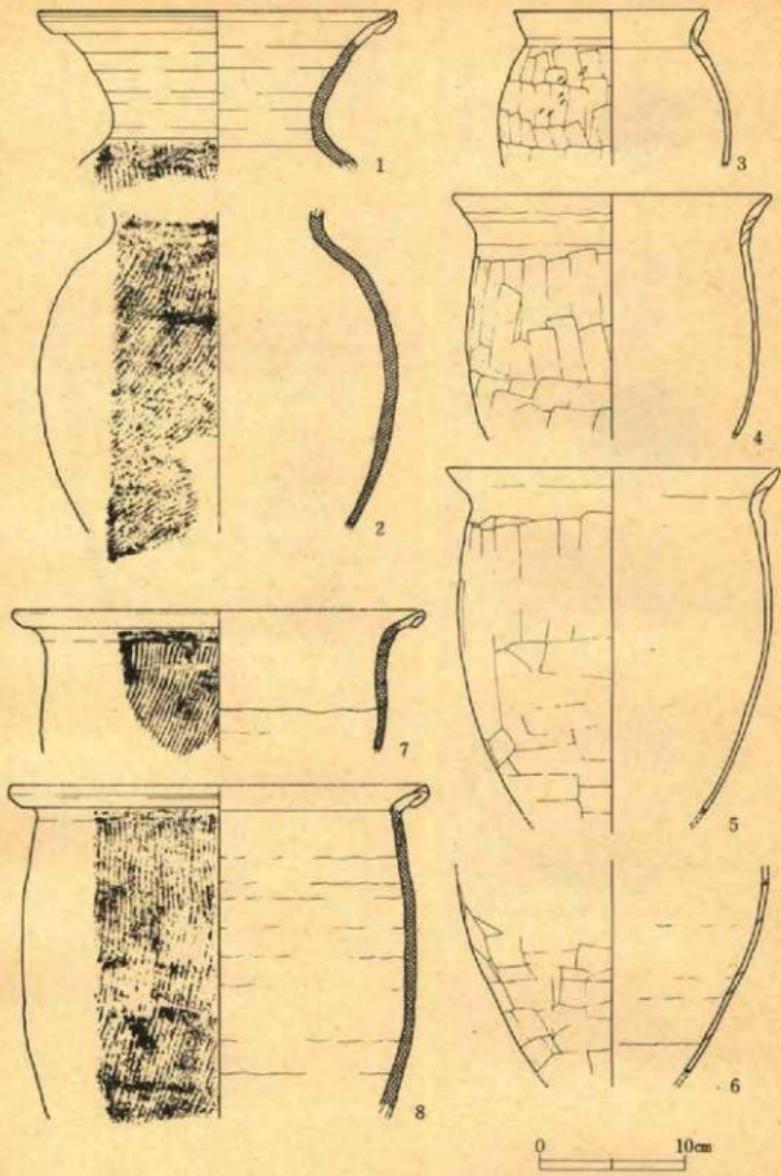
なお、カマド上方の遺構プラン確認面からは22が検出されている。

出土遺物 (第14~16図、図版5~7)

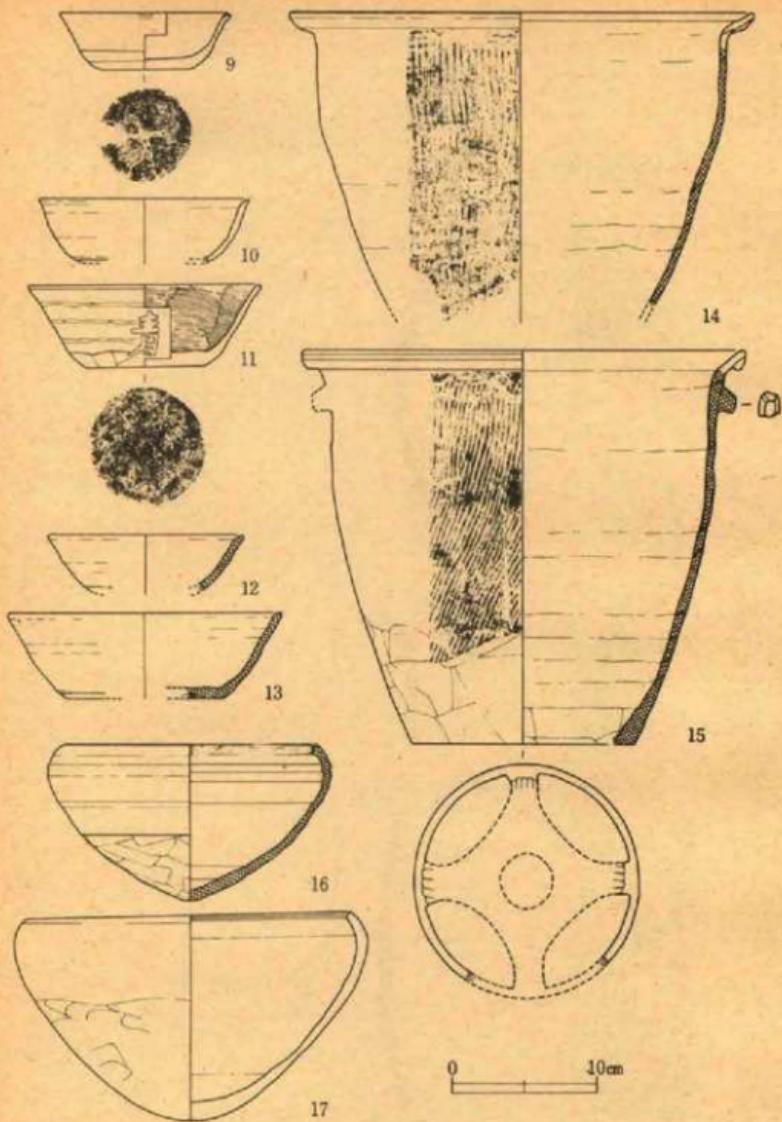
1は壺の口縁部破片である。口頭部から次第に外反度を増しながら口縁に至る。二重口縁部の成形は貼付法に拘っており、粘土帯貼付け後の調整痕が浅い沈線状を呈する。その上端部は外側からのオサエは丹念だが、内側からのナデツケが甘く、鈍い棱を成す。下端部は粘土帯のオサエが行き届き、鋭い棱を形成する。したがって二重口縁部の断面形は明瞭な台形を呈する。

2は壺の胴部破片で、1と同一個体の可能性もあるが、接合しない。口頭部直下から平行タタキが残存部分全体に施される。胴部最大径は胴中央よりも上位にあり、不安定な器形を呈する。

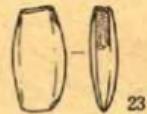
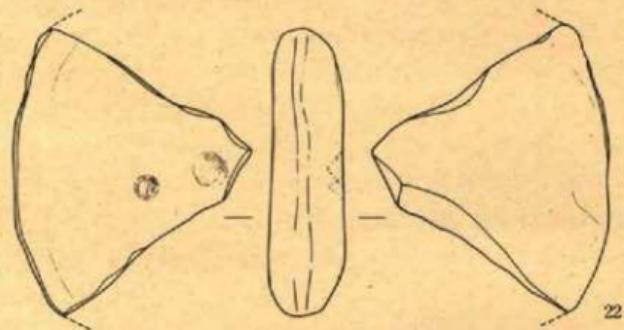
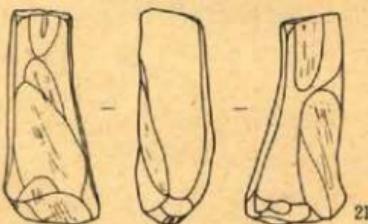
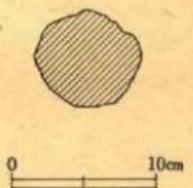
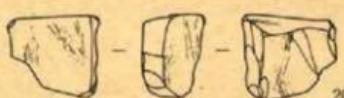
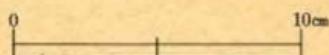
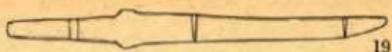
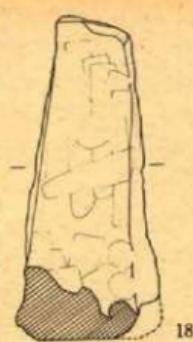
3は甕で、口縁は「く」字状に外反し、胴部が張り出した器形を呈する。胴部外面調整は縱方向のヘラケズリが主体で、横方向のヘラケズリは胴部最大径よりも下位から始まる。なお、



第14图 5 (DW05) 号墓出土遗物 (1) (1/4)



第15図 5 (DW05) 号跡出土遺物 (2) (1/4)



第16図 5(DW05)号跡出土遺物(3) (1/2・1/4・1/3)

胴上部には鋭利な器具による焼成後の擦痕が見られる。

4は壺で、口頸部の屈曲が弱く、口縁は緩やかに外反する。胴部は張りが弱く、肩を殆ど持たない。胴部外面調整は縦方向のヘラケズリが主体で、横方向のヘラケズリは胴部最大径よりも下位から始まる。

5は壺で、口頸部の屈曲度は弱く、口縁はその外反度を途中で弱め受け口状を呈する。胴部の張りは弱く、肩を殆ど作らない。胴部外面調整は上部は縦方向の、中央部以下は横方向のヘラケズリである。

6は壺の胴下部破片である。器壁は薄く、外面調整は横方向のヘラケズリであるが、残存部上端には縦方向のヘラケズリ痕が見られる。

7は壺で、口頸部のくびれが比較的大きく、口縁の屈曲度は弱い。二重口縁部の成形は半折返し法とでも呼ぶべきもので、1本の粘土帯を口縁直下に貼付した後に、本体の口縁部をその上に重ねるようにして折り返している。その上端部は口縁内面の強い横ナデによって鋭い棱を形成する。下端部は粘土帯のオサエが甘く、丸味を帯びる。したがって二重口縁部の断面形は小判形に近い。

8は壺で、口縁の屈曲が強く、「く」字状を呈する。胴部最大径は胴中央付近にある。二重口縁部の成形は折返し法に換へており、さらにその上部に細い粘土紐を積み上げて口縁部を補強している。口縁部調整はその上端部では、内側からの強い横ナデと外側からのオサエとによって、真上に向かって鋭い棱を形成する。一方下端部ではオサエが甘くなり、棱はかろうじて生じているに過ぎない。したがってその断面形は略台形を呈する。なお、この個体には口頸部の横ナデがさほど強くない部分がある、そこでは胴部に付された平行タタキ目が、二重口縁の内部にまで延長されていることが明晰に観察できる(図版6及び出土器一覧参照)。この種の壺の製作過程を知る上での好資料である。

9は壺で、口唇部には指頭押圧による片口が1箇所作られている。体部は横ナデ、底部は回転糸切り後に周縁ヘラケズリ、底部面取りは2段のヘラケズリによって行われる。

10は壺で、底部を欠失する。体部は横ナデ調整、底部面取りは少なくとも2段のヘラケズリによって行われる。

11は壺で、体部には「青」の墨書銘が存在する。体部のロクロ水びき痕はヘラミガキによって消されている。底部は一方向のヘラケズリ、底部面取りは1段のヘラケズリである。内面は全面に丹念なヘラミガキが施される。

12は壺で、底部を欠失する。体部はロクロ水びき調整、底部面取りは少なくとも1段のヘラケズリが行われる。

13は壺で、底部の大半を欠失する。体部はロクロ水びき、底部はヘラケズリ、底部面取りは1段のヘラケズリである。

14は胴部形態から瓶と判断したが、現存部分には把手は見られない。口縁は「く」字状に外

反し、胴部の振り出しが小さく、その最大径は口縁部にさわめて接近した位置にある。二重口縁部の成形は貼付け法に従っているが、貼付された粘土帯がさわめて薄くなっているのが特徴的である。この上下両端をオサエナデしたことによって、断面形は低い二等辺三角形を呈する。

15は瓶である。口縁部は「く」字状に外反し、胴部最大径は口縁部屈曲点と一致する。この屈曲点直下には、一对の断面四角形の小把手が胴部のタタキを調整後に貼付される。底部は大半を欠失するが、残存部分から「五孔式」に属するものと思われる。二重口縁部の成形は貼付け法に従っている。粘土帯貼付後の調整痕は明瞭な沈線ないし段となっている。その上下両端ともオサエが行き届き、断面形は台形を呈する。

16は鉢で、鉢あるいは磁鉢と称される器形である。尖底部から外脣ぎみに大きく開く胴部は口縁近くで内脣し、口縁端面は完全に内面する。この部分には強い横ナデが加えられる。胴部調整は上半部がロクロ水びき、下半部が静止ヘラケズリである。なお、胴部内面には赤色顔料が付着した痕跡が見られる。

17は鉢で、16と同様の器形を呈するが、底部は丸底に近い。口縁端面には強い横ナデが加えられ、胴下半部には静止ヘラケズリが施される。胴上半部は、下部ヘラケズリとの境界線が直線を成さないので、ロクロ水びきよりも単なる横ナデの可能性が強い。

18は土製支脚で、底径約7cm、器高22cmを計る。基部を若干欠失するだけで遺存状態はさわめて良好である。天井部と基底部を除く殆どの部分にヘラケズリが施され、多角柱の形態をとる。また基部には指頭圧痕が残っている。胎土は砂質に富み、表面は灰褐色、内部は赤褐色を呈する。

19は鉄製刀子で、全長13.2cm、両間間1.3cm、刃部長9.6cm、茎部長3.6cmを計る。刃部は度重なる研ぎ出しのために中央部が磨滅して内脣している。

20は砥石で、凝灰岩製である。全長4.3cm、最大幅4.9cmを計り、浅い擦痕が各所に見られる。

21も20と同様に凝灰岩製砥石である。全長10.8cm、最大幅4.9cmを計る。

22は石皿の破片で、中央部寄りには2箇所のくぼみが存在する。一方は直径17.5mm、深さ8mm、他方は直径12mm、深さ7mmである。

23は小形磨製石斧で、全長5.2cm、幅2.8cm、厚さ1.3cmを計る。全体は丹念に研磨され、光沢をもつ。頭部はややくぼんだ平坦面を成し、両側面上端部には敲打痕がある。

5 (DW05) 号跡出土土器一覧

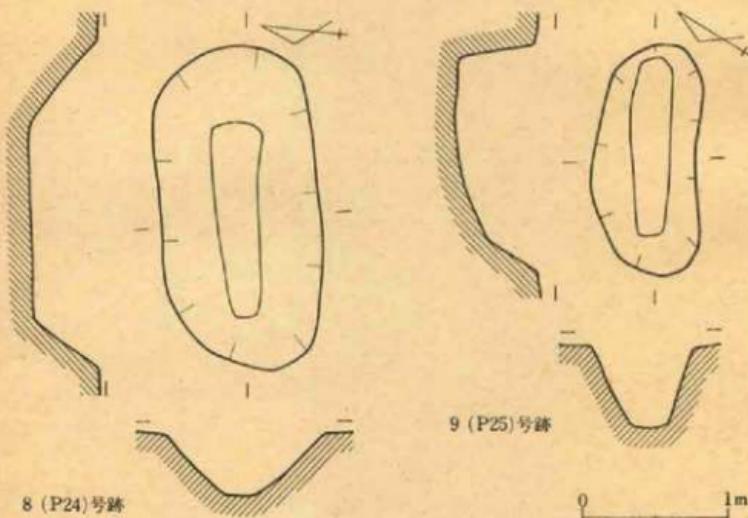
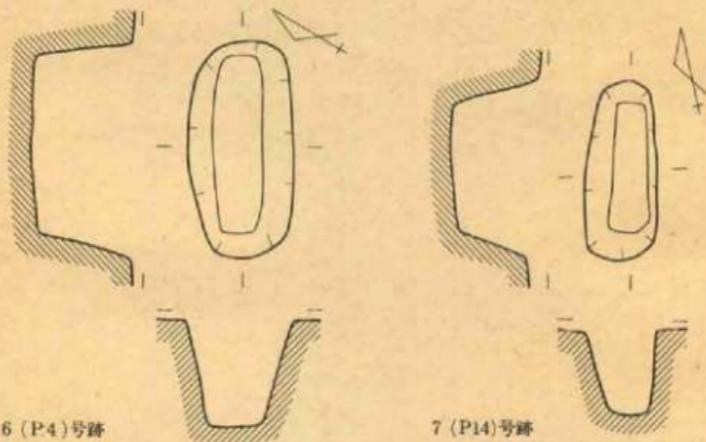
遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	地成好	成形・調整	胎土	色調	備考
1	壺	口縁一口頭部	口径(復) 24.2 現高 19.5	C	外面 口縁部ナデ 口頭部から胴部に平行タタキを施した後 ロクロ水びき 内面 ロクロ水びき調整 ロクロ水びき調整の後、口縁部横ナデ	滑潤な白石及び少量の雪母片が混入する	器壁内 赤褐色 器壁面 暗褐色	0011, 0018

2	壺	胴部外 現高	胴部最大径(復) 24.4 21.2	C	外面 内面	胴部に平行タ キを施した後、口頭部から 胴上部を横ナ デ。胴下部は はへラケズリ 口頭部は横ナ デ、胴部は部 分的にへラナ デ	微細な白石・ 雲母片を含む	器壁内 赤褐色 器壁面 暗褐色	1とは接合しな いが、同一個体 の可能性がある 0017, 0018
3	壺	口縫～胴部 外 現高	口径(復) 13.4 胴部最大径(復) 15.6 現高 10.5	A	外面 内面	胴上部に上→ 下(時計回り) のへラケズリ 胴下部に左→ 右(反時計回 り)のへラケ ズリ。口縫部 は横ナデ 口縫部から胴 部横ナデ。胴 部以下は横及 び斜めの方向 のていねいなナ デ	微細な雲母片 を含む	明赤褐色	外面には煤が付 着する。胴部 には、右上から 左下にかけて尖 銳な器具による 焼成後の擦痕が ある 0002, 0006 0017
4	壺	口縫～胴部 外 現高	口径(復) 20.8 胴部最大径(復) 20.0 現高 16.2	A	外面 内面	胴上部に上→ 下(時計回り) のへラケズリ 胴下部に左→ 右(反時計回 り)のへラケ ズリ。口縫部 は横ナデ 口縫部は横ナ デ、胴部はへラ ナデ(△)	微細な雲母片 を含む	灰褐色	胴下部には煤 が付着する 0001, 0010 0020, 0021
5	壺	口縫～胴下 部略完全存	口径 22.8 胴部最大径 20.5 現高 22.7	A	外面 内面	口縫部横ナデ 胴上部は上→ 下(時計回り) のへラケズリ 胴下部は右→ 左(時計回り) のへラケズリ 口縫部横ナデ 胴部ていねい なナデ	比較的大きな 石粒を多く含 む	赤褐色	0018, 0020 0021
6	壺	胴下部外 現高	12.6	A	外面 内面	胴上部へラケ ズリ(△)、胴下 部左→右(反 時計回り)の へラケズリ 右→左(時計 回り)のへラ ナデ	微細な雲母片 を含む、小石 が多い	灰褐色	0020, 0021
7	壺	口縫～胴上 部若干	口径(復) 28.1 現高 9.4	C	外面 内面	口縫部横ナデ 口縫部から胴 部は平行タ キを施した後 口縫部横ナデ 横方向のへラ ナデ	不純物は含ま ずムラがない	桙色	胴部内面には輪 積模が残る 0002
8	壺	口縫部外 胴部外 現高	口径 28.4 胴部最大径 26.9 現高 21.9	C	外面 内面	口縫部横ナデ 口縫部から胴 部に平行タ キを施した後 口縫部横ナデ 横方向のへラ ナデ	小石粒が若干 混じるが、白 石・雲母片は 少ない。	赤褐色	平行タキ目の 上端は二重口縫 部の上層粘土板 におかれている が、胴部内面に は輪積模が残る 0020
9	环	口縫～一体部 外 底部充 存	口径 底径 高 11.4 5.4 3.9	A	外面 内面 底部	口縫～一体部横 ナデの後、 下部回転へラ ケズリ 全体に横ナデ 回転糸切りの 間隔、周縁を静 止へラケズリ	不純物をあま り含まない	乳灰色	片口付 0002
10	环	口縫～一体部 外 現高	口径(復) 14.1 現高 4.3	A	外面 内面	口縫～一体部横 ナデ、底部周 辺回転へラケ ズリ 全体に横ナデ	微細な白石を 含む	赤褐色	0002, 0018

11	环	口縁~体部 外。底部充 分。	口径 底径 器高	15.6 8.0 5.5	A	外面 内面 底部	口縁~体部ロ クロ水びき調 整の後、底部 周辺静止ヘラ ケズリ 口縁~体部横 方向のていね いなヘラミガ キの後、底部 に一方向の同 様なヘラミガ キ 一方向の静止 ヘラケズリ	不純物をあま り含まない	褐色	「青」字墨鉛土 器。体部のロク ロ水びきによる 粘土の突出部分 をヘラミガキにし てある	0002, 0012	
12	环	口縁~体部 外	口径(復) 現高	14.1 4.4	C	外面 内面	口縁~体部ロ クロ水びき調 整	微細な白石・ 雲母片を含む	器壁内 器壁面	青灰色 黑色	0002	
13	环	口縁~底部 外	口径(復) 底径(復) 器高	18.4 10.6 5.6	C	外面 内面 底部	口縁から体下 部にロクロ水 びき調整した 後、底部周辺 を回転ヘラケ ズリ 口縁~体部ロ クロ水びき調 整 口縁に静止ヘ ラケズリの痕 跡が残る	微細な白石を 含む	器壁内 器壁面	桜色 黑色	0002	
14	瓶	口縁~体部 外	口径(復) 現高	31.4 19.8	C	外面 内面	口頭部から胴 部に平行タタ キを施した後 口縁~口頭部 に連続的な横 ナデ 方向不規則な 指ナデで凹凸 が目立つ、口 縁は横ナデ	微細な白石・ 雲母片を含む	黑色		0014	
15	瓶	口縁~胴下 部外	口径 底径 器高	30.6 15.4 26.0	C	外面 内面	胴部に平行タ タキを施した 後、口縁~口 頭部に横ナデ 胴下部には左 一右(反時計 回り)のヘラ ケズリが、胴 下端から大差 に上位に施さ れる 口縁部横ナデ 胴部横方向の ヘラナデ	微細な白石・ 雲母片を含む	桜色	胴部内面に輪積 状が残る		
16	瓶	口縁~底部 外	口径(復) 胸部最大径(復) 器高	18.2 20.4 10.3	C	外面 内面	底部~胴下半 部に右→左(反 時計回り) の静止ヘラケ ズリの後に、胴 上部にロクロ 水びき調整、口 縫部に横ナデ 全体にロクロ 水びき調整	微細な白石を 多く含むが、 雲母片は少な い	器壁内 器壁面	青 灰色、両 側は桜色 暗灰色	内面する口唇部 には強い横ナデ による条線が走 る。胴部内面に は赤色顔料の痕 跡が残る	0002, 0018
17	瓶	略定存	口径 胸部最大径 器高	22.2 24.3 13.6	A	外面 内面	胴部に右→左 (反時計回り) の静止ヘラケ ズリを行なっ た後を部分的 にヘラナデで 消している。 さらに口縫か ら胴上部にか けて横ナデ 全体に横方向 のナデ	微細な白石・ 雲母片を含む	器壁内 器壁面	赤褐色 黑色	内面する口唇部 には強い横ナデ による条線が走 る	0005

6(P4)号跡 (第17図)

調査区の南東隅近くに位置する土壤である。平面形は確認面で長径約1.45m、短径約0.7m、底面で長径約1.2m、短径約0.35mの長楕円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの



第17図 土壌実測図(1) (1/40)

掘り込み深さは約0.7mで底面は平坦である。出土遺物はない。

7(P14)号跡 (第17図)

調査区の中央よりやや東よりの平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約1.2m、短径約0.5m、底面で長径約0.9m、短径約0.25mの長楕円形を呈する。長軸方向は北を指す。確認面からの掘り込み深さは0.5~0.6mで、南側がやや浅くなっている。底面は平坦である。出土遺物はない。

8(P24)号跡 (第17図)

調査区西側の平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約2.1m、短径約1.1m、底面で長径約1.3m、短径0.3mの長楕円形を呈する。長軸方向は東を指す。確認面からの掘り込み深さは約0.5mで底面は平坦である。出土遺物はない。

9(P25)号跡 (第17図)

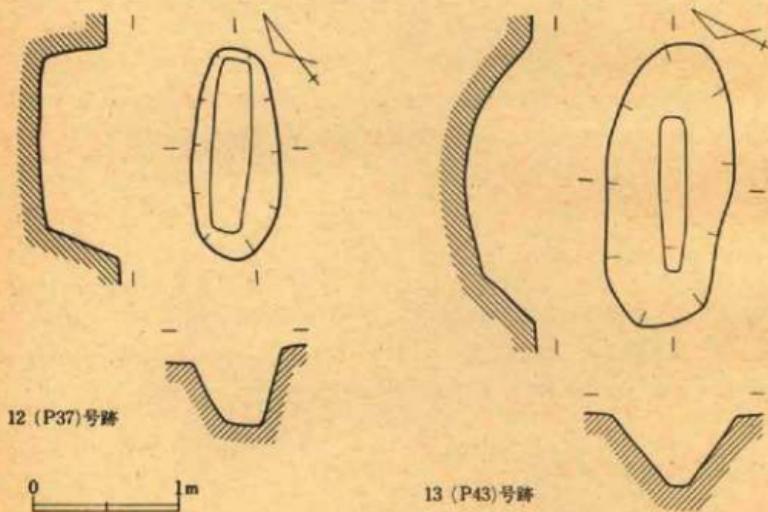
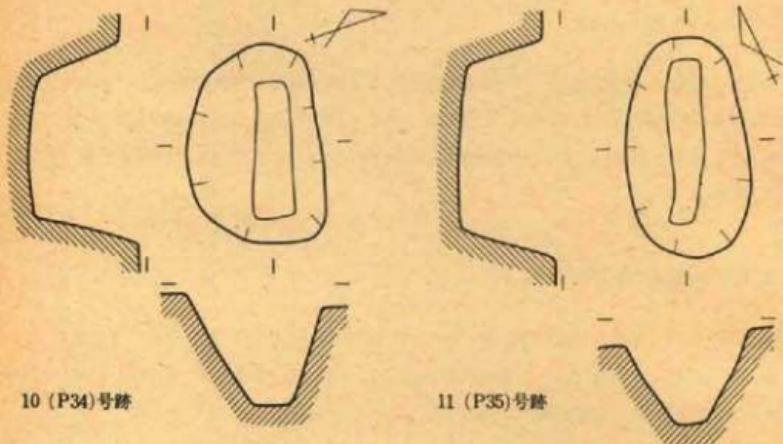
調査区南西隅の平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約1.5m、短径約0.7m、底面で長径約1.2m、短径約0.25mの長楕円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの掘り込み深さは0.35~0.55mを測り、南西側が浅くなっている。底面は平坦である。出土遺物はない。

10(P34)号跡 (第18図)

調査区北東側の平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約1.35m、短径約0.9m、底面で長径約0.9m、短径約0.25mの不整楕円形を呈する。長軸方向はおむね東を指す。確認面からの掘り込み深さは0.6~0.7mで底面は平坦である。出土遺物はない。

11(P35)号跡 (第18図)

10号跡の北约1mの平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約1.5m、短径約0.8m、底面で長径約1.1m、短径約0.25mの長楕円形を呈する。長軸方向はおむね北を指す。確認面からの掘り込み深さは0.5~0.65mで底面は平坦である。出土遺物はない。



第18図 土壤実測図(2) (1/40)

12(P37)号跡 (第18図)

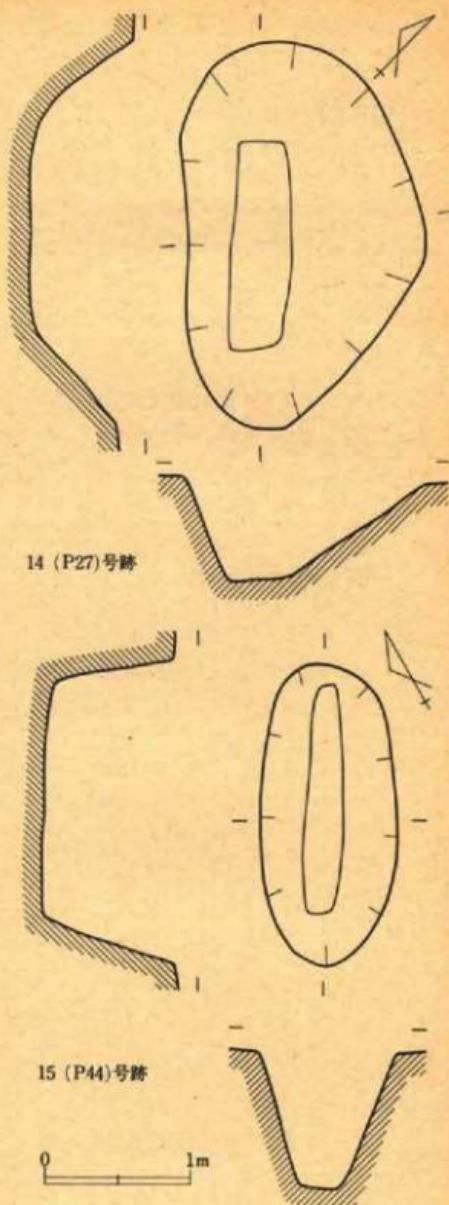
11号跡の北約13mの平坦部に位置する土壇である。平面形は確認面で長径約1.4m、短径約0.6m、底面で長径約1.15m、短径約0.25mの長椭円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの堀り込み深さは0.5m前後で底面は平坦である。出土遺物はない。

13(P43)号跡 (第18図)

8号跡の北約16mの平坦部に位置する土壇である。平面形は確認面で長径約1.9m、短径約0.9m、底面で長径約1m、短径0.2mの長椭円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの堀り込みは最も深いところで約0.5mを測る。出土遺物はない。

14(P27)号跡 (第19図)

9号跡の北東約8mの平坦部に位置する土壇である。平面形は確認面で長径約2.5m、短径約1.6m、底面で長径約1.4m、短径0.4mの不整形を呈する。東壁は崩壊によって東側へ張り出したものと推定される。したがって本来の平面形は、他の土壇と同じく長椭円形を呈していたものと思われる。長軸方向は北西を指す。確認面からの堀り込み深さは0.65m前後で、底面は



第19図 土壇実測図(3) (1/40)

ほぼ平坦である。出土遺物はない。

15(P44)号跡 (第19図)

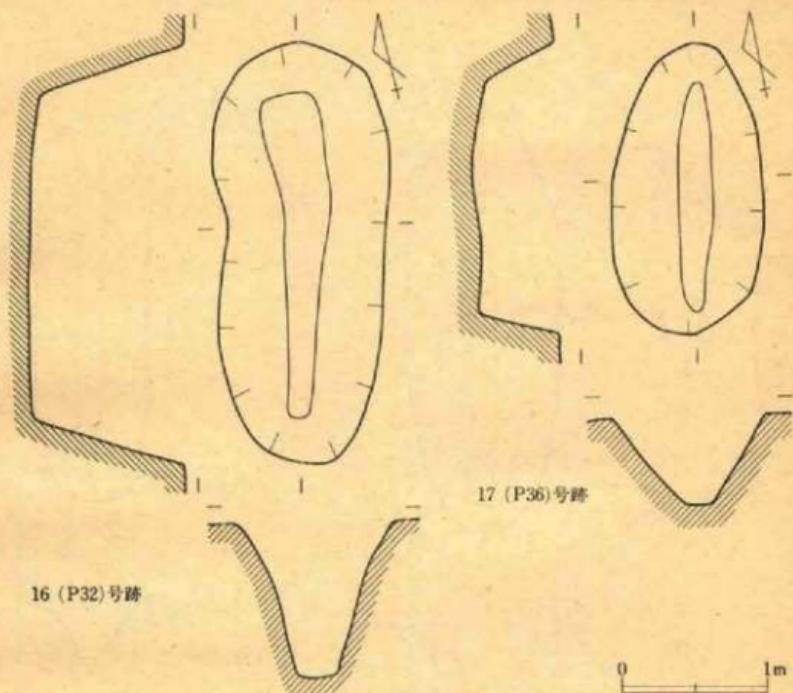
13号跡の東約4mの平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約2m、短径約0.9m、底面で長径約1.5m、短径0.25mの長楕円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの掘り込み深さは約0.9mで底面は平坦である。出土遺物はない。

16(P32)号跡 (第20図)

15号跡の南約1mの平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約2.7m、短径約1m、底面で長径約2.2m、短径0.2~0.4mの長楕円形を呈する。長軸方向はおむね北を指す。確認面からの掘り込み深さは約1.05mで底面は平坦である。出土遺物はない。

17(P36)号跡 (第20図)

11号跡の北約3mの平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約1.95m、短径約1m、底面で長径約1.5m、短径約0.25mの長楕円形を呈する。長軸方向は北を指す。確認面からの掘り込み深さは0.5m前後で、底面は大きく波打っている。出土遺物はない。



第20図 土壤実測図 (4) (1/40)

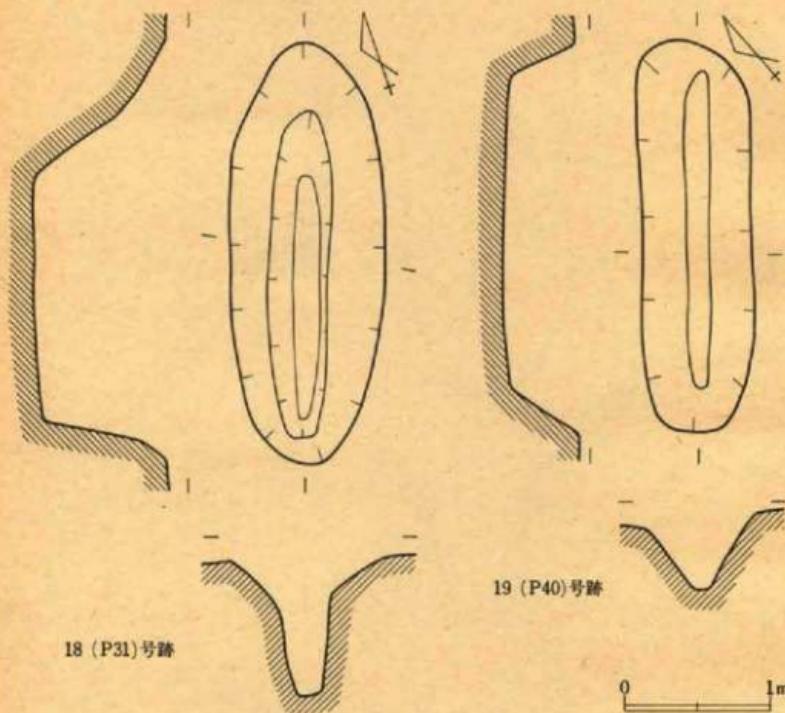
18(P31)号跡 (第21図)

16号跡の南に近接して位置する土壤である。平面形は確認面で長径約2.8m、短径約1.05m、底面で長径約1.6m、短径約0.2mの長楕円形を呈する。長軸方向はおおむね北を指す。確認面からの掘り込み深さは0.9m前後で底面は平坦である。出土遺物はない。

19(P40)号跡 (第21図)

17号跡の北東約4mの平坦部に位置する土壤である。平面形は確認面で長径約2.6m、短径

約0.75m、底面で長径約2.1m、短径約0.15mの長楕円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの掘り込み深さは0.5m前後で底面は平坦である。出土遺物はない。



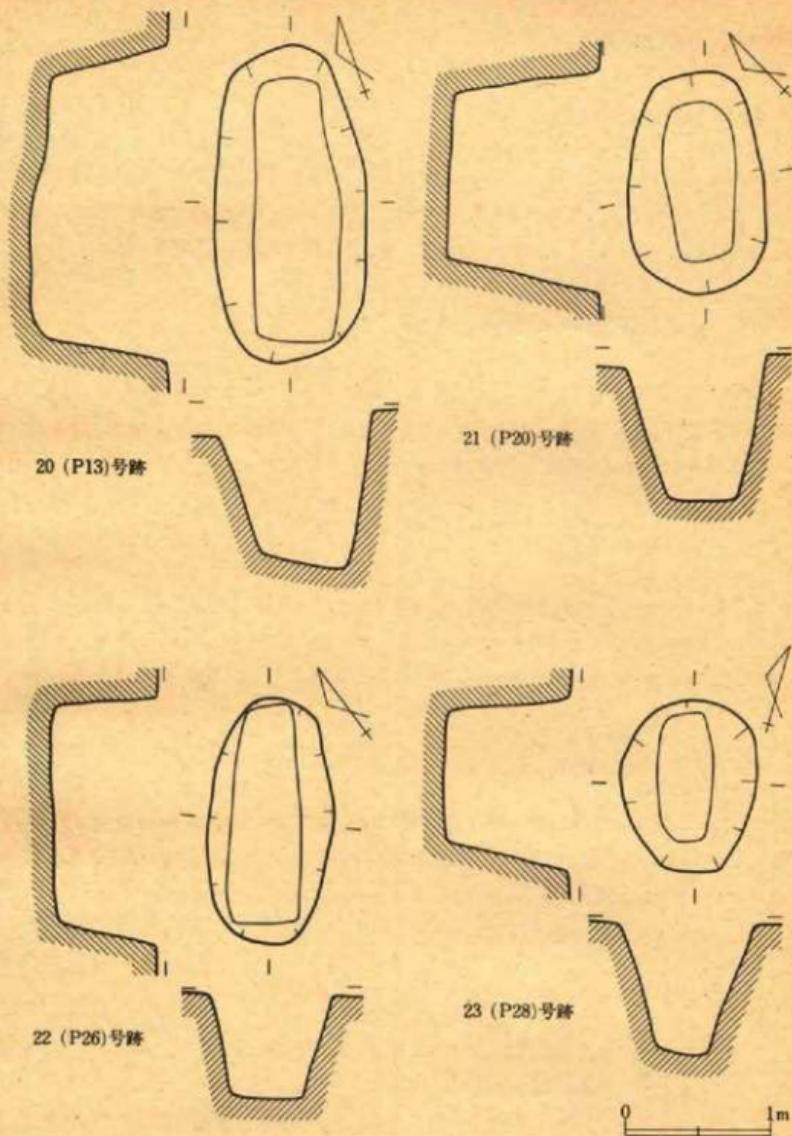
第21図 土壌実測図(5) (1/40)

20(P13)号跡 (第22図)

7号跡の北東約5mに位置する土壤である。平面形は確認面で長径約2.1m、短径約1.05m、底面で長径約1.75m、短径約0.6mの長楕円形を呈する。長軸方向はおむね北を指す。確認面からの掘り込み深さは0.8~0.95mで北側に比べて南側が深くなっている。出土遺物はない。

21(P20)号跡 (第22図)

調査区南側の平坦部に位置する土壤である。平面形は確認面で長径約1.5m、短径約0.9m、



第22图 土壤实测图(6) (1/40)

底面は長径約1.1m、短径約0.5mの長楕円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの掘り込み深さ1m前後で、底面は平坦である。出土遺物はない。

22(P26)号跡 (第22図)

9号跡の北約1mの平坦部に位置する土壇である。平面形は確認面で長径約1.6m、短径約0.85m、底面は長径約1.45m、短径約0.5mの長楕円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの掘り込み深さは0.7m前後で、底面はわずかに波打っている。出土遺物はない。

23(P28)号跡 (第22図)

14号跡の北東約11mに位置する土壇である。平面形は確認面で長径約1.15m、短径約0.95m、底面で長径約0.85m、短径約0.4mの楕円形を呈する。長軸方向は北西を指す。確認面からの掘り込み深さは0.9m前後で、底面は平坦である。出土遺物はない。

24(P16)号跡 (第23図)

7号跡の南西約12mの平坦部に位置する土壇である。平面形は長径約1.3m、短径約0.95m、底面で長径約0.85m、短径約0.7mの隅丸方形を呈する。長軸方向は西を指す。確認面からの掘り込み深さは0.75m前後で、底面はわずかに波打っている。出土遺物はない。

25(P18)号跡 (第23図)

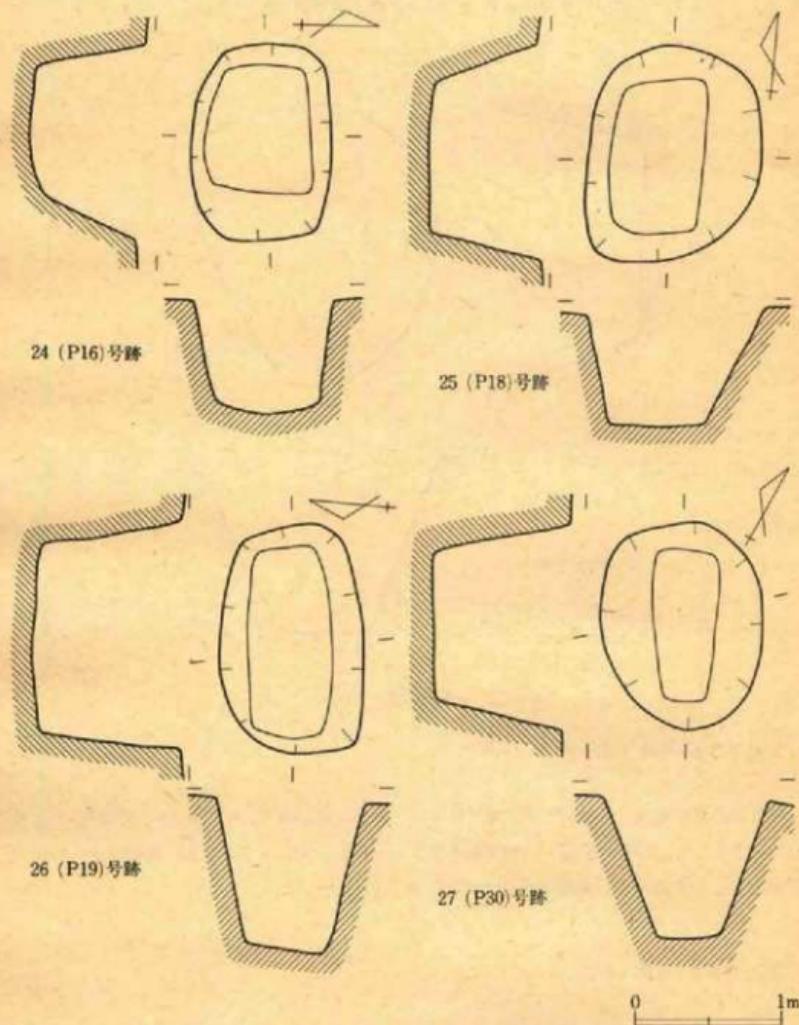
21号跡の北約11mの平坦部に位置する土壇である。確認面で長径約1.4m、短径約1.15m、底面で長径約1m、短径約1m、短径約0.65mの隅丸方形を呈する。長軸方向は北を指す。確認面からの掘り込み深さは0.75m前後で、底面は平坦である。出土遺物はない。

26(P19)号跡 (第23図)

25号跡の北東約2mの平坦部に位置する土壇である。確認面で長径約1.5m、短径約1m、底面で長径約1.25m、短径約0.6mの楕円形を呈する。長軸方向は東を指す。確認面からの掘り込み深さは1m前後で、底面わずかに波打っている。出土遺物はない。

27(P30)号跡 (第23図)

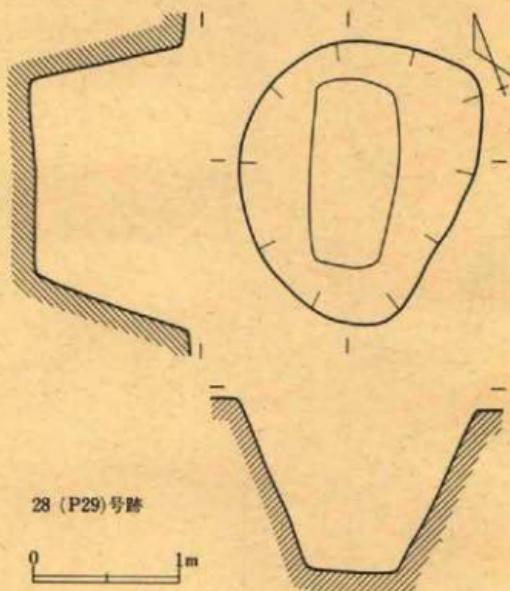
18号跡の西約1mの平坦部に位置する土壌である。平面形は確認面で長径約1.4m、短径約1.1m、底面で長径約1m、短径約0.45mの橢円形を呈する。長軸方向は北西を指す。確認面からの掘り込み深さは0.9m前後で、底面は平坦である。出土遺物はない。



第23図 土壌実測図（7）（1/40）

28(P29)号跡 (第24図)

8号跡の北東約3mに位置する土壙である。平面形は確認面で長径約1.9m、短径約1.6m、底面で長径約1.2m、短径約0.6mを測り、北東側が壁の崩壊によって張り出しているが、本来は椭円形を呈していたものと推定される。長軸方向は北北東を指す。確認面からの掘り込み深さは1m前後で、底面はわずかに波打っている。出土遺物はない。



第24図 土壙実測図(8) (1/40)

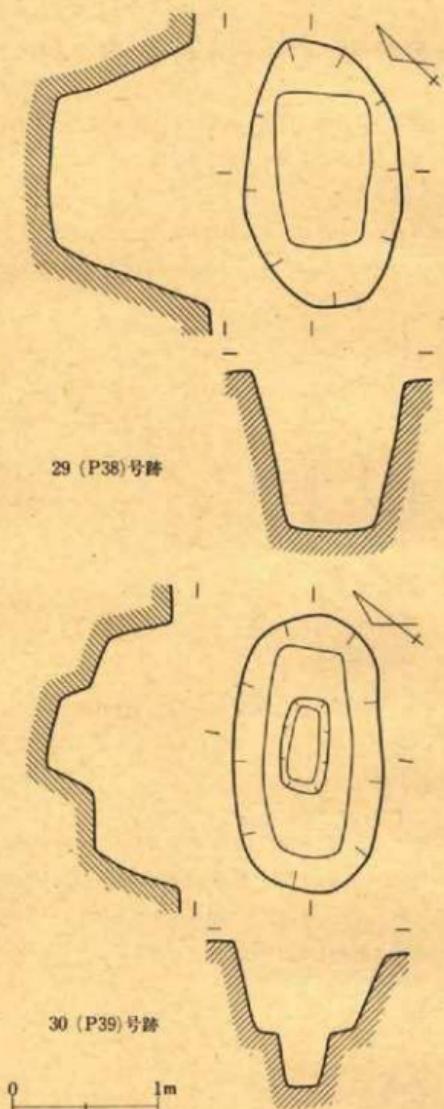
29(P38)号跡 (第25図)

12号跡の東に近接して位置する土壙である。平面形は確認面で長径約1.8m、短径約1m、底面で長径約1m、短径約0.65mの椭円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面からの掘り込み深さは1m前後で、底面は平坦である。出土遺物はない。

30(P39)号跡 (第25図)

29号跡の北约1.5mの平坦部に位置する土壙である。平面形は確認面で長径約1.85m、短径約1m、底面は長径約1.4m、短径約0.6mの長椭円形を呈する。長軸方向は北東を指す。確認面か

らの掘り込み深さは0.5m前後で、底面には長径約0.65m、短径約0.35m、深さ0.35mのピットがある。出土遺物はない。



第25図 土壌実測図(9) (1/40)

31(MO 1)号跡 (第3図)

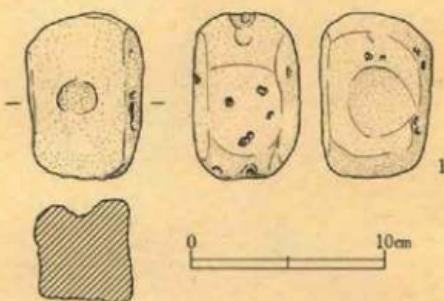
調査区のはば中央を南北に蛇行しながら走る大規模な溝状遺構である。

幅は2.5~8m、深さは1~2mで幅・深さとも一定しない。断面はおおむね薬研状を呈し、底面は凹凸が著しく、堅硬な部分と軟弱な部分がある。覆土は黄褐色土・黒色土を主体とし自然堆積の状態を示す。

出土遺物は少なく、覆土中より縄文時代の石器1点と縄文時代・歴史時代の土器の細片が出土したのみである。いずれも本跡に共伴する遺物ではない。

出土遺物 (第26図・図版9)

1は、くぼみ石兼すり石で、全長11.1cm、幅7.9cm、厚さ5.1cmを計る。中央に直径1.7cm、深さ0.6cmのくぼみがあり、石器の各コーナはすり減っている。また、全体的に敲打痕が観察される。



第26図 31 (MO 1) 号跡出土遺物 (1/3)

32(MO 2)号跡 (第3図)

調査区南側をほぼ東西に走る溝状遺構で、33号跡を切り、31号跡に切られている。

幅は1m前後、深さは0.3m前後を測る。断面は皿状を呈し、底面は比較的平坦であるが、全体に軟弱である。覆土はローム粒を多量に含む黄褐色土を主体とし、自然堆積の状態を示す。

覆土中より縄文時代後期・歴史時代の土器片出土したが、いずれも細片で図示できるものはない。

33(MO 3)号跡 (第3図)

調査区東側をほぼ南北に走る溝状遺構で、32号跡によって切られている。

幅は50cm前後、深さは30cm前後を測る。断面はU字状を呈し、底面は平坦であるが、全体に軟弱である。覆土はローム粒を含む褐色土を主体とし、自然堆積の状態を示す。出土遺物はない。

34(MO4)号跡 (第3図)

調査区西側をほぼ南北に走る溝状遺構である。
幅は2m前後、深さは0.3~0.5mを測り、断面形はおおむね箱蓋研状を呈する。底面は平坦で比較的堅硬である。覆土は褐色土を主体とし、自然堆積の状態を示す。出土遺物はない。

35(MO5)号跡 (第3図)

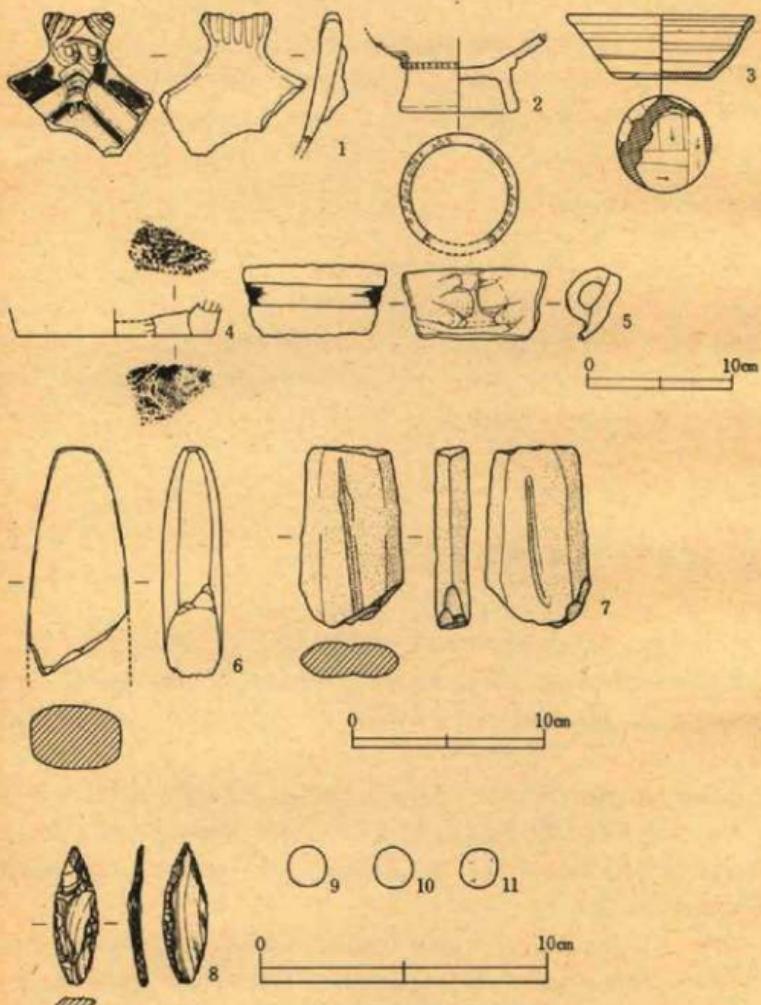
34号跡北側より枝別れして東へ走る溝状遺構である。
幅は1~1.5m、深さ0.2~0.3mを測り、断面形は箱蓋研状を呈する。底面は平坦で、全体にきわめて堅硬である。覆土は褐色土を主体とし、自然堆積の状態を示す。34号跡との分岐点から約18mの部分の南側壁面に、直径20cm前後、深さ10cm前後のピットを多數検出した。おそらく櫛列の痕跡であろう。出土遺物はない。

3. 包含層出土の遺物 (第27図・図版9)

- これらの遺物の多くは調査区の西半分より出土した。
- 1は縦文土器の口縁部破片である。2本の角状に伸びた突起部には粘土が貼付され、沈線や刺突が施される。周囲の口縁にはR^上の斜縦文が施文される。胎土には砂粒が多く色調は黒褐色を呈する。
- 2は縦文土器の底部破片である。塊形状に立ち上がる胴部には条線文が描かれ、胴部と台部との接合部には刻み目突帯が全周する。台部はミカキがかけられるが、台底面には下敷に用いられたものの圧痕が陰刻されている。なお、台部には赤色顔料の痕跡が見られる。台部底径8.2cm、残存高5.3cmを計る。
- 3は壺で、多少残存する。外反する体部は口縁付近で直立ぎみに立ち上がる。体部調整はクロ水びき、外底面は静止ヘラケズリで、底部面取りは1段のヘラケズリである。胎土はやや荒目の白石を多く含み、色調は青灰色を呈する。口径12.6cm、底径6.3cm、器高4.4cmを計る。
- 4はスリ鉢の底部破片である。底部及び体部内面はクシケズリ、底部外面は糸切り木調整、

体部外面は回転ヘラケズリを施す。全体に茶色の釉がかかる。胎土には小石は見られず均一で、焼成は堅緻である。色調は白色を呈する。底径（復原）13.4cm、現存器高2.2cmを計る。

5は内耳付土器である。口縁直下は強いロクロ水びきによって凹面を形成する。内耳部分は貼付後の余分な粘土を強いヘラケズリによって一気にそぎ落としている。残存する胸部は加熱



第27図 包含層出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

を受けて器肌が荒れている。胎土は小石を含まず、赤褐色を呈する。口径（復原）27.2cm、現存器高4.5cmを計る。

6は磨製石斧で、刃部を欠失する。各棱は明瞭で、全体に光沢を有する。現存長11.4cm、現存最大幅5.1cm、現存最大厚2.9cmを計る。

7は砾石で砂岩製である。偏平な板状を呈し、画面に溝状の使用痕を残す。現存長9cm、幅5.5cm、厚さ3.4cmを計る。

8はチャート製のポイントである。縦長剥片を利用して、裏面の1辺を除き丹念な二次調整を施して柳葉形に仕上げている。緑灰色を呈する。全長4.8cm、最大幅1.5cmを計る。

9～11は鉛製の鉄砲玉である。9は径13mm、重さ10.90g、10は径13mm、重さ11.45g、11は径13mm、重さ12.75gを計る。このうち9・10には3～4mm平方の平坦面が存在し、11には短い条線が多数見られる。いずれも色調は白灰色を呈する。

4. 小 結

六通遺跡において検出した遺構は、竪穴住居跡5軒、土壙25基、溝状遺構5本である。

縄文時代

縄文時代の竪穴住居跡としては、調査区の南東隅に1(DW03)、2(DW04)号跡の2軒を検出した。この2軒を検出した位置は、後期（加曾利B式期主体）の馬蹄形貝塚である六通貝塚の北西外縁部にあたるところから、2軒の住居跡とも六通貝塚の一部と考えるのが妥当であろう。2軒とも明確な時期決定ができるような証左は得られなかったが、覆土及び周辺より出土した縄文土器の大部分が加曾利B式であることや、上記の六通貝塚が加曾利B式期主体であることなどから、加曾利B式期の所産である可能性が高いものと思われる。

土壙25基は、いずれも出土遺物がないため時期決定するための確証を欠くが、近年、縄文時代の落し穴であるとして注目されている土壙にその形態が酷似しているところから一応ここでは縄文時代の落し穴としておく。

歴史時代

歴史時代の住居跡としては、3(DW02)、4(DW01)、5(DW05)号跡の3軒を検出した。いずれもその出土土器からみて国分期の所産である。このうち5(DW05)号跡は遺物量も比較的豊富であり、また内容的に見て指摘すべき若干の問題を含んでいるように思われる。その第一点は從来「くすべ焼き」と称されてきた土師器と須恵器の中間的な焼成の土器群に関する問題であり、第二点は「鉄鉢」と称される特異な形態の鉢形土器に関する問題である。

5号跡からは、中間焼成土器が9点出土しており、このうち壺、甕、瓶は6点を数える。こ

の一群が残余の杯、鉢と形態的に最も異なる点は、口縁部形態が例外なく二重口縁となっている点である。III-1での観察結果に基づいて、この部分の成形法および調整法の差異に従う分類を試みれば次のようなものになろう。

第I類 折返し口縁をもつもの……第14図8

第II類 半折返し口縁をもつもの……第14図7

第III類 貼付口縁をもつもの

a 調整痕が沈線状を呈するもの……第14図1、第15図15

b 貼付粘土帯(紐)が薄いため調整痕が沈線状を呈さないもの……第15図14

ちなみに3号跡の1は第I類に属している。

1軒の住居跡からの出土資料をこのように細分類することの可否は残念ながら本遺跡の資料だけからでは判明しない。しかしながら、1軒の住居跡からの出土資料でさえ、その口縁成形上にこれだけの多様性が見られるという現象は、住居跡の耐用期間を下回る時間帯を以って、二重口縁を伴うこの種の土器の編年作業に可能性を開くものである。なお、中間焼成土器の二重口縁部の断面観察に際しては、予めエアー・ブラシによる断面清掃を試みたことを付記しておく。

第二点は鉄鉢形土器の問題である。本遺跡の鉄鉢形土器は国分式土器を伴う住居跡から出土しており、その年代は9世紀頃に比定できる。この形態の土器は口縁直下が内脇し、口縁端が平面を成すこと、および底部が鈍い尖底または丸底を呈すること等が基本的な特徴である。類例としては正倉院に伝世された施釉の優品が有名である。陶邑や猿投等の古窯址群では奈良～平安時代にかけて少數ながらこの種の土器が生産されていたことが判明している。

鉄鉢形土器は、その祖形である金属製の同形鉢と同様に、仏具として僧尼が托鉢に使用したり、供養器として用いたものであり、さらに骨蔵器に転用された例もある。事実この土器は古刹が永い間伝世して現存する場合や、寺院跡から出土する場合が多く、その所有者または使用者としては、僧尼あるいはそれに準ずるような信仰者が想定することができる。ところが鉄鉢形土器を出土した本遺跡は竪穴集落跡の一部であり、出土住居跡も周囲のそれとあまり変わりばえがない。この事実は僧尼あるいはそれに準ずる信仰者でありながら寺院に隣居せず、ありふれた竪穴村落の一構成員であった人々が存在したことを示している。この人々の歴史的な性格規定は今後に残された課題であるが、本遺跡は平安朝初期における民衆仏教の実態を知る上に貴重な一資料となるであろう。

時代不詳の遺構

時代不詳の遺構として溝状遺構5本に検出した。いずれも共伴する遺物の出土ではなく、時代決定をするための証左を欠いている。また、その性格も不明である。ただ、5本ある溝状遺構のうち、大規模な31号跡と柵列の痕跡と思われるピットを有する35号跡は、他の溝状遺構とはその性格を異にするようである。あるいは城館跡等に関連する遺構であるかもしれない。

IV 御 塚 台 遺 跡



- | | | |
|---------------|------------|-----------|
| 1. 御坂台遺跡 | 2. ムコアラク遺跡 | 3. 小金沢古墳群 |
| 4. 六通遺跡 | 5. 六通金山遺跡 | 6. 椎名崎古墳群 |
| (A支群、B支群、C支群) | | 7. 木戸作遺跡 |
| 8. 椎名崎遺跡 | 9. 有吉遺跡 | |

第28図 御塚台遺跡と周辺遺跡 (1/25,000)

1. 御塚台遺跡の位置と周辺の遺跡

御塚台遺跡は、千葉市小金沢93他に所在する。

遺跡は下総台地上にあり、現在の海岸線より4.7km程内陸に入った所に位置する。遺跡の立地は、西流して東京湾に流入する村田川の下流域北岸にあたり、樹枝状に浸蝕された支谷の奥まった所に存する。遺跡は複雑に浸蝕された北側から南側へのびる小舌状台地の基部に立地する。

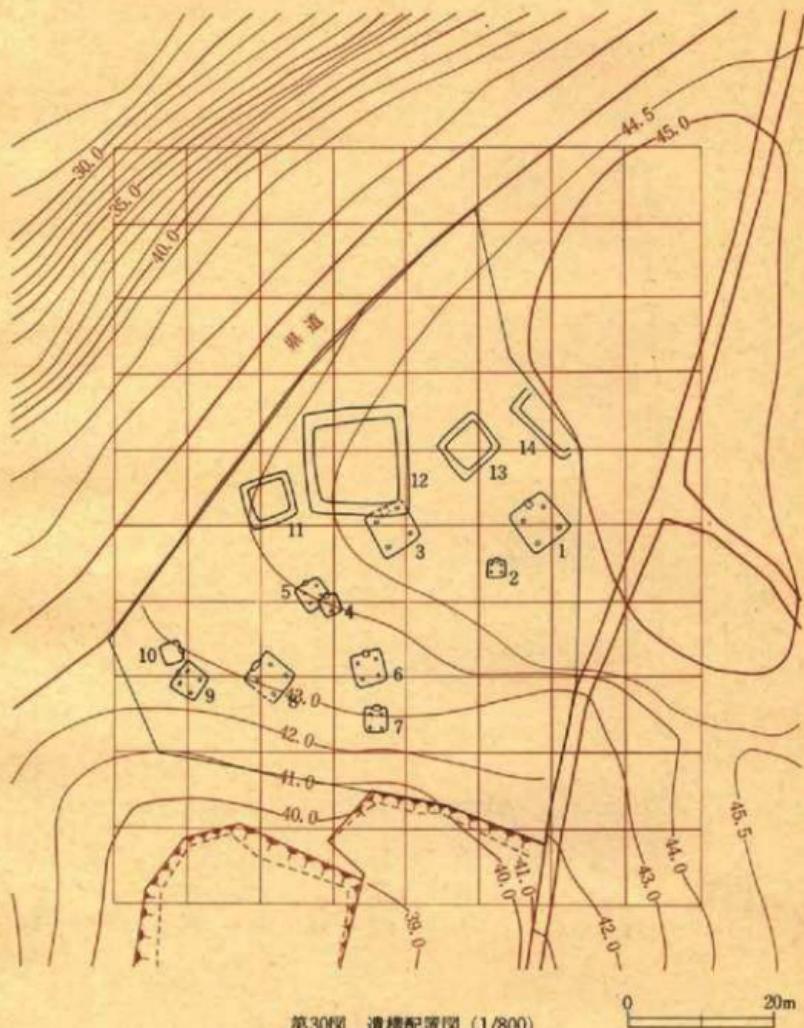
遺跡の立地する小舌状台地基部は、南側の谷津に面する。基部から南側谷津へは緩やかに傾斜し、東側谷津へは急斜面で臨む。標高約40m、水田面との比高約12mを測る。

本遺跡の周辺には多くの遺跡がみられる。御塚台遺跡とはほぼ同様な性格をもつ集落址としてムコアラク遺跡、木戸作遺跡、椎名崎遺跡、有吉遺跡などがあげられる。とくにムコアラク遺跡とは、東側の谷津を挟んで対峙している。また周辺には、小金沢古墳群、椎名崎古墳群、六



第29図 御塚台遺跡周辺地形図 (1:5,000)

通古墳群などの集落と比較的近接した古墳群がみられる。とくに小金沢古墳群は同一台地上の北側約200mの位置に存在する。対峙するムコアラク遺跡のなかにも古墳群が発見されている。これらの古墳群はほとんど古墳時代後期に含まれるもので、御塚古墳跡および同様の性格をもつ集落跡との空間的関連性が注目される。

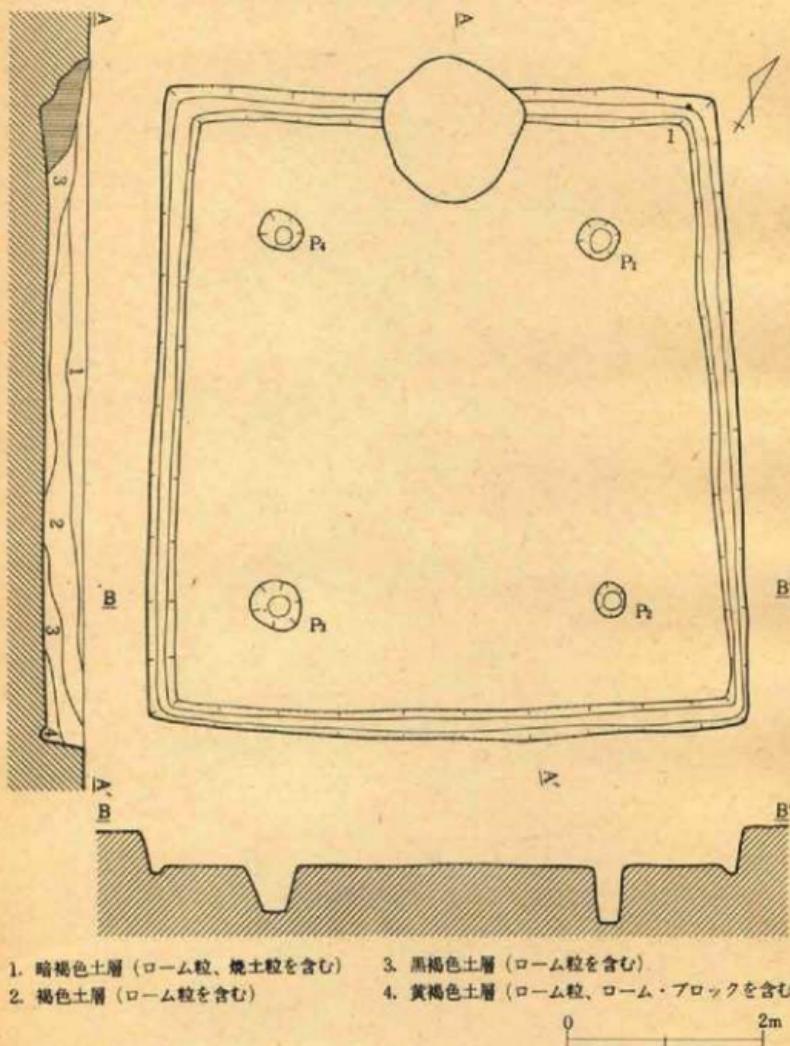


第30図 遺構配置図 (1/800)

2. 検出した遺構と遺物

1(004)号跡 (第31・32図、図版11)

調査区東側の平坦部近くに位置する竪穴住居跡である。



第31図 1(004)号跡実測図 (1/60)

構造

平面形—東西壁6.3m、北壁5.7m、南壁6.3mである。北壁は南壁に比べて0.6m狭く、台形を呈する。

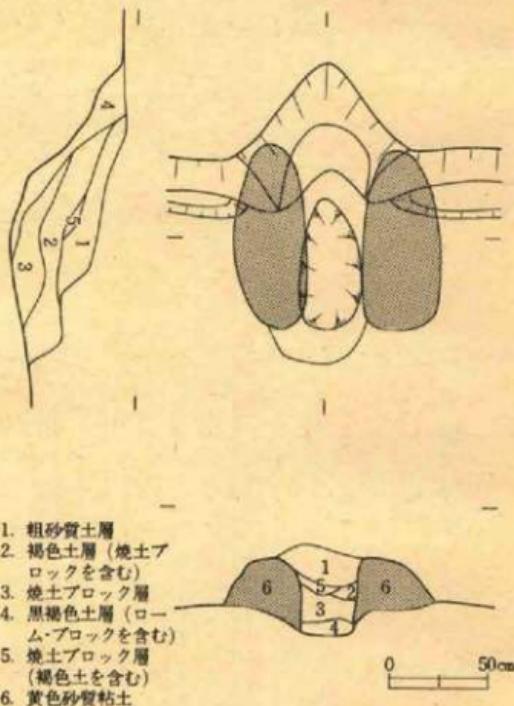
壁—確認面からの壁高は40~45cmで、わずかに外側に開く。

床—全体に平坦で堅緻である。特にカマド前面部はよく踏み固められている。

壁・溝—カマド下を除いて壁直下を全周する。幅8~20cm、深さ5~10cmで、底面は平坦である。

柱穴—P₁=62cm、P₂=56cm、P₃=44cm、P₄=61cmで、ほぼ対角線上に位置する。

カマド—北壁のほぼ中央に位置する。抽部の遺存状態は比較的良好で床面上に砂質粘土を直接置いている。煙道の立ち上がりは緩やかで、壁外への切り込みは約50cmを測る。



第32図 1(004)号跡カマド実測図 (1/30)

覆土の状態

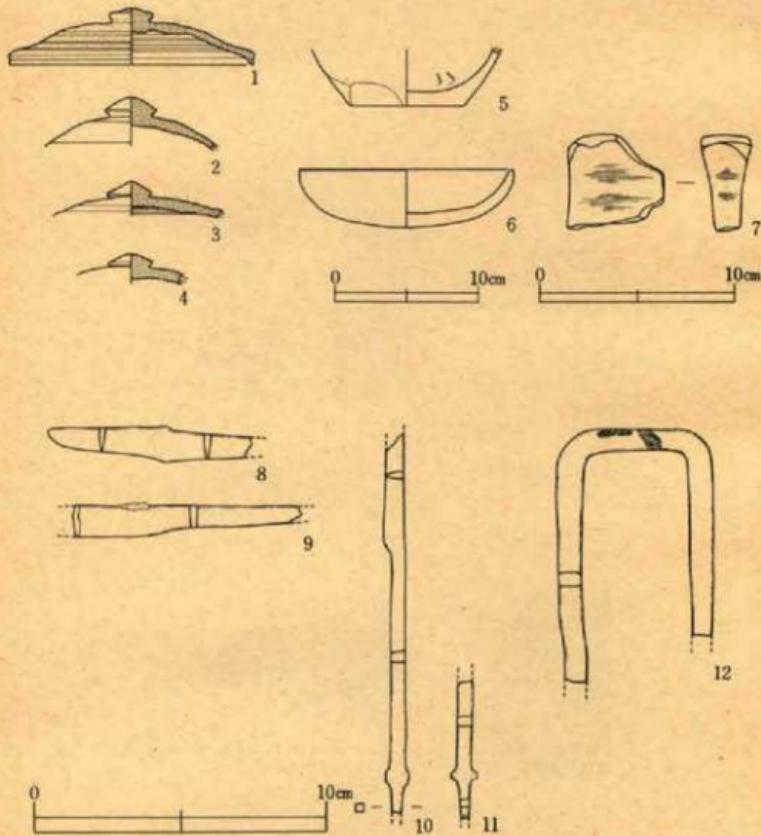
4層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

遺物量は比較的多いが、大半は覆土中より出土している。北東コーナの壁面に密着した状態で出土した1のみが本址に伴うものと思われる。

出土遺物（第33図、図版18・19）

1～4は蓋で、2～4は天井部片のため全体の形状は不明である。1は口径に比して器高が低く、身受け部が「く」字状に屈曲する。身受け端部は若干丸味を帯びる。1～5は、いずれ



第33図 1 (004) 号跡出土遺物 (1/4・1/3・1/2)

もロクロ成形され、天井部に回転ヘラ削りが施される。擬宝珠形つまみは各個体につくが、1はやや偏平な形状を呈する。

5は甕の底部である。

6は环で、体部に棱をもたず、口縁部は内彎ぎみになる。全体に丁寧な指ナデが施される。

7は凝灰岩製の砥石で、欠損品の再利用であろう。利用面は5面あるが、側面の利用度は少なく小さな凹凸を残している。他の3面はかなりの磨滅を生じ、きわめて平滑である。

8は刀子で、茎尻部を欠き、残存長6.9cmを計る。闊は両闊で、闊幅1.2cmを計る。鋒部は短かく、棟は平棟で先細りとなる。茎部は断面台形を呈し、幅0.8cmを計る。

9は刀子で、鋒部および茎尻部を欠き、残存長7.8cmを計る。

1 (004) 号跡出土土器一覧

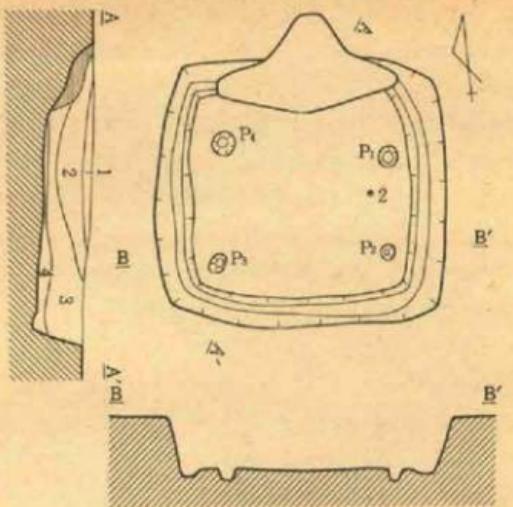
遺物番号	器形	直存度	法量(cm)	地成相	成形・調整	胎土	色調	備考
1	蓋	全体の3/4	口径 器高 16.6 3.8	B	ロクロ水引き 天井部外面上半部回 転ヘラ削り 身受け部内外面とも 指ナデ	密 砂粒をほとんど含まない	明灰色	外面全体に釉 加熱のため表面 発黒 0021
2	蓋	全体の3/4	現高 3.3	B	ロクロ水引き 天井部外面上半部回 転ヘラ削り(反時計 回り) 宝珠つまみ部上面回 転指ナデ	密 砂粒をほとんど含まないが 内壁1ヶ混存	明灰色	0015
3	蓋	全体の3/4	現高 2.5	B	ロクロ水引き 天井部外面上半部回 転ヘラ削り (時計回 り) 宝珠つまみ部上面回 転指ナデ	密 砂粒をほとんど含まない	明灰色	0005
4	蓋	破片	現高 2.0	B	天井部外面上半部回 転ヘラ削り(反時計 回り) 宝珠つまみ部上面回 転指ナデ	密 砂粒をほとんど含まない	灰白色	地成軟質 0002, 0027
5	甕	底部	底径 現高 7.8 3.8	A	外側 脚下部ヘラ削 り(→)後 ヘラナデ 底部ヘラ削り 後部分的ヘラ ナデ 内側 脚位ヘラナデ	やや密 砂粒混入は少 ない	明褐色	脚下部から近部 にかけて部分的に黒斑あり 0023
6	环	全体の3/4	口径(復) 器高 14.6 3.9	A	内外面とも指ナデ	密 砂粒混入は少 ない	乳褐色	外面に黒斑あり 0027, 0028

2(005)号跡 (第34・35図、図版11)

1号址の南西約4mに位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—北壁2.7m、東壁2.4mで、各隅は丸味をもち、壁は弱い調張りをもつ。



1. 暗褐色土層
2. 褐色土層（ローム粒を含む）
3. 暗褐色土層（ローム粒を含む）
4. 茶褐色土層（ローム粒、ローム・ブロックを含む）

第34図 2(005)号跡実測図 (1/60)

壁 一確認面からの壁高は40~50cmで外側に開く。

床 面一西・南壁近くを除いて平坦で堅硬である。特にカマド前面部から住居中央にかけてはよく踏み固められている。

壁 溝一カマド下を除いて、壁直下を全周する。幅20cm前後、深さ5cm前後で底面は小さな凹凸が著しい。

柱 穴—P₁—8cm, P₂—8cm, P₃—10cm, P₄—8cmでいずれも浅い。

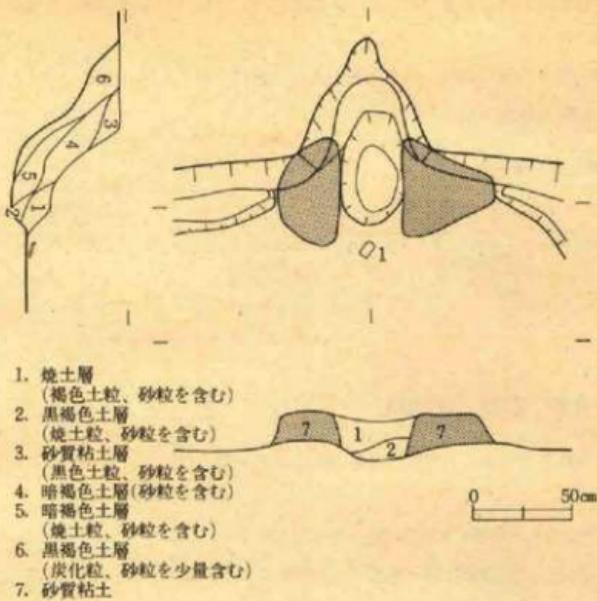
カマド—北壁のはば中央に位置し前面部はかなり削平されている。袖部は砂質粘土を部材として用い、下半部の遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上りは比較的緩やかで、壁外への切り込みは約60cmを測る。

覆土の状態

4層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

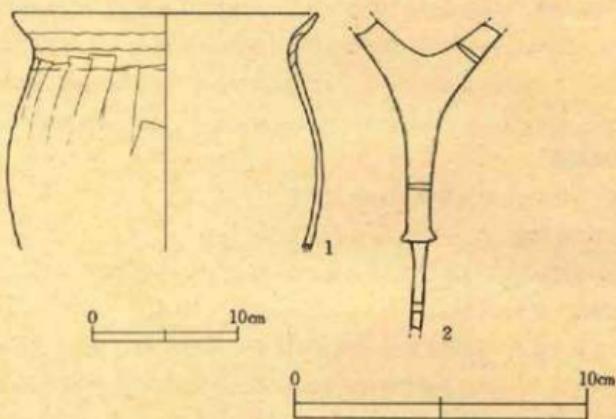
遺物量は少なく、カマド焚口部より窓、床面から若干浮いた状態で鉄錫が出土したのみである。



第35図 2 (005) 号跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (第36図、図版19)

1は甕で、口縁部が緩やかに外反し、口唇部が若干受け口状を呈する。頸部から口縁部にかけ



第36図 2 (005) 号跡出土遺物 (1/4・1/2)

けて接合痕が比較的明瞭に3条認められる。胴部のほぼ中位に最大径を有し、やや球形を呈する。器壁は薄手である。

2は雁股鉢と呼ばれる鉄鉢で、根先端部および基尻部を欠く。残存長10.2cmを計り、根は棘状突起により明瞭に区別される。

2(005)号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	発掘場	成形・調整	粘土	色調	備考
1	甕	口縁一部上半分	口径(復) 20.8 胴部最大径(復) 21.6 現高 15.8	A	外面 口縁部は擦ナデ、胴部はヘラケズリ(+) 時計回り 内面 口縁部ナガ(+) 胴部はナデ	砂粒若干	乳白色	胴部外延に擦及び地土付着 0007, 0008 0009

3(006)号跡(第37図、図版12)

2号跡の西約10mに位置する竪穴住居跡である。北東隅を12号跡によって切られている。

構造

平面形—北壁5.6m、東壁5.9mで、整った方形を呈する。

壁 一確認面からの壁高は50~60cmで、わずかに外側に開く。

床 面全体に平坦で堅緻である。

壁溝—北壁中央部を除いて、壁直下を全周する。壁溝の切れている部分はカマド下と推定される。

柱穴—P₁—43cm, P₂—52cm, P₃—52cm, P₄—44cmで、深くしっかりしており、ほぼ対角線上に位置する。

カマド—壁溝の切れる北壁中央部に位置していたものと推定される。P₄の東側床面より破壊されたカマドの一部と推定される砂質粘土を検出した。なお図版12によればカマドの両袖が遺存しているように見えるが、これは砂質粘土塊が偶然にこの様な形となつたもので、本址のカマドは12号跡によって完全に破壊されていた。

覆土の状態

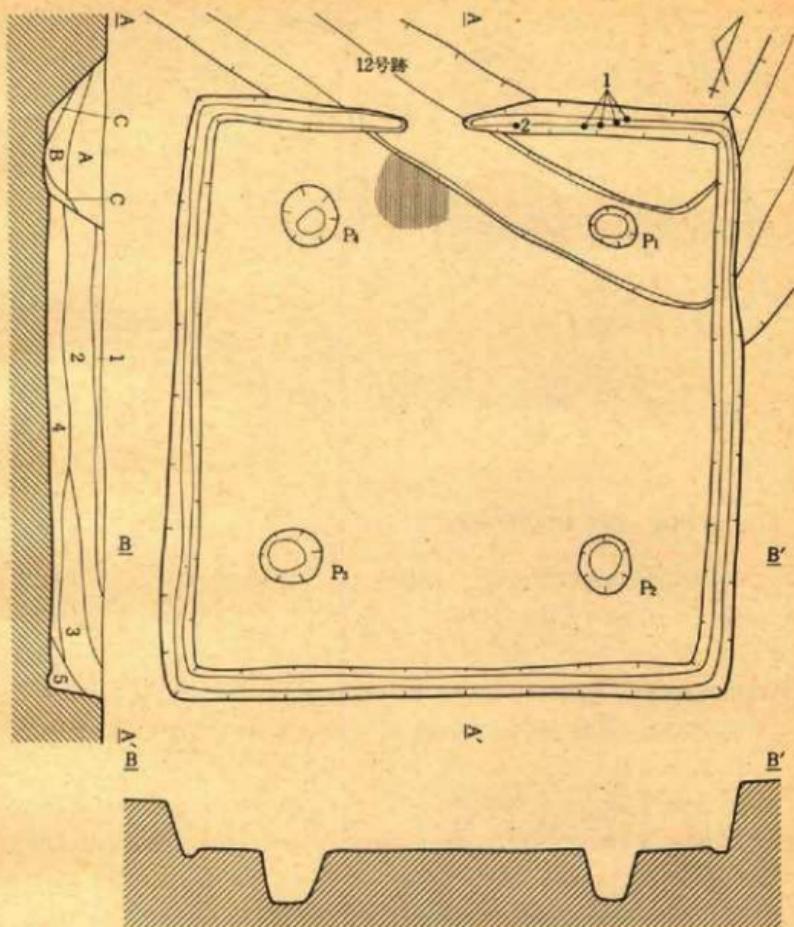
5層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

遺物の量は少なく、北側周溝より土製支脚が出土したのみである。

出土遺物(第38図、図版19)

1は土製支脚で、頂部径4.2cm、基底部径12.8cm、器高21.5cmを計る。基底部が若干広がる円柱形を呈する。胎土には多量の砂粒を含むため器面が荒れています。成形法の詳細は不明であるが、ヘラ削りが施されていると思われる。器表面の接合痕と割れ口から成形法が観察される。上半部は小粘土塊を多数貼り付けて成形し、下半部は3つの大粘土塊で構成している。そして上半



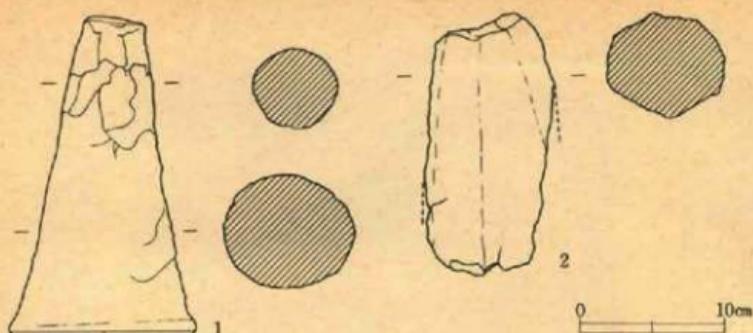
1. 黒褐色土層
2. 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
3. 褐色土層 (ローム粒を含む)
4. 褐色土層 (ローム・ブロックを含む)
5. 黄褐色土層 (ローム粒、ローム・ブロ
ックを含む)

- 12号跡-
- | | |
|-----------------------|----|
| A. 暗褐色土層
(ローム粒を含む) | 0 |
| B. 暗褐色土層 | 1 |
| C. 褐色土層 | 2m |

第37図 3 (006) 号跡実測図 (1/60)

部の接合は、上半部を下半部の3つの大粘土塊によってはさみ込むようにしている。

2も土製支脚で、下半部を欠損するため全体は不明であるが、残存部分は七角形の柱状を呈する。



第38図 3(006)号跡出土遺物(1/4)

4(008)号跡 (第39・40図、図版12)

3号跡の南西約10mの緩斜面に位置し、5号跡を切っている。今回の調査において検出した竪穴住居跡の中では最も小規模なものである。

構造

平面形—北壁2.6m、東壁2.4mの整った方形を呈する。

壁—5号跡との重複部分を除くと確認面からの壁高は30~50cmで、ごくわずかに外側へ開いている。

床面—全体に堅緻であるが、凹凸が著しい。

壁溝—カマド下を除いて全周する。幅は5~10cm、深さは5cm前後で、底面は凹凸が著しい。

柱穴—P1-10cmと浅く、南壁近くの中央に位置する。

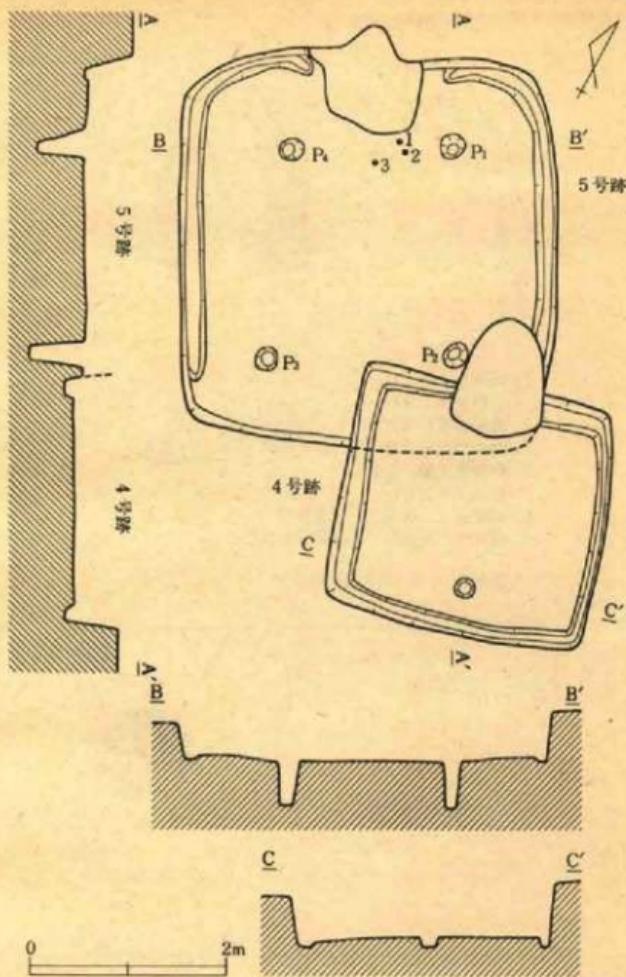
カマド—北壁のはば中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、壁への切り込み内から八字状にのびている。袖部の内壁は火熱によって焼土化している。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは緩やかで、壁外への切り込みは約70cmを測る。

遺物の出土状態

遺物の量は少なく、カマド内より甕・杯が、覆土中より鐵鏟が出土したのみである。

出土遺物 (第41図、図版20)

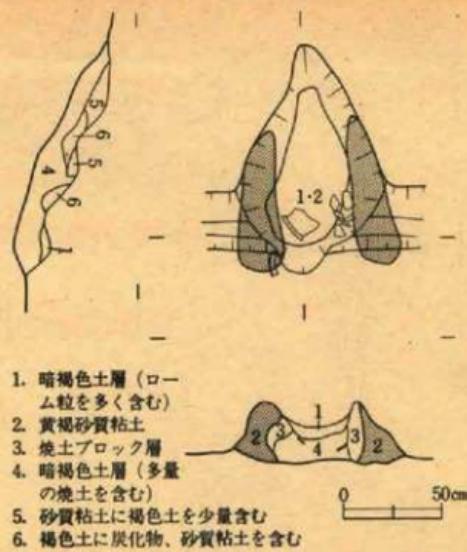
1は甕で、口縁部が「く」字状に外反するが、中位に棱をもちそれより上位は外反の度合いを弱める。器壁は胴部で薄く、口縁部で肥厚する。



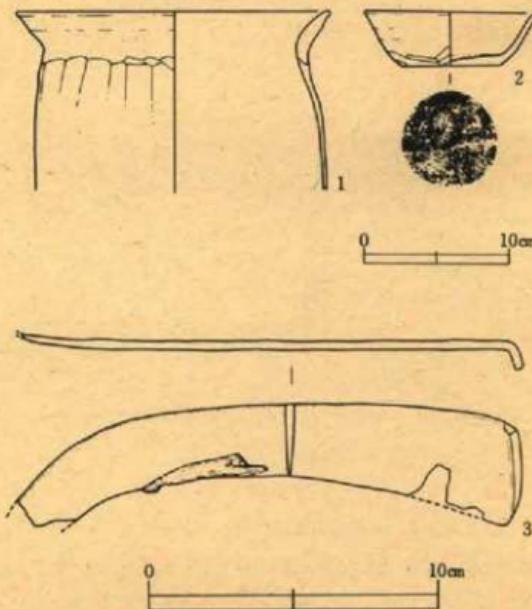
第39図 4 (008)・5 (009) 号跡実測図 (1/60)

2は環で、ロクロ成形による。体部は直線的に開き、口唇部は丸味を帯びる。

3は鉄鎌で、鋒部先端を欠く。残存長17.2cm、中央部身幅2.4cmを計り、先細りとなる。棟は平棟で断面三角形を呈し、棟と刃がほぼ同様なカーブで背曲する。基部は全体を折り曲げている。刃部の一部に木質の付着が認められた。



第40図 4(008)号跡カマド実測図 (1/30)



第41図 4(008)号跡出土遺物 (1/4・1/2)

4(008)号跡出土土器一覧

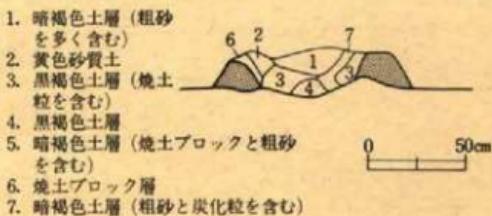
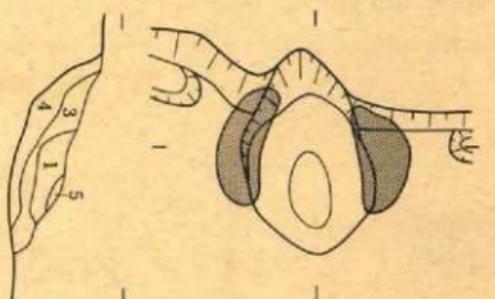
遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	被皮層	成形・調整	胎土	色調	備考
1	甕	口縁～胴上半	口径 現高 底径	21.4 12.8	A	外面 口縁部は楕ナデ、脇部へラケズリ(1) 内面 口縁部は楕ナデ、脇部はナデ	密砂粒若干	黄褐色 0002, 0005, 0006 0008, 0010, 0011 0014
2	环	ほぼ完形	口径 現高 底径	11.7 3.6 6.7	A	クロ型 切り離し不明 外面 ベクナデ、体下部手持ちヘラケズリ、底部は外側手持ちヘラケズリ (反時計回り) 内面	密砂粒若干	黄褐色 0012, 0013 0014

5(009)号跡 (第39・42図、図版12)

4号跡の北東側に位置し、4号跡によって一部を切られている竪穴住居跡である。

構造

平面形一東南隅及び南壁の約半分が4号跡によって切られているが、北壁約3.9m、西壁約3.8mの方形を呈すると思われる。



第42図 5(009)号跡カマド実測図 (1/30)

壁 一確認面からの壁高は30~40cmで、わずかに外側へ開いている。

床 面全体に堅緻で、特にP₁~P₄の柱穴より内側は小さな凹凸が認められるがよく踏み固められている。

壁 溝一カマド下、南壁及び南北、南東の隅を除いて、壁直下に巡る。幅は10~20cm、深さは5~10cmで、底面は凹凸が著しい。

柱 穴—P₁—47cm, P₂—57cm, P₃—45cm, P₄—44cmで、P₃が南西隅にやや偏っている。カマド—北壁のほぼ中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用いている。左袖の内壁は火熱によって焼土化している。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは比較的緩やかで、壁外への切り込みは約20cmを測る。

遺物の出土状態

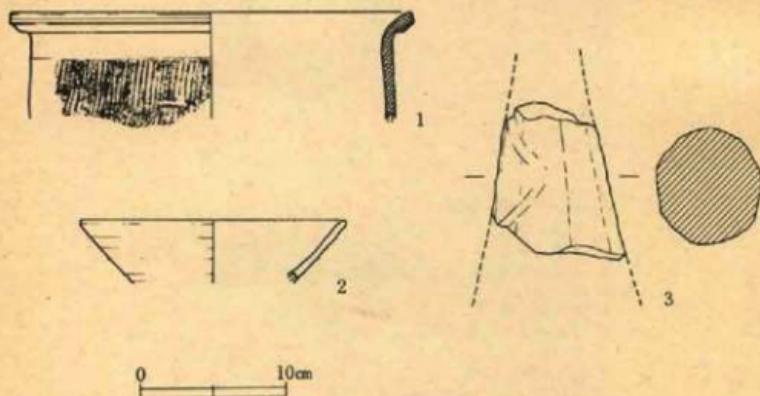
遺物の量は少なく、カマド前面の床面より1~3が出土したのみである。

出土遺物（第43図、図版20）

1は腰で口縁部は肥厚し大きく開く。口縁部上端の調整はオサエ様に強く、調整痕が沈線状を呈する。口縁部下端の調整は良好で、比較的なめらかに肩部へ続く。胴部はほとんど張りをもたず肩部から直線的に続く。胴部には平行叩き目が施されるが、上端はナデにより消されている。

2は杯で、ロクロ成形される。体部は直線的に開き、口唇部は丸味を帯びる。

3は土製支脚の破片で、中央部径7.1cm、現高10.5cmを計る。胎土は砂を多く含み、もろい。器表面の剥離痕から観察する限り、心となる粘土塊に、厚さ1cm前後の粘土板を貼り付けているようである。



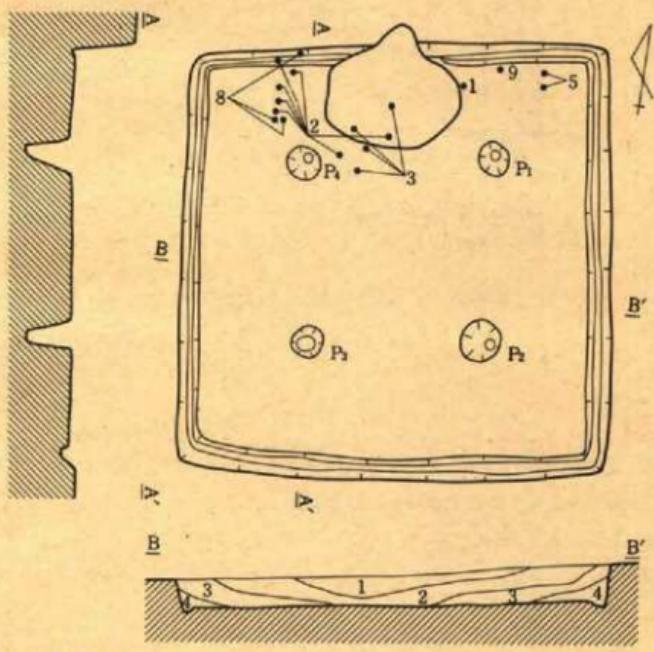
第43図 5 (009) 号跡出土遺物 (1/4)

5(009) 号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	重存度	法量(cm)	焼成場	成形・調整	胎土	色調	備考
1	甕	口縁～肩上 半破片	口径(復) 現高	27.2 7.0	C	外面 口縁部回転へ ラダ。肩部 叩き切。縁口 縁下回転横ナ ダ 内面 口縁部回転ナ ダ。肩部横ナ ダ	やや粗い 砂粒若干	器壁外 赤褐色 器壁内 褐色
2	甕	体部片	口径(復) 現高	18.0 4.2	A	ロクロ水引き	黄 砂粒若干	暗黃褐色 体部内外面に煤 付着 0002

6(010) 号跡 (第44・45図、図版13)

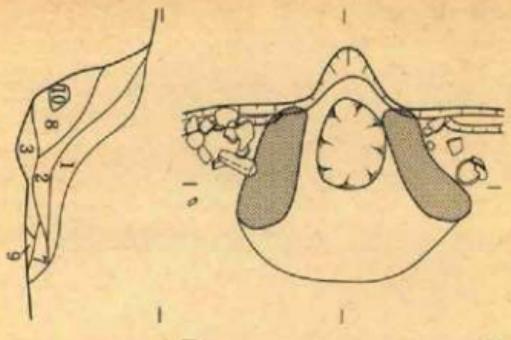
4号跡の南東約6mの緩斜面に位置する竪穴住居跡である。



1. 黒褐色土層
2. 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
3. 黒褐色土層 (ローム・ブロックを含む)
4. 茶褐色土層

0 2m

第44図 6(010)号跡実測図 (1/60)



1. 棕色土層（粗砂、ローム・小ブロックを含む）
2. 棕色土層（焼土粒を多く含む）
3. 赤褐色土層（焼土粒を多く含む）
4. 黒褐色土層（焼土粒を含む）
5. 棕色土層（焼土粒、ローム・小ブロックを含む）
6. 黄色砂質粘土
7. 明褐色土層（焼土ブロック、粗砂を含む）
8. 棕色土層（粗砂を多く含む、焼土ブロックが混じる）
9. 黑褐色土層（焼土粒を含む）
10. 烧土ブロック

第45図 6 (010) 号跡カマド実測図 (1/30)

構造

平面形—北壁4.3m、東壁4.3mで整た方形を呈する。

壁—確認面からの壁高は10~60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床面—全体に平坦で堅緻である。

壁溝—カマド下を除いて、壁直下を周囲する。幅10cm前後、深さ5cm前後で底面は凹凸が著しい。

柱穴—P₁=48cm, P₂=43cm, P₃=46cm, P₄=48cmで、平面プランのほぼ対角線上に位置する。

カマド—北壁の中央よりわずかに西へ偏って位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、壁よりハ字状にのびている。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは比較的急で、壁外への切り込みは約30cmを測る。

覆土の状態

4層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

今回調査した住居跡の中では最も多くの遺物が出土した。1～3、8、9がカマド周辺より出土し、5は北東コーナーに寄って出土している。いずれも本跡に共伴する遺物と考えられる。その他は覆土中より出土した。

出土遺物（第46図、図版20・21）

1は甕で、口縁部が緩やかに外反する。胴部の張りは比較的強く、上半部に最大径を有する。胴部の縱方向のヘラ削りは長く、底部近くにまで及んでいる部分もみられる。

2は甕で、口縁部が緩やかに外反する。胴部の張りは1よりも若干強く、上半部に最大径を有する。胴部の横方向のヘラ削りは、最大径直下の部分で終了し、それ以下は縱方向のヘラ削りとなる。全体に丁寧なヘラ削りで、胎土が良好なためにナデの様相を呈する。

3は甕で、口縁部は緩やかに外反する。口縁部直下には鈍い棱を有し、胴部は緩やかに底部へと移行していく。胴部外面の縱方向のヘラ削りは、比較的長く施される。

4も甕であるが、1～3とは異なる形態をとる。口縁部はわずかに外反ぎみとなる。胴部は口縁部を横ナデした後に底部を上にして口縁部に向ってヘラ削りを施す。

5・6は甕の底部である。5は厚手の底部をもち、胴部の縱方向のヘラ削りが底部近くまで施される。

7は単孔式の瓶である。破片のため全体は不明であるが、底部から直線的に開く器形を呈するものと思われる。底部近くには浅い一条の沈線が巡る。器面は摩耗が激しいため調整法は不明であるが、全体に丁寧な成形である。底部の穿孔は焼成前に施されている。

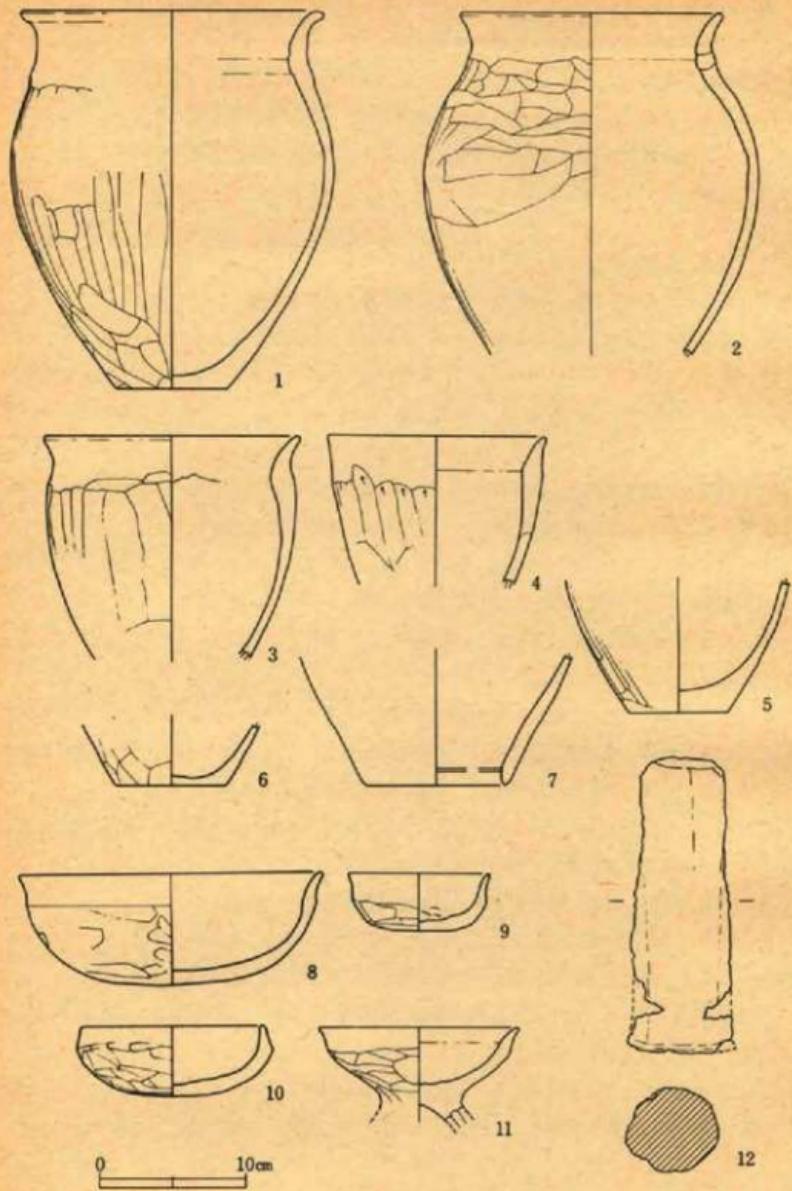
8は壺で、本遺跡出土の壺のなかでは最も大形である。体部に棱を有し、口縁部は緩やかに外反する。体部は丁寧な調整が施されるため光沢を有する。

9は壺で、体部には弱い棱を有する。口縁部は若干内凹し、丸底となる。

10は壺で、体部に棱をもつ。口縁部は直立ぎみに立ち、中位で若干外反する。ヘラ削りは、底部から体部の順で施される。体部内面には雜ではあるが、ヘラミガキが施される。

11は高壺で、脚部を欠損する。壺部は体部に棱を有し、口縁部は外反する。脚部のヘラ削りは縱方向と思われる。

12は土製支脚で、ほぼ完形である。頂部径4.1cm、基底部径7.2cm、器高19.6cmを計り、基底部が若干広がる円柱形を呈する。調整法は、器面のヒビ割れ、剥落が激しいため不明である。



第46図 6(010)号跡出土遺物 (1/4)

6(010)号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	遺存度	法寸(㎜)	焼成相	成形・調整	胎土	色調	備考	
1	甕	全体の少	口径(復) 20.3 胸部最大径 22.9 底径 7.5 器高 25.3	A	外面 口縁部横ナデ 底部静止ヘラ ケズリ 胸部へラケズ リ(↓), 脚下部 (→) 内部 口縁部へ脚上 部, 脚下部へ ラナデ(→), 脚中部へラナ デ(↓)	やや粗い 砂粒	暗褐色	外面に二次燒 成による黒変 0015, 0029-3 0029-4 0029-5 0029-6	
2	甕	口縁部～脚 下部少	口径 17.8 胸部最大径 23.0 現高 23.1	A	外面 口縁部横ナデ 口縁下部へ脚 下半部へラケ ズリ(↑), 脚上 部へラケズリ (→) 内部 口縁部へケ状 工具による機 ナデ, 脚部ナ デ	密 砂粒若干	褐色	外面に塗付着, 外面に二次燒成 による黒変 0001, 0004 0006, 0007 0013, 0018 0019, 0022 0023, 0026 0029-1	
3	甕	口縁部～脚 下半	口径 17.1 現高 14.8	A	外面 口縁部横ナデ 胸部へラケズ リ(↓), 脚下部 へラケズリ (↑) 内部 口縁部横ナデ 胸部へナナデ (→)	粗い 砂粒	暗褐色	0014, 0020 0021, 0022 0023, 0027	
4	甕	口縁部～脚 下部少	口径 14.7 現高 20.0	A	外面 口縁部横ナデ 後, 脚部へラケ ズリ(↑→) 内部 口縁部へ脚上 部横ナデ, 脚 下部へラナ デ(↓)	やや粗い 砂粒	褐色	部分的に黒変 0035-1, 0035-2 0036-1, 0036-3	
5	甕	底部	底径 現高	6.7 8.9	A	外面 脚下部, 底部 へラケズリ 横ナデ 内部	粗い 砂粒	暗褐色	二次的燒成のた めに黒変, 刻落 が濃い 0023, 0038 0039
6	甕	底部	底径 現高	7.4 4.1	A	外面 脚下部へラケ ズリ(→), 底 部不明 内部 横へラナデ	やや粗い 砂粒・小石	外面 暗褐色 内部 乳褐色	底部外面黒變 0031, 0033 0041
7	瓶	脚下部～底 部少	底径 現高	9.4 8.7	A	不明	やや粗い 砂粒若干	暗黃褐色	二次燒成のた め全体的に器壁 黒變, 内面に塗 付着 0022, 0023
8	环	全体の少	口径(復) 20.4 器高 7.4	A	外面 口縁部横ナデ 体部へラケズ リ後へラナデ へラナデ 内部	密 砂粒	赤褐色	口縁部及び体下 部に黒斑, 器壁 は若干光沢を有 す 0006, 0008 0009, 0019 0022, 0023 0029-2	
9	环	口唇部をほ とんど欠く	口径(復) 12.0 器高 4.5	A	外面 口縁部横ナデ 体部へラケズ リ 内部 口縁部横ナデ 体部暗文状の 變なヘラミガ キ	やや粗い 砂粒	暗褐色	二次燒成により 体下部黒變 0017	

10	型	全体の方	口径 底径 壁高	9.4 4.2 3.8	A	外面 内面	口縁部横ナデ 体部・底部へ ラケスリ(←) 口縁部横ナデ 体部・底部へ ラケスリ後へ ラミガキ	やや粗 砂粒	暗赤褐色	
11	高坪	環部のみ	口径 現高	13.5 6.2	A	外面 内面	口縁部横ナデ 体部へラケス リ(→)後, 雄 なヘラナデ 口縁部横ナデ 体部雄なヘラ ミガキ	やや粗 砂粒	明褐色	口部厚減

0032
0034

7(011)号跡 (第47・48図, 図版13)

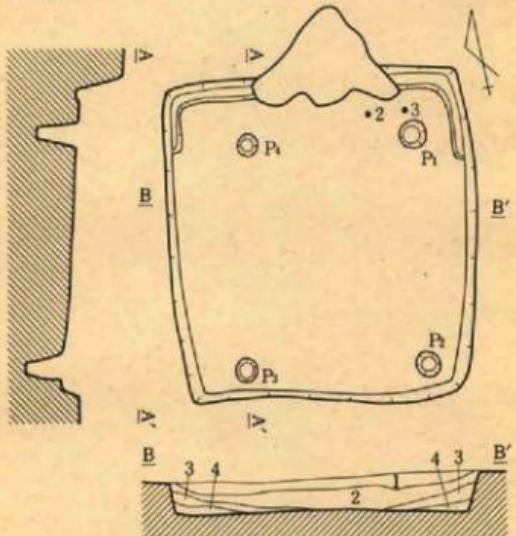
6号跡の南約2mの緩斜面に位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—北壁3.1m, 東壁3.4mで, 東西壁に弱い崩張りを有する方形である。

壁 一確認面からの壁高は20~45cmで, 若干外側へ開く。

壁 溝一カマド部分を除く北壁側と東西壁の北側約 $\frac{1}{4}$ のみに存在する。幅10cm前後, 深さ5cm前後である。

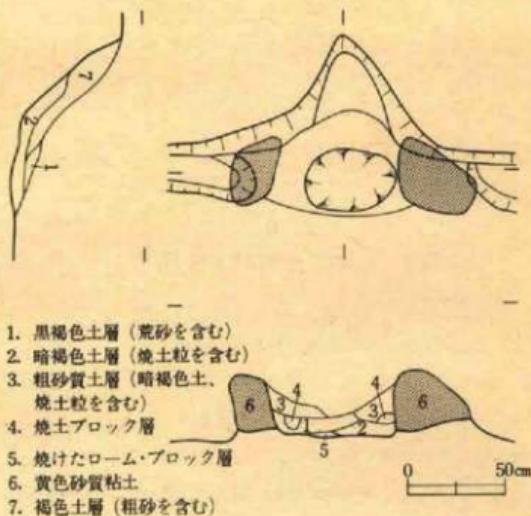


1. 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
2. 褐色土層 (ローム粒を含む)
3. 暗褐色土層 (ローム・ブロックを含む)
4. 茶褐色土層 (ローム・ブロックを含む)

0 2m

第47図 7(011)号跡実測図 (1/60)

柱 穴— $P_1 = 39\text{cm}$, $P_2 = 25\text{cm}$, $P_3 = 35\text{cm}$, $P_4 = 40\text{cm}$ で、 P_2 , P_3 は南壁近くに位置する。カマド—北壁のほぼ中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用いているが、前面部は失われており、遺存状態は良好とはいえない。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは比較的緩やかで、壁外への切り込みは約50cmを測る。



第48図 7 (011) 号跡カマド実測図 (1/30)

覆土の状態

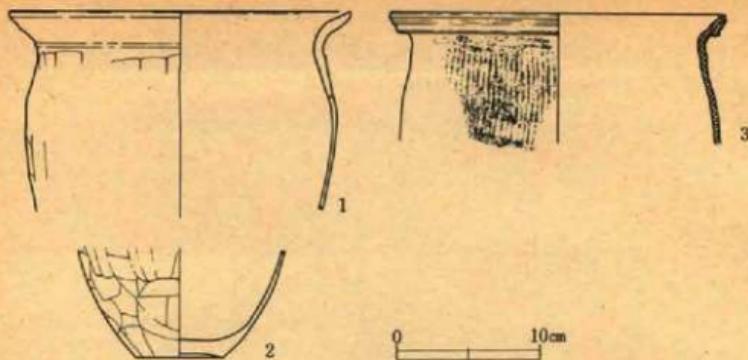
4層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

遺物の量は少ない。1はカマド内よりの出土であるが、口縁部の一部のみであり、本跡に伴うものとは思われない。2・3は、カマド右袖部付近の床面より出土おり、本跡に伴うものと思われる。

出土遺物 (第49図、図版22)

1は甕で、口縁部は大きく外反し、口唇部近くでは若干受け口状を呈する。肩部の張りは弱く、頸部から緩やかに胴部へと移行する。頸部には末調整部分を残し、以下はヘラ削りが施される。胴上位は縱方向のヘラ削りが、中位には斜方向のヘラ削が施される。器壁は薄く、口縁部は若干肥厚する。



第49図 7 (011) 号跡出土遺物 (1/4)

2は甕の底部で、1と同一個体の可能性があるが、接合しない。底面は若干上げ底となる。胴下位のヘラ削りは横方向を主体とし、丁寧である。底部の調整後、胴部の調整を行なっているために、底部への粘土のはみ出しが部分的にみられる。

3は甕で、口縁部は肥厚し外反する。口縁部上面は、オサエ様のナデが良好ではば直線状を呈するが、下面是オサエがあまく丸味を帯びる。胴部には平行叩き目が施され、上端はナデにより消される。

7 (011) 号跡出土土器一覧

遺物 番号	器形	遺存度	法量(cm)	地成層	皮形・調整	粘土	色調	備考
1	甕	口縁部～胴 上部	口径 現高 23.6 13.6	A	外面 口縁部へラナ デ、胴上部へ ラケズリ(+)、 胴中部へラケ ズリ(+)。 内面 口縁部へラナ デ、胴部ナデ	密 砂粒若干	暗褐色	部分的に煤付着 胴部外側に粘土 若干付着 0002、0005 0006
2	甕	底部	底径 現高 6.0 7.1	A	外面 上端へラケズ リ(+)、下部へ ラケズリ(+)、 底部へラケズ リ後、施なへ ラナデ 内面	密 砂粒若干	暗褐色	器内壁荒廃、1 と同一個体の可 能性あり 0004
3	甕	口縁部～胴 上部破片	口径(復) 現高 23.2 8.8	C	外面 口縁部横ナデ 胴部叩き目(+)後、 口縁下横 ナデ 内面 口縁部へラナ デ、胴部は抬 頭によるナデ のため凹凸が みられる	密 砂粒若干	器壁外 暗灰褐色 器壁内 褐色	遺元窯に近い 0003

8(012)号跡 (第50・51図、図版14)

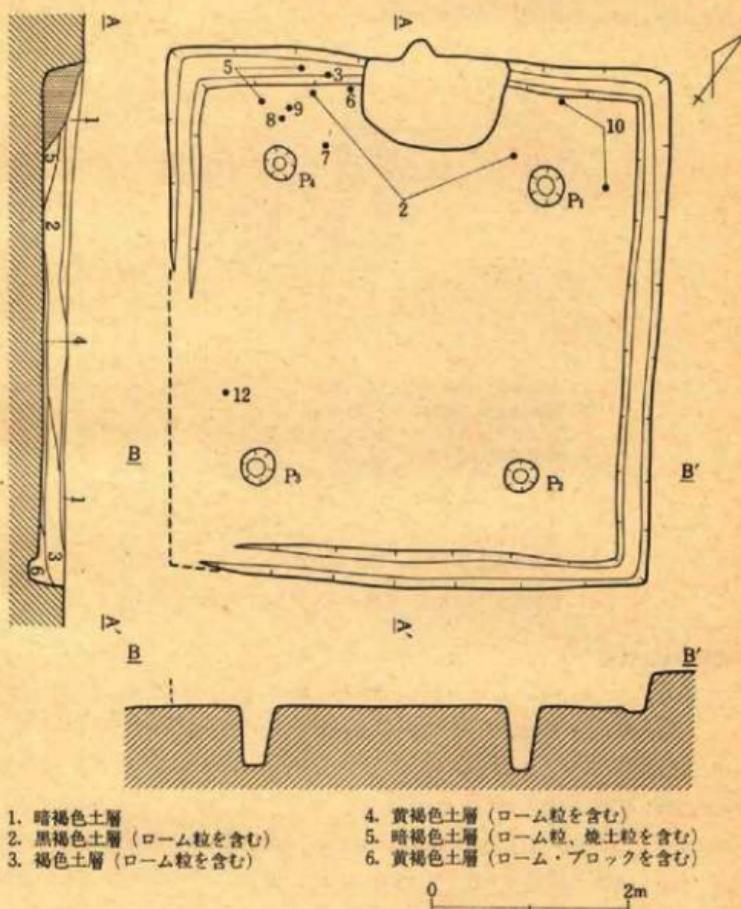
6号跡の西約8mの緩斜面に位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—斜面下方にあたる南西隅が失われているが、北壁5.2m、東壁5.2mの整った方形を呈するものと推定される。

壁 一遺存の良い北壁で、確認面からの壁高は40cm前後を測る。

床 面—全体に平坦で堅緻である。特にカマド前面部はよく踏み固められている。



第50図 8(012)号跡実測図 (1/60)

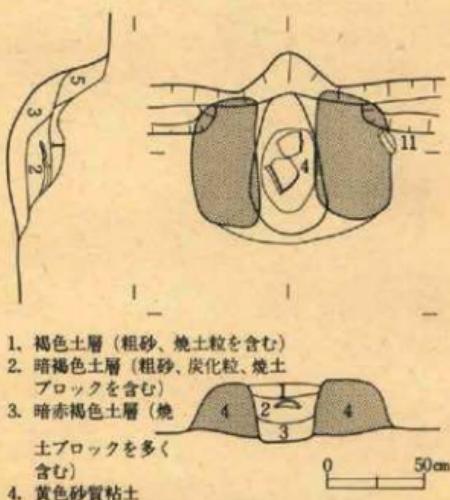
壁 溝一カマド部分を除いて壁直下を全周するものと推定される。幅10~20cm、深さ10cm前後で、底面は凹凸が著しい。

柱 穴—P₁—41cm、P₂—63cm、P₃—60cm、P₄—42cmで、平面プランのはば対角線上に位置する。

カマド—北壁のはば中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは比較的急で、壁外への切り込みは約20cmを測る。

覆土の状態

6層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。



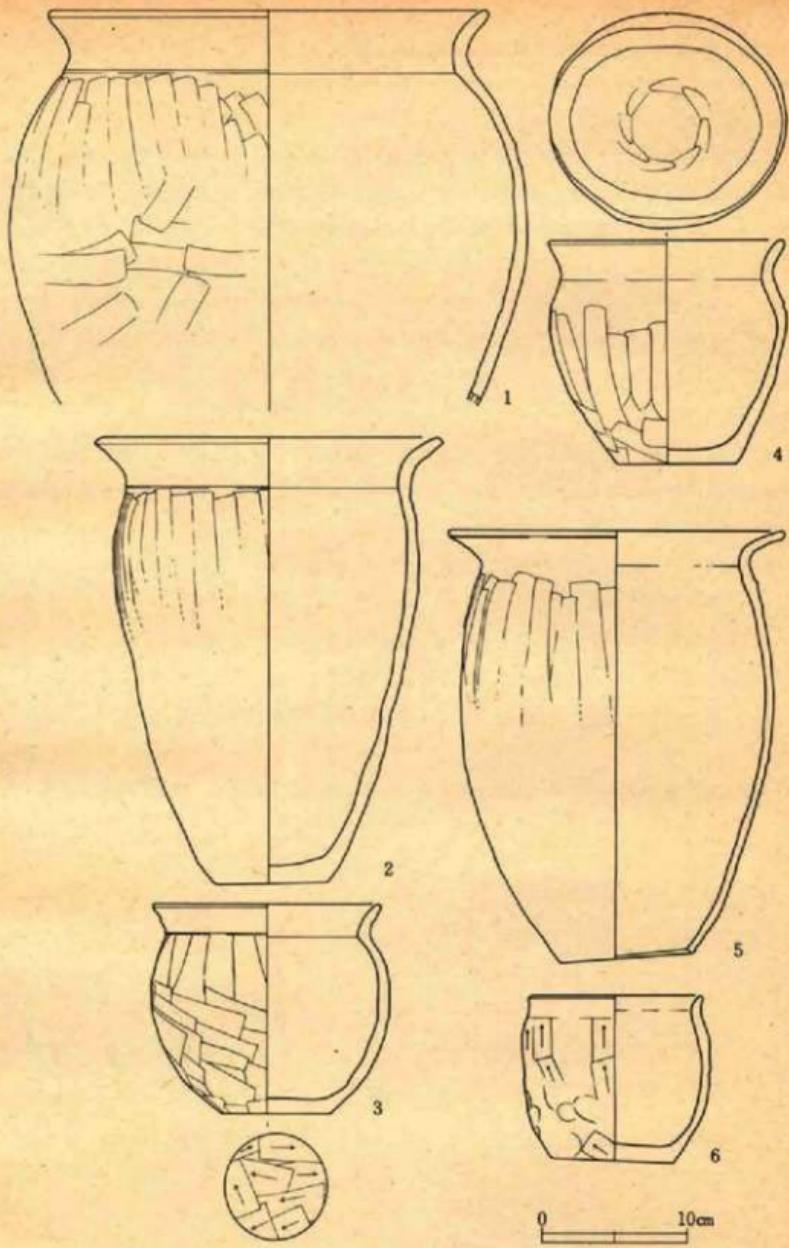
第51図 8 (012) 号跡カマド実測図 (1/30)

遺物の出土状態

遺物の出土量は比較的多い。カマド内中央部から4が、またカマド右袖部から11が出土した。カマド周辺の床面からは2、3、5~10が、南側床面からは12が出土した。1のみが覆土中より出土した。

出土遺物 (第52・53図、図版22・23)

1は甕で、口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は丸味を帯びる。肩部に弱い棱を有し、張り出しながら胴部へ続く。最大径は胴部中位にあり、全体的に球形を呈する。胴部の調整は、中位の横方向のヘラ削り後に、上部の縱方向のヘラ削りを施す。全体的に浅いヘラ削りで、器面は滑らかである。



第52图 8(012)号墓出土遗物(1) (1/4)

2は長胴の甌で、あまり張り出さない肩部から口縁部が大きく外反する。胴部には成形の際の凹凸がみられる。胴部の調整はヘラ削りが浅いため不明瞭であるが、縱方向のヘラ削りが肩部から胴下位まで比較的長く施されるものと思われる。

3は小形の甌である。口縁部は「く」字状に外反し、中位からは外反の度を若干強める。肩部に不明瞭な稜を有し、張り出しながら胴部へ移行する。胴上位に最大径を有し、全体的に球形を呈する。胴上位の縱方向のヘラ削りは短かく、最大径付近から斜方向のヘラ削りが開始される。

4も小形の甌で、口縁部はゆがみを持ち、「く」字状に緩やかに外反する。胴上位に最大径を有し、肩を形成する。肩部以下は若干張り出しながらも、ほぼ直線的に底部へと続く。底部は胴下位のヘラ削りが深いために略六角形を呈する。胴部の縱方向のヘラ削りは肩部から開始され胴下位に至る。

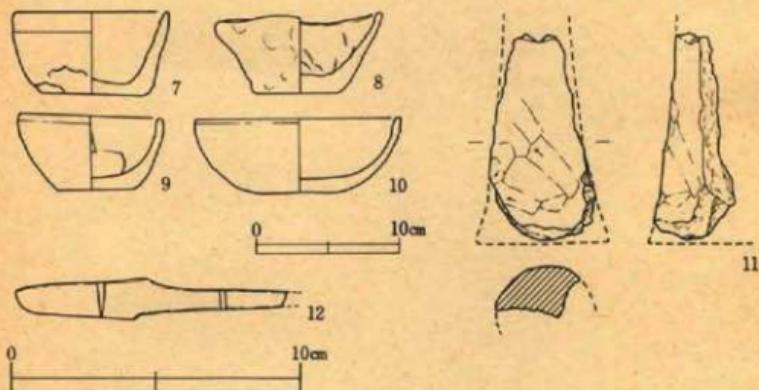
5は単孔式の甌で、口縁部は大きく外反する。胴部は若干の張りを有する。胴部の調整は削りが浅いため不明瞭であるが、縱方向のヘラ削りは比較的長く、胴下位まで施されるものと思われる。

6は鉢で、若干張り出した肩から外反ぎみに短い口縁部が続く。胴部最大径はほぼ中位に有する。胴部の調整具の幅は比較的広い。

7は鉢形土器で、全体的に粗雑な成形で、器面には接合痕が部分的にみられる。

8は鉢形土器で、粗雑な成形である。口縁部はゆがみをもち、粘土をつまみ上げるようにして成形する。器面には粘土の接合痕および粒状の粘土貼付痕が観察される。内面にはヘラ削り痕が明瞭に残る。

9は壺形土器である。体部は内脣ぎみとなる。口縁部は若干内側し、口唇部は丸味を帯びる。



第53図 8(012)号跡出土遺物(2)(1/4・1/6)

10は壺で、体部に棱をもたない。全体的に丁寧なナデが施される。

11は土製支脚である。破片のため全体の形状は不明であるが、基底部が開くタイプと思われる。器面には斜方向のヘラ削りが施される。

12は刀子で、基尻部を欠く。残存長9.3cmを計る。両側で、鋒部に比べて茎部が長い。棟は平棟である。身長1.2cm、闊幅1.3cm、茎部幅0.6cmを計る。

8 (012) 号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	地成粘	成形・調整	粘土	色調	備考
1	甕	口縁部剥 剝 剥落 部	口径 30.1 胴部最大径 35.4 底深 26.6	A	外面 口縁部剥ナデ 胴上部ヘラケズ リ(↓), 脇中部 ヘラケズリ (←→) 内面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラナデ	石英粒・砂粒 若干含む	赤褐色	二大塊成のため 胴下半部は黒変 粘土剥離がみら れる 0002, 0003 0005, 0007 0021, 0024 0026, 0027 0036
2	甕	ほぼ完形	口径 23.2 底深 7.5 器高 29.7	A	外面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラケズ リ(↓), 脇下部 ヘラケズリ (→) 内面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラナデ (↙), 底部は 指印によるナ デ	石英粒・砂粒 を含む	赤褐色	二大塊成により 口縁部・胴下半 部に部分的黒変 がみられる 0014, 0020
3	甕	完形	口径 15.6 胴部最大径 16.3 底深 7.3	A	外面 口縁部剥ナデ 胴上部時計回 りのヘラケズ リ(↑), 脇下 半は時計回 りのヘラケズリ (↖), 脇下端 は反時計回 りのヘラケズリ (→), 底部ヘ ラケズリ 内面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラナデ (→)	石英粒・雲母 粒・砂粒を含 む	明灰褐色	口縁部に煤若干 付着 0016, 0036 0037
4	甕	完形	口径 15.6 底深 11.6 胴部最大径 16.0 底深 7.6 器高 15.0	A	外面 口縁部剥ナデ 胴部時計回 りヘラケズリ(↑) 胴下部時計回 りヘラケズリ (↖), 底部ヘ ラケズリ後ヘ ラナデ 内面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラナデ 底端外周剥離 によるナデ	石英粒・砂粒 を含む	茶褐色	肩部に煤付着 0038
5	瓶	ほぼ完形	口径 23.0 底深 9.0 器高 28.7	A	外面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラケズ リ(↓) 内面 口縁部剥ナデ 胴部ヘラナデ (→)		赤褐色	広範に煤付着, 底部の穿孔は焼 成後 0002, 0004 0010, 0015 0036, 0037
6	鉢	完形	口径 11.9 胴部最大径 12.8 底深 8.3 器高 11.2	A	外面 口縁部横ナデ 胴上半部ヘラ ケズリ(↑), 脇 下半部ヘラケ ズリ(↖), 指 印による押仕 底部ヘラケズ リ後ヘラナデ 口縫泥模ナデ 胴部ヘラナデ	砂粒・小石を 多く含む	暗赤褐色	広範に煤付着 0001, 0018

7	体	ほぼ完形	口径 底径 器高	10.4 7.0 5.7	A	外面 内面	口縁部横へラ ナデ、胴部は 底位へラケズ 引後、指頭によ るナデ、底部 へラナデ 横へラナデ	砂粒を若干含 む	暗灰褐色	胴部に黒斑	0019
8	体	完形	口径 底径 器高	11.3 5.7 5.3	A	外面 内面	口縁部横へラ ナデ、胴部は 粘土の粘土を 追加貼付して 指頭による押 さえ及びナデ を施す。底部 へラナデ ヘラケズリ (->後、横へラ ナデ) 口唇部はつまみ上 げるようにして整形	砂粒若干	胴下部から 暗褐色	胴下部から底 部にかけて黒斑	0011
9	塊	ほぼ完形	口径 底径 器高	9.8 5.2 5.3	A	外面 内面	口縁部横へラ ナデ、胴上半 部は指頭によ る整形後、横へ ラナデ、胴下 半部はヘラケ ズリ(->)、底 部へラナデ ヘラケズリ (->後、横へラ ナデ)	砂粒含む	暗赤褐色	外面胴部から底 部にかけて黒斑 着	0012
10	环	全体の外	口径 器高	14.1 5.0	A	外面 内面	口縁部横へラ ナデ、体部へ ラケズリ(-> 後、指頭ナ デ ヘラナデ	密 砂粒を若干含 む	明褐色	底部に黒斑、体 部内面に黒斑着	0022, 0027

9(013)号跡 (第54・55図、図版15)

8号跡の西約6mの緩斜面に位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—北壁4.5m、南壁3.7m、東西壁4mで、南壁は北壁に比べて0.8m狭く、平面形は台形を呈する。

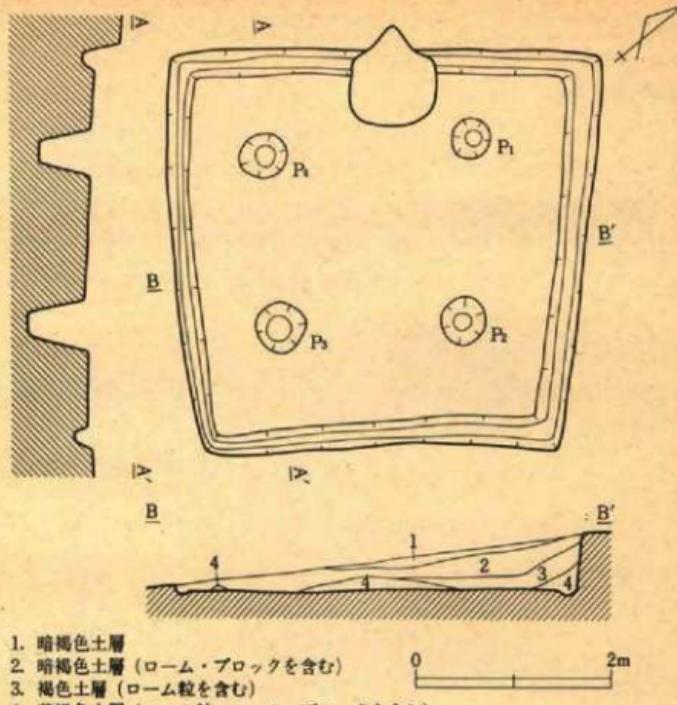
壁 一斜面下方にあたる南側では確認面からの壁高は5cm前後しか遺存していない。最も遺存のよい北側で55cm前後遺存しており、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体に平坦で堅致である。特にカマド前面部から住居中央にかけてはよく踏み固められている。

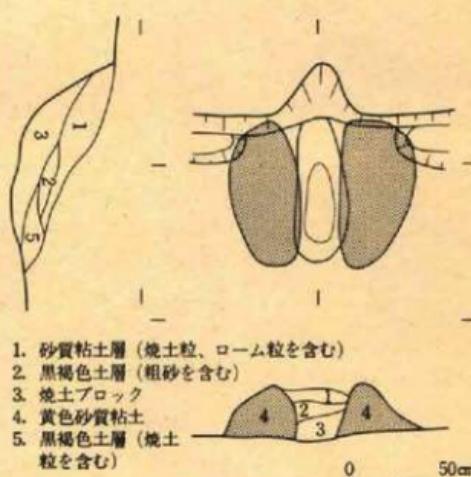
壁 溝一カマド下を除いて壁直下を全周する。幅10~20cm、深さ5~10cmで、底面には凹凸がある。

柱 穴—P₁-38cm, P₂-65cm, P₃-61cm, P₄-51cmで、P₁とP₄の間に比べてP₂とP₃の間が狭く、平面形と相似の配置となる。

カマド—北壁のはば中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、遺存状態は比較的良好である。煙道の立ち上がりは比較的緩やかで、壁外への切り込みは約25cmを測る。



第54図 9 (013) 号跡実測図 (1/60)



第55図 9 (013) 号跡カマド実測図 (1/30)

覆土の状態

4層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

1はカマド内から、7はカマド右袖部から基底面を焚口部の方へ向けた状態で出土した。また3~5は床面より出土した。その他2・6は覆土中よりの出土である。

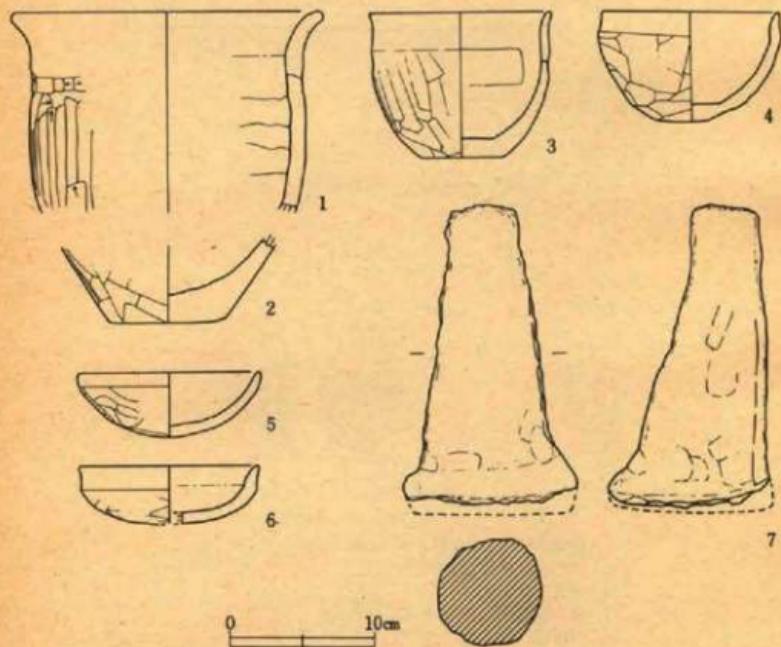
出土遺物（第56図、図版24）

1は比較的小形の甕である。口縁部は緩やかに外反し、胴部はわずかに張りをもつ。肩部には細かい横方向のヘラ削りを施す。胴部内面には接合痕が認められる。器壁は全体に厚手である。

2は甕の底部で、かなり厚手である。

3は鉢で、口縁部が直立ぎみに立ち、口唇部付近で若干外反する。胴部は上部に最大径を有し、張りをもちらながら底部へ移行する。

4は塊で、肩部に棱を有し、口縁部は若干内側する。底部は器面調整が粗雑なために凹凸が激しい。



第56図 9(013)号跡出土遺物 (1/4)

5は环である。体部に棱をもたず、口縁部は内彎ぎみとなる。底部は丸底となる。

6も环で、体部には明瞭な棱を有し、口縁部はほぼ直立する。底部は平底に近い丸底となる。

7は土製支脚で、基底部を若干欠く。頂部径4.3cm、推定基底部径10.8cm、残存高19.8cmを計り、基底部が大きく開く形状となる。二次焼成を受け、全体的にもろい。頂部には煤が若干付着する。基底部は横方向のヘラ削り、それ以外は縦方向のヘラ削りを主とする。

9(013)号跡出土土器一覧

遺物 番号	器形	遺存度	法量(cm)	地成因	成形・調整	胎土	色調	備考	
1	環	口縁部・胴 部破片	口径(復) 現高	20.6 13.3	A	外面 口縁部横ナデ 脛上部へラケ ズリ(-) 胴部へラケズ リ(+) 内面 口縁部横ナデ 胴部指頭整形 後、横へラナデ 輪積み成形	やや粗い 砂粒を多く含む	乳褐色	部分的に煤付着 胴部外面に黒斑
2	環	底部	底径 現高	7.8 5.6	A	外面 脣下部へラケ ズリ(-) 底部はへラケ ズリ 内面 指頭によるナ デのため凹凸 がみられる	やや粗い 砂粒を多く含む	明褐色	脣下部から底部 にかけて部分的 に黒斑
3	鉢	全体の3/4	口径(復) 底径 器高	12.4 5.4 9.6	A	外面 口縁部横ナデ 胴部へラケズ リ(+), 脣下部 (-), 底部へ ラケズリ 内面 口縁部横ナデ 胴部へラケズ リ(-), 後へ ラケズリ	密 砂粒を若干含む	器壁外 暗赤褐色 器壁内 赤褐色	口縁部外面に煤 若干付着
4	碗	ほぼ完形	口径 器高	11.8 7.3	A	外面 口縁部横ナデ 体部へラケズ リ(-, +) 内面 口縁部横ナデ 体部へラケズ リ(-)後、横 へラナデ	やや粗い 砂粒を多く含む	器壁外 暗褐色 器壁内 赤褐色	0007
5	环	全体の3/4	口径(復) 器高	12.2 4.3	A	外面 口縁部横ナデ 体部へラケズ リ(-, +) 内面 雜なミガキ	砂粒を含む	明茶褐色	内外面に黒斑が みられる
6	环	全体の3/4	口径(復) 器高	12.0 3.8	A	外面 口縁部横ナデ 体部へラケズ リ(-) 内面 丁寧な横ナデ	やや粗い 砂粒を多く含む	明褐色	体下部に二次焼 成による黒変あり 0004, 0005

10(016)号跡 (第57・58図、図版15)

9号跡の北側に近接して、緩斜面に位置する竪穴住居跡である。

構造

平面形—斜面下方にあたる南西隅が失われているが、北壁2.9m、東壁3mの整った方形を呈するものと推定される。

壁 一最も遺存状態の良い東壁で、確認面からの壁高30cmを測る。

床 面一全体に平坦であるが、カマド前面部を除いて軟弱である。

壁 溝一なし

柱 穴一なし

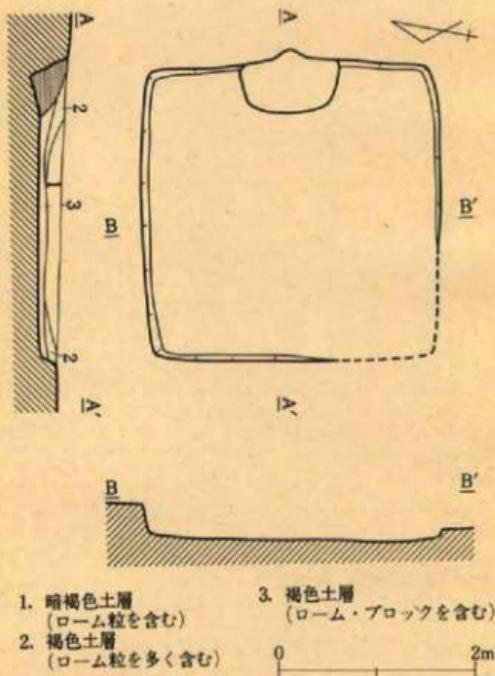
カマド一東壁のほぼ中央に位置する。袖部は砂質粘土を部材として用い、遺存状態は比較的良好である。天井部はすでに失われている。煙道の立ち上がりは急で、壁外への切り込みは約10cmを測る。

覆土の状態

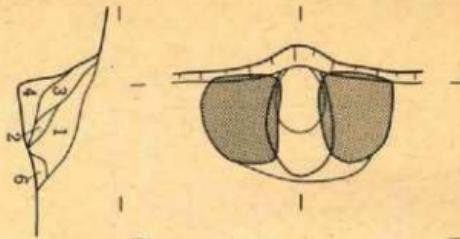
3層に分けられ、自然堆積の状態を呈する。

遺物の出土状態

遺物は少なく、覆土中より環が出土したのみである。



第57図 10(016)号跡実測図 (1/60)

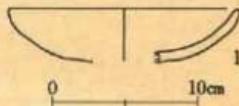


1. 暗褐色土層（粗砂を含む）
2. 暗赤褐色土層（焼土を多く含み、粗砂を混入する）
3. 黒褐色土層（焼土の小ブロック、粗砂を含む）
4. 暗褐色土層（ローム粒を含む）
5. 貧色砂質粘土
6. 褐色土層（焼土を多く含み、粗砂が混入する）

第58図 10 (016) 号跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (第59図、図版24)

1は環で、0001と0006の2片の破片からなるが、胎土や調整法からみて同一個体と思われる。口径に比して器高が低く、体部に縫をもたず大きく開く形状を呈する。



第59図
10 (016) 号跡出土遺物 (1/4)

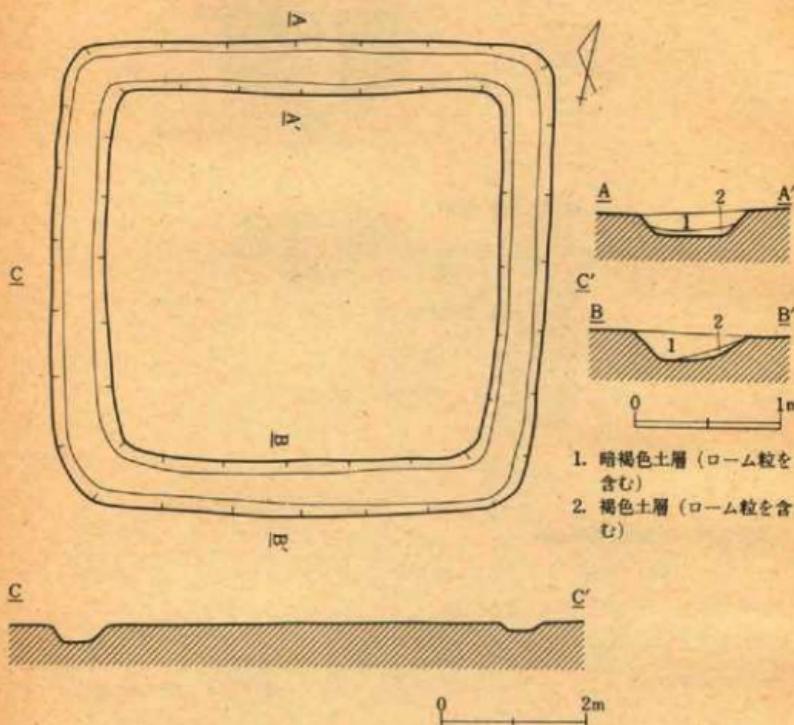
10 (016) 号跡出土土器一覧

遺物番号	器形	遺存度	法量(cm)	地成培	成形・調整	胎土	色調	備考
1	環	全体の半分	口径(復) 15.4 現高 3.5	A	外面 口縁部横ナデ 体部横・縦ナデ 内面 丁寧なナデ	密 砂粒若干	暗赤褐色	0001, 0006

11(001)号跡 (第60図、図版16)

調査区西側の緩斜面に位置する方形周溝遺構である。

東西外周径6.8m、南北外周6.4mの整った方形を呈する。周溝の幅は0.8m前後で、ほぼ一定している。周溝の断面はナベ底状を呈し、確認面からの深さは0.2m前後を測る。底面は小さな凹凸が著しく、全体に軟弱である。周溝の覆土は2層から成り、自然堆積の状態を示す。



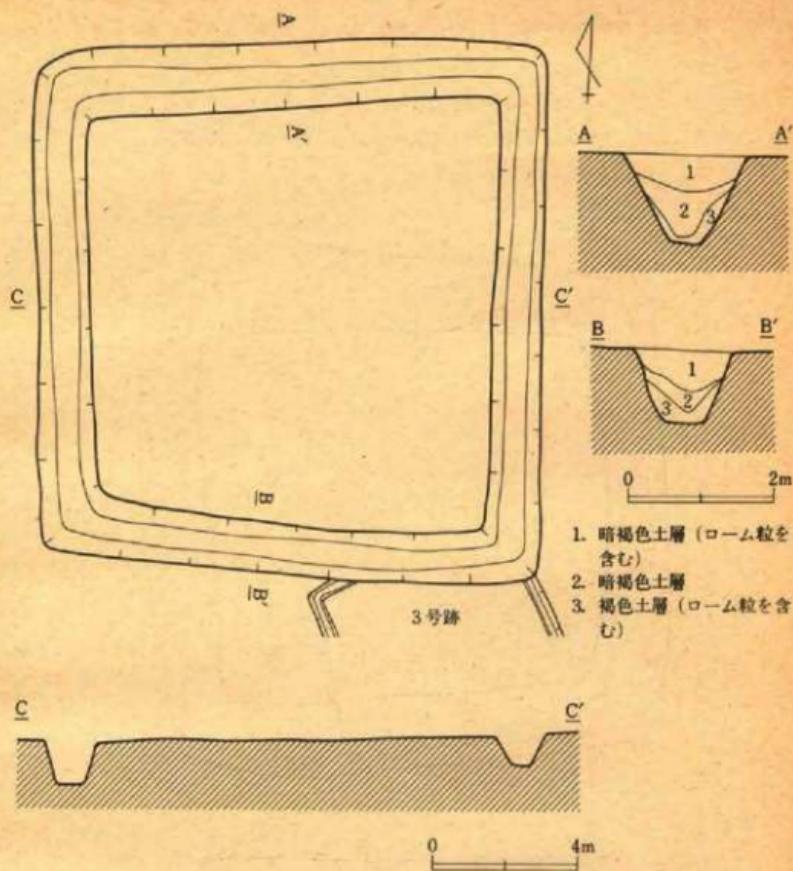
第60図 11(001)号跡実測図 (1/40・1/80)

12(002)号跡 (第61図、図版16)

11号跡東側の平坦部から緩斜面にかけて位置する方形周溝遺構で、他の3基に比較して著しく大規模である。

東西外周径13.8m、南北外周径14.2mを測り、西側がやや狭い台形状を呈する。周溝の幅は1.4~2mを測る。周溝の断面は箱築研状を呈し、確認面からの深さは1~1.2mを測る。底面は平坦で、全体に堅緻である。周溝の覆土は3層から成り、自然堆積の状態を示す。

封土及び主体部と思われる遺構は検出しなかった。出土遺物はない。



第61図 12 (002) 号跡実測図 (1/80・1/160)

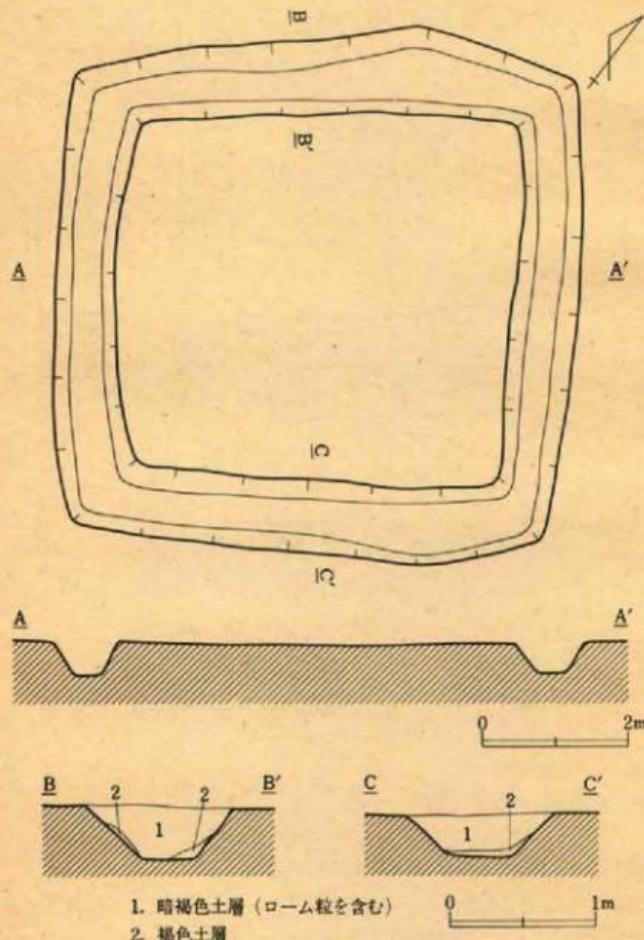
13(003)号跡 (第62図、図版17)

12号跡東側の平坦部に位置する方形周溝造構である。

東西外周径6.8m、南北外周径7mの方形を呈する。周溝の幅は0.8~1.2mで、北側と南側封土及び主体部と思われる造構は検出しなかった。出土遺物はない。

の外周の一部が張り出している。周溝の断面は箱蓋研状を呈し、確認面からの深さは0.3~0.5mを測る。底面は小さな凹凸が著しく、全体に軟弱である。周溝の覆土は2層から成り、自然堆積の状態を示す。

封土及び主体部と思われる遺構は検出しなかった。東側に落ち込みを検出し、主体部の可能性を考え精査したが、木根による擾乱であることが判明した。出土遺物はない。

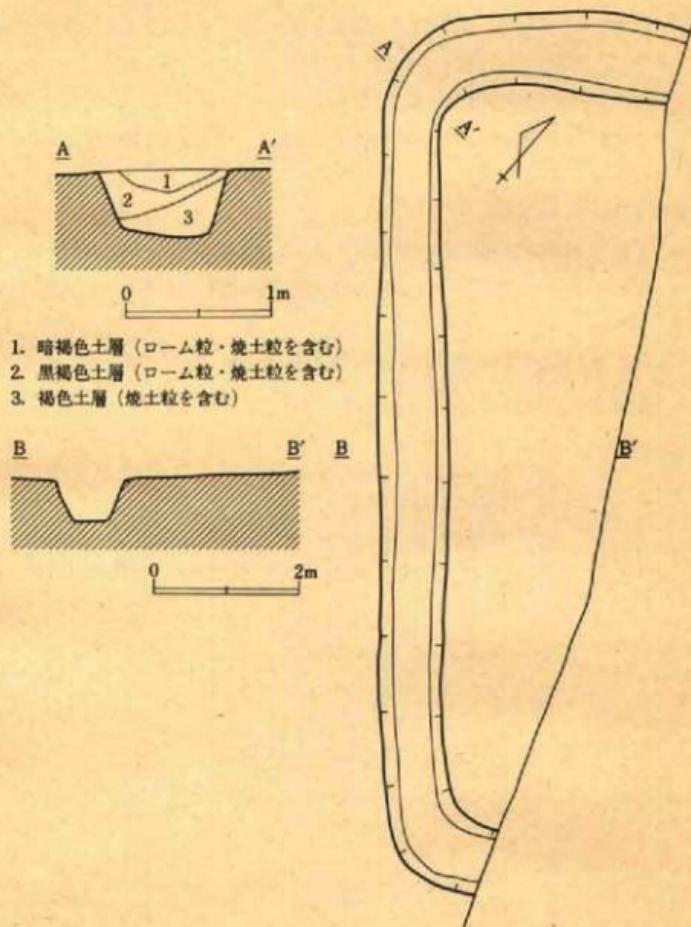


第62図 13(003)号跡実測図 (1/80・1/40)

14(007)号跡 (第63図、図版17)

13号跡東側の平坦部に位置する方形周溝遺構である。東側の約6mが調査区外に延びているため、未調査となっている。

西側周溝の辺長は、外周で11.5mを測る。周溝の幅は0.8~1.1mを測る。周溝の断面は箱型研状を呈し、確認面からの深さは0.6m前後を測る。底面は比較的平坦であるが、全体に軟弱



第63図 14(007)号跡実測図 (1/40・1/80)

である。周溝の覆土は3層から成り自然堆積の状態を示す。

調査を実施した範囲では、封土及び主体部と思われる遺構は検出しなかった。出土遺物はない。

3. 先土器時代の遺物

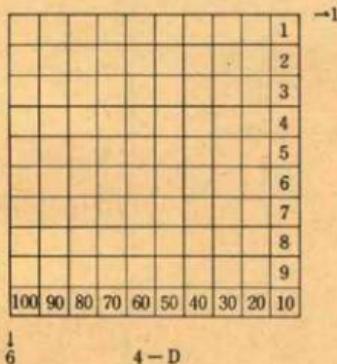
先土器時代遺物の所在確認を目的として、遺構を避けて $2 \times 4 =$ のグリッド20個所を第65図のように設定し、武藏野ローム層上面まで掘り下げた。

調査の結果、5-D-9の第2B・B下面より1、3-C-54の立川ローム層最上面より2を検出した。また1の南側、5-D-99を中心とする立川ローム層最下層よりカーボンの集中が認められた。

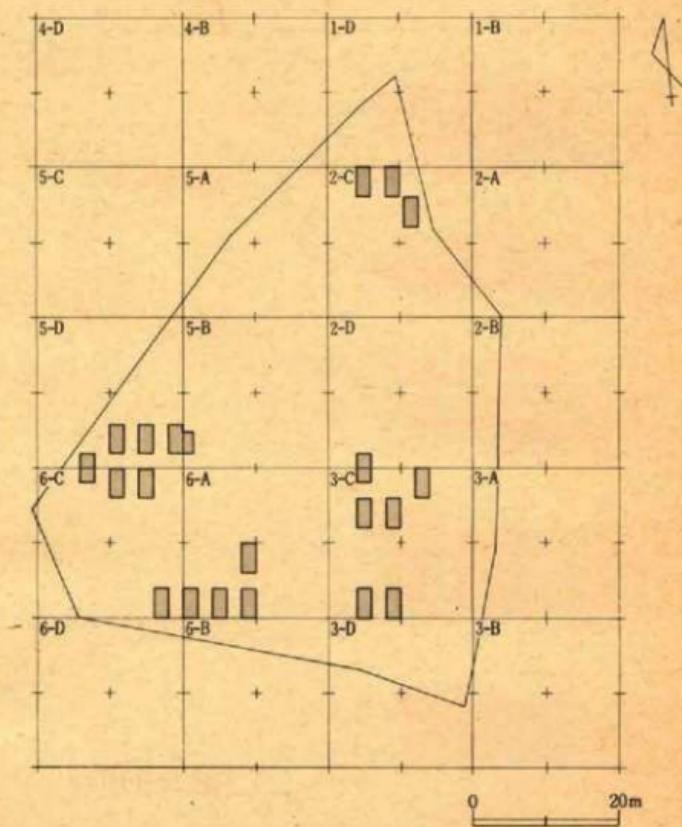
出土遺物（第67図、図版25）

1・2とも縦長の剥片で上端に平坦な打面をもつ。1は主剥離面が1回の剥離で終えているのに対し、表面は何回かの剥離を施す。何らかの目的をもった剥片であろうか。石材はチャートである。

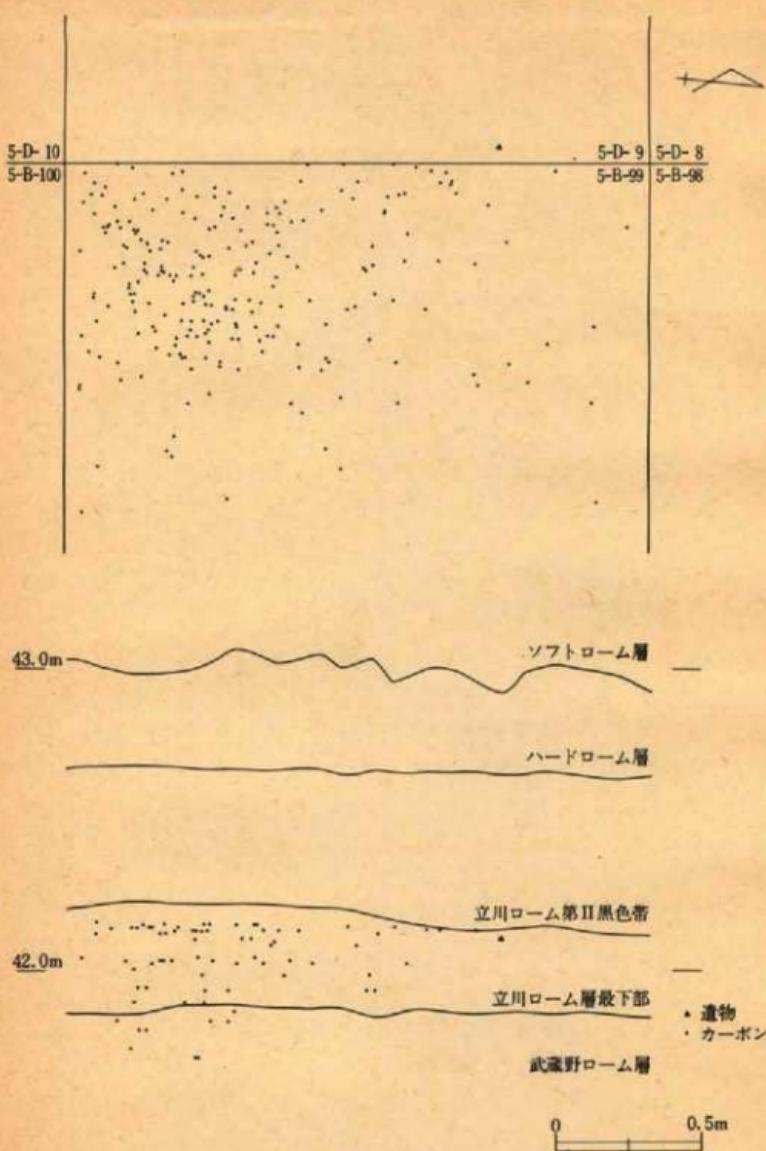
2は主剥離面・表面とも1回の剥離で終えている。石材は砂岩系である。



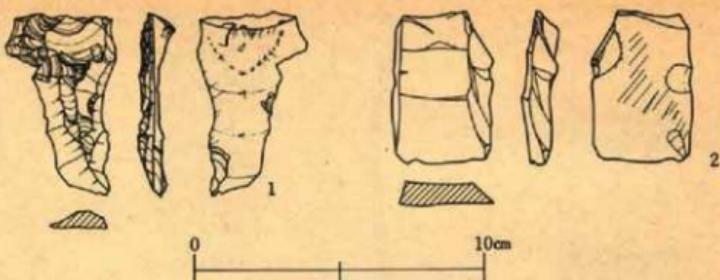
第64図 小グリッド分割図



第65図 先土器時代グリッド配置図 (1/800)



第66図 5-B-99グリッド平面図・断面図 (1/20)



第67図 先土器時代出土遺物（1/2）

4. 包含層出土の遺物（第68・69図、図版25）

包含層から出土した遺物は、古墳時代の甕と縄文時代の土器片である。大半は調査区の北側より検出した。

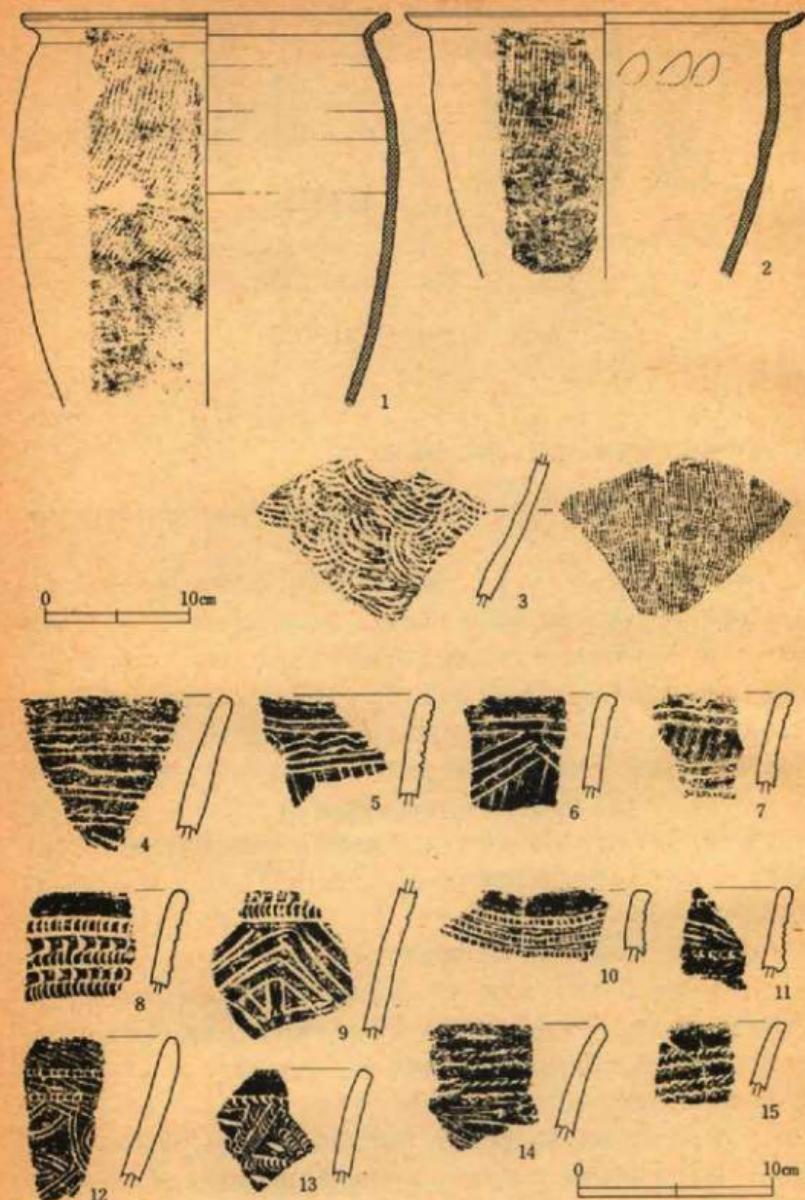
1は甕で、口縁部は短かく大きく開く、口縁部の粘土貼り付け後、上端に強いオサエを施すために沈線状の痕が残る。下端にも強いオサエを施し、全体に台形状を呈する。貼り付け外面のオサエが強いために粘土が器壁に食い込むような状況がみられる。胴部は、肩から張り出しながら上半部に最大径を有する。胴上半部には平行叩き目を施し、さらに横方向の螺旋状ナデによって消している。上端部は横ナデにより消される。

2は甕で、口縁部を「く」字状に外反させた後に薄い粘土板の貼り付けを施す。貼り付け下部のオサエ後に上部のオサエを行なうために断面三角形状を呈し、受け口状となる。胴部はほとんど張りをもたず、肩から底部へと移行する。胴部外面には浅い平行叩き目を施し、上端は横ナデにより消される。胴部内面は指頭押圧が強く、凹凸が著しい。

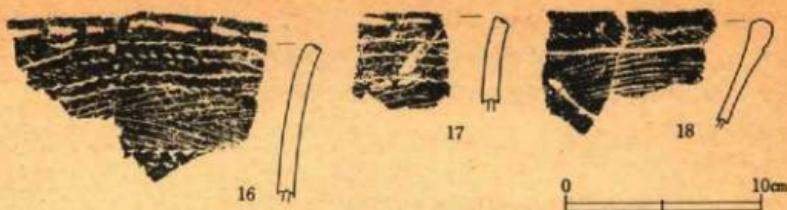
3は大形の甕の胴部破片である。

4～18は縄文式土器である。4～7は半截竹管による平行沈線を施す。6・7は地文に間隔の広い撚糸文を施し、その上に平行沈線を引く。8～13は、口縁下の平行沈線間に半截竹管による連続爪形文を充填し、それ以下は半截竹管による沈線を幾何学的に施す。8と9は同一個体であろう。14～17は、口縁下に2条の半截竹管押し引きを施す土器である。16は押し引き下に小さな半截竹管の集合沈線を施した後、再び押し引きを加えることによって集合沈線を区画している。16と17は同一個体の可能性が強く、口唇部には刺突が施される。14と15も同一個体であろう。18は口縁部が肥厚する。口縁部下に1条の横走する沈線を引き、上部に細かい斜撚文、下部に条線を施す。上部の斜撚文は口唇部端にまで施される。

4～17は前期後葉、18は後期後葉に属するものと思われる。



第68図 包含層出土遺物（1）（1/4・1/3）



第69図 包含層出土遺物（2）（1/3）

包含層出土土器一覧

遺物 番号	器形	保存度	法 量(cm)	地成層	成形・調整	粘 土	色 調	備 考
1	甕	口縁部少、胴 下部を欠く	口径 25.2 胴部最大径 26.5 規高 26.5	C	外面 口縁部横ナデ 胴上半部平行 叩き目後、上端 横ナデ、胴下 半部ヘラケズ リ（ノ） 内面 口縁部横ナデ 胴部指頭押圧 後、難なへラナ デ	密 砂粒を若干含 む	器壁外 茶褐色 器壁内 褐色	酸化焰に近い 4区0001, 0002 0003, 0004 0005
2	甕	口縁部～胴 部少	口径(復) 27.6 規高 18.0	C	外面 口縁部横ナデ 胴上半部平行 叩き目後、上端 横ナデ、胴下 半部ヘラケズリ (ノ) 内面 口縁部横ナデ 胴部指頭押圧 後横ヘラナデ	密 砂粒を若干含 む	器壁外 暗黄褐色 器壁内 褐色	酸化焰に近い 4区0006
3	甕	胴部片		B	外面 縞を卷いた叩 き目底を残す うずをき抜押 え具による青 洋波文 内面	密 砂粒をほとん ど含まない	灰褐色	外面に若干摩滅 がみられる 2区0003

5. 小 結

御塚台遺跡において検出した遺構は、竪穴住居跡10軒、方形周溝遺構4基である。

今回調査対象となったのは御塚台遺跡の一部であり、集落跡はさらに広がるものと思われる。そこで集落跡の問題については2次調査以降の成果をまとめて述べることとし、ここでは今回の調査において普遍的に出土した土器器の甕・壺・鉢と叩き目を有する酸化焰焼成と還元焰焼成との中間的焼成の土器に注目し概略を述べるにとどめる。

土器器

甕形土器

A 口縁部が緩やかに外反し、胴部はやや球形を呈するもの。（第46図1・2、第52図1）

B 口縁部が「く」字状に外反し、長胴となるもの。（第52図2）

C 口縁部は外反しながらも受け口状を呈するもの。（第36図1、第41図1、第49図1）

D 小形の甕で a・b に分類される。

- a 口縁部が「く」字状に外反し、胴部上半に最大径を有するもの。(第52図3・4)
- b 口縁部は肥厚し緩やかに外反するもの。(第46図3・4)

甕形土器

A 体部に棱を有するもの。(第46図8・9・10, 第56図6)

B 体部に棱をもたず口縁部が開くもの。(第33図6, 第56図5, 第59図1)

C ロクロ成形され、体部は直線的に開くもの。(第41図2, 第43図2)

鉢形土器

A 口縁部はほぼ直立し、口唇部で若干外反する。胴部はやや張りをもつもの。(第52図6, 第56図3)

B 粗雑な成形のもので、体部はほぼ直線的に開くもの。(第53図7・8)

叩き目を有する中間焼成土器

出土量は少なく、住居跡から2点、包含層から2点の計4点のみである。口縁部の形態に注目すれば、A・Bに分類できる。

A 粘土紐の貼り付けが口唇端部まで施されず、貼り付け粘土上端に強いオサエを加えるために沈線状を呈する。断面形は略台形を呈する。(第43図1, 第49図3, 第68図1)

B 薄い粘土紐を貼り付けた後、上下に強いオサエを施すために、断面形は略三角形を呈する。(第68図2)

以上、年代的に把えられる可能性が強い甕形土器・甕形土器・鉢形土器および叩き目を有する土器に関してそれらの特徴を抽出してみた。ここで、資料的には乏しいのであるが、あえて概略的な年代観を呈示してみる。

甕形土器A類は、その形態からみて鬼高窓のメルクマールとなる特徴をもつ土器である。同B類は、鬼高窓の範疇に含まれるが、長胴となり真間期的様相を帯びているものである。同C～D類は明確な時期的判断が困難であるが、鬼高窓から真間期に移行する時期のものと考えられる。

甕形土器A類は、口縁部が直立あるいは外傾するもので、鬼高窓後期の所産であろう。B類は時期的な様相を把えにくい形態であり、良好な共伴土器がないため、明確な時期判断は困難である。C類はロクロ成形によるもので、国分式の範疇に含まれるものと考えられる。

資料が乏しいため、住居跡と出土遺物を関連づけて時期的様相を与えることは困難であるが、5号住居跡が国分期に含まれる以外は、鬼高窓(後期)から真間期にかけての所産とみて大過

あるまい。

時期・性格不詳の遺構

時期・性格を明瞭にできない遺構として方形周溝遺構4基を検出した。いずれも共伴する遺物の出土はなく、時期決定するための確証を欠いている。ただ、12号跡が鬼高期後期から真間期の所産と考えられる3号住居跡を切っていることから、すくなくとも12号跡は鬼高期後期から真間期ないしは、それ以降の所産といえる。他の3基も規模においては12号跡に比べて小規模ではあるが、その形態よりして12号跡とほぼ同時期とみるのが妥当であろう。その性格については不明であるが、墓跡である可能性が高いように思われる。時期的な隔たりは大きいが、「方形周溝墓」との関連について考えてみる必要があるかもしれない。

ROKUTSU AND OTSUKADAI SITES

This report concerns archaeological investigations carried out at Rokutsū and Otsukadai sites by the Chiba prefecture Cultural Properties Center.

These investigations were rescue operations brought about by the construction of the Chiba Tonanbu New Town.

Administratively, Rokutsū site is located at Ōkanazawa and Otsukadai site at Kokanazawa, Chiba city.

These sites are located on a broad diluvial terrace penetrated by the Murata River flowing into the Bay of Tokyo. The investigation of Rokutsū site continued from January to May, 1978, and Otsukadai site from November, 1978 to February, 1979. We have, thereafter, made preparations for the publication of the report.

Main results of the investigations

(1) Rokutsū site

We discovered two pit-dwellings in Late Jomon period, and 25 Jomon pitfalls, three pit-dwellings in the Heian period, five drainage ditches.

Many stone implements and potsherds in Jomon period, a shot of matchlock in about the age of civil strife were also discovered.

(2) Otsukadai site

We discovered two pit-dwellings between the Late Kofun period and the Heian period, and the four rectangular ditches supposed to be the tombs in the Heian period. The flakes in Preceramic Age and the Jomon potsherds, the iron objects and potsherds from the Late Kofun period to the Heian period were also discovered.

圖 版
六 通 遺 跡

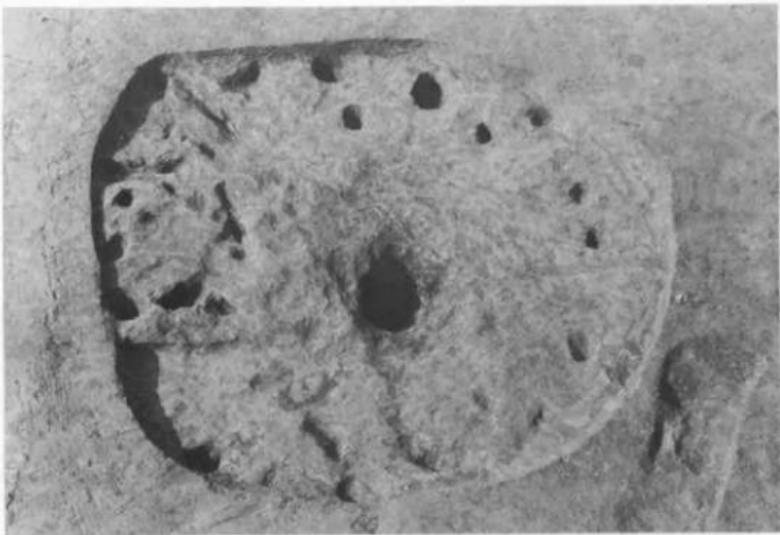


(1) 六通遺跡調査前の状況（南西から）



(2) 六通遺跡調査前の状況（北東から）

図版 2 六通道路

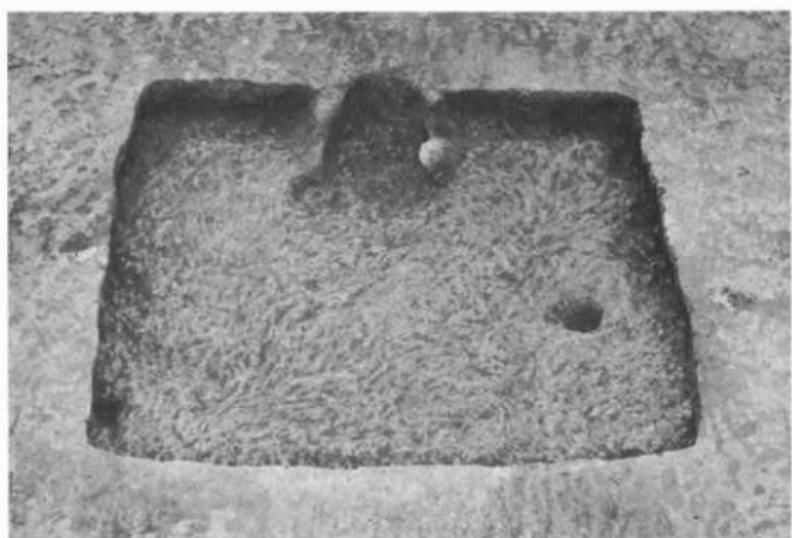


(1) 1 (DW03)号跡全景



(2) 2 (DW04)号跡全景

六通遺跡 図版3



(1) 3 (DW02)号跡



(2) 4 (DW01)号跡全景

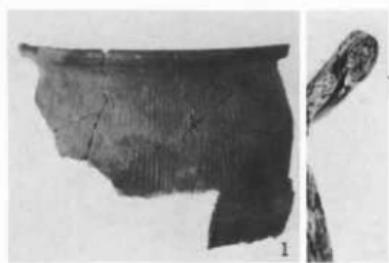
图版 4 六通遗跡



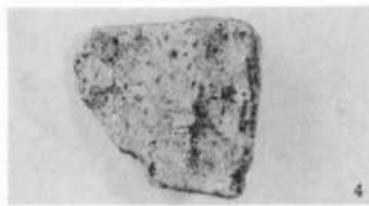
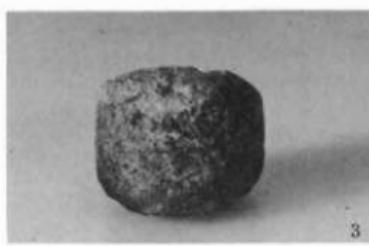
(1) 5 (DW05)号跡全景



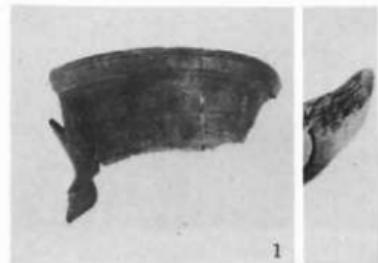
(2) 5 (DW05)号跡遺物出土状態



(1) 3 (DW02)号跡出土遺物

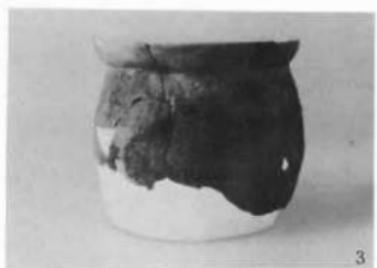


(2) 4 (DW01)号跡出土遺物



(3) 5 (DW05)号跡出土遺物(1)

図版 6 六通遺跡



3



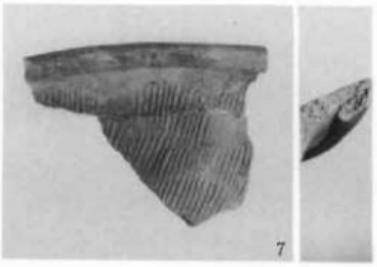
4



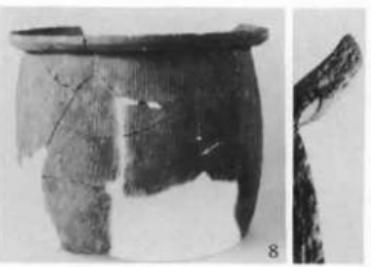
5



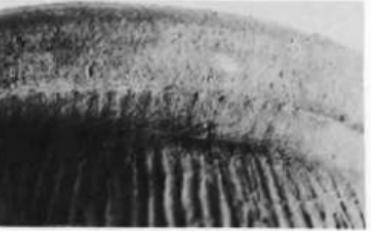
6



7



8



タタキ調整と口縁成形との関係

5 (DW05)号跡出土遺物〔2〕

六通遺跡 図版7



9



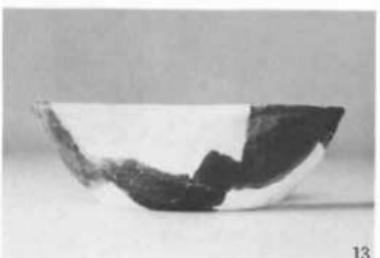
10



11



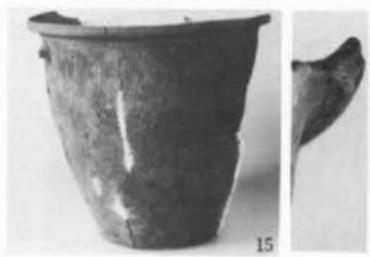
12



13



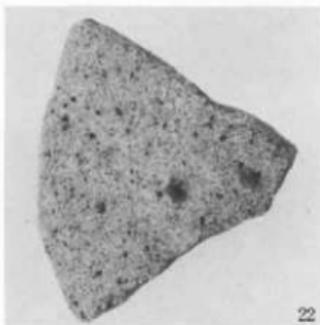
14



15

5 (DW05)号跡出土遺物〔3〕

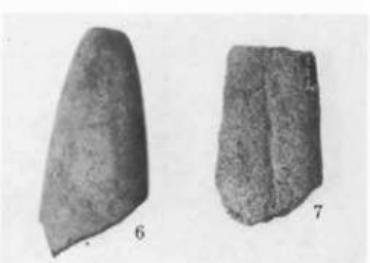
圖版 8 六通遺跡



5 (DW05)號跡出土遺物(4)



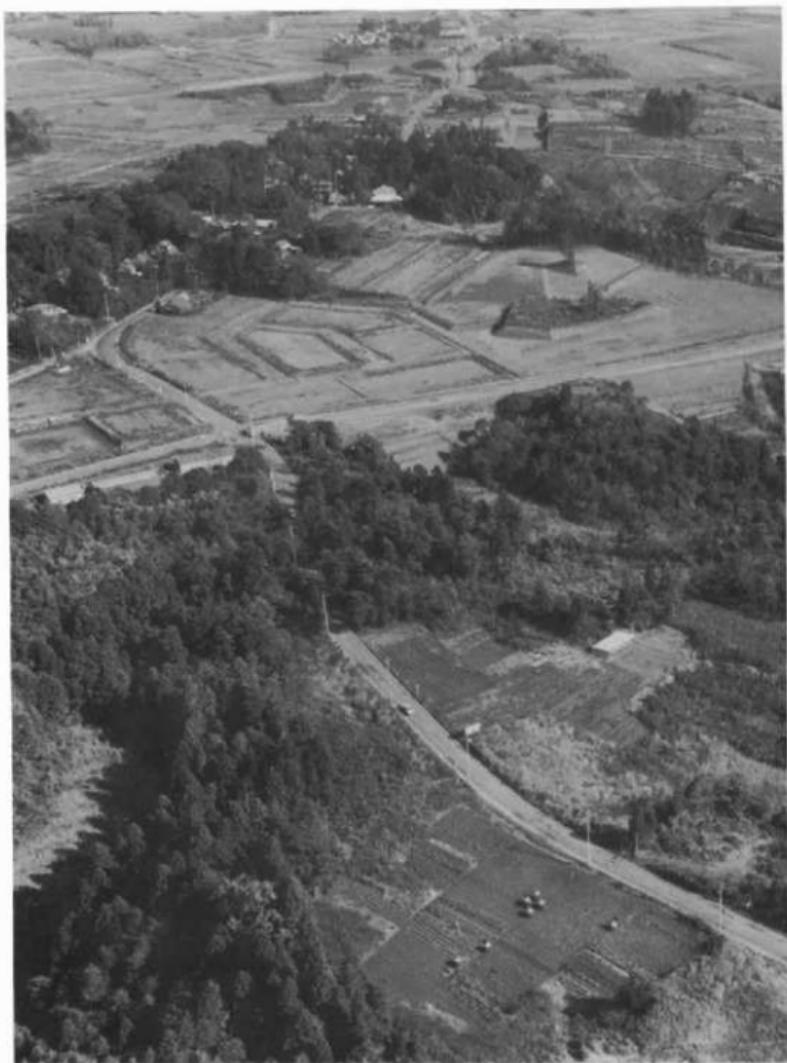
(1) 31 (M01)号跡出土遺物



(2) 包含層出土遺物

図 版

御 塚 台 遺 跡

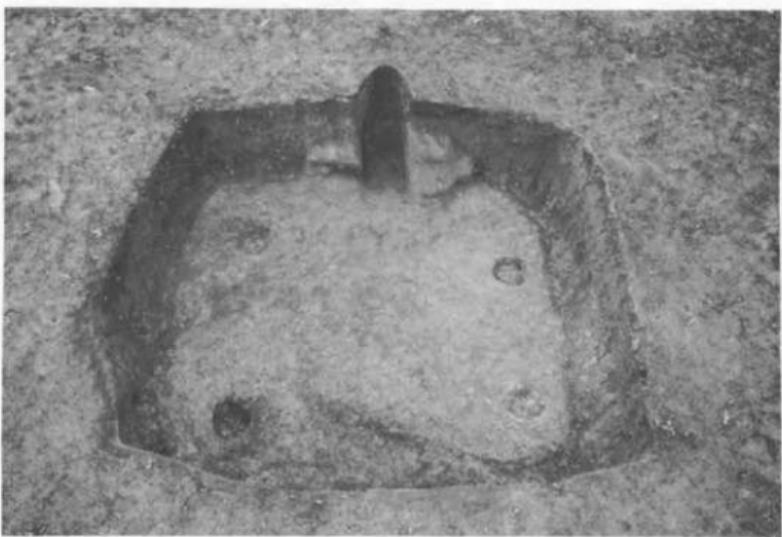


御塚台遺跡調査前の状況（南から）

図版 II 御塚台遺跡



(1) 1 (004)号跡全景



(2) 2 (005)号跡全景



(1) 3 (006)号踏全景



(2) 4 (008), 5 (009)号踏全景

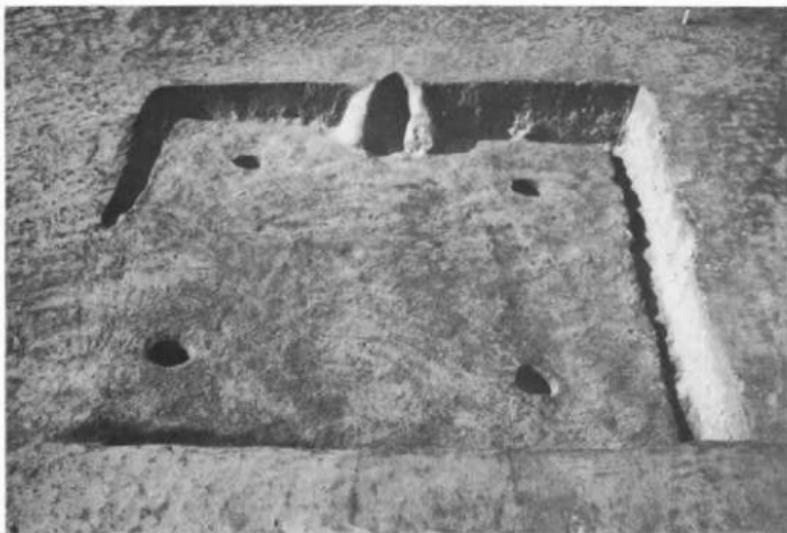
図版 13 御塚台遺跡



(1) 6(010)号跡全景



(2) 7(011)号跡全景

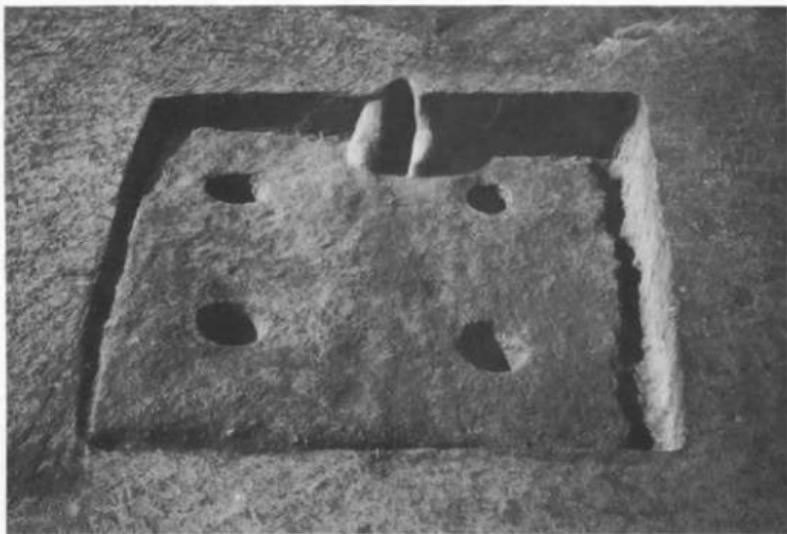


(1) 8(012)号跡全景



(2) 8(012)号跡遺物出土状態

圖版 15 御冢台遺跡



(1) 9 (013)号跡全景



(2) 10 (016)号跡全景



(1) 11 (001)号跡全景



(2) 12 (002)号跡全景

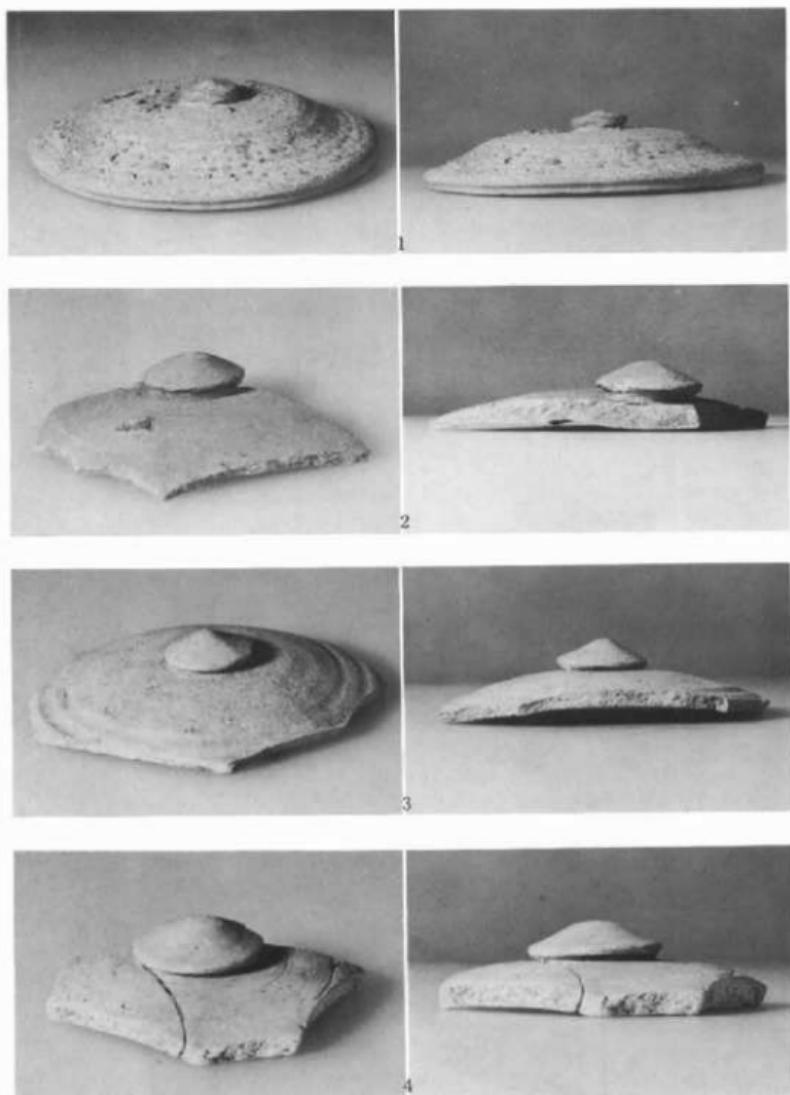
圖版 17 御城台遺跡



(1) 13(003)号跡全景

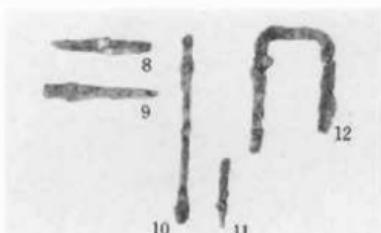


(2) 14(007)号跡全景



1 (004)号跡出土遺物[1]

図版 19 御塚台遺跡



(1) 1 (004)号跡出土遺物 [2]



(2) 2 (005)号跡出土遺物



(3) 3 (006)号跡出土遺物



1



2



3

(1) 4 (008)号跡出土遺物



1



3

(2) 5 (009)号跡出土遺物



1



2

(3) 6 (010)号跡出土遺物〔1〕

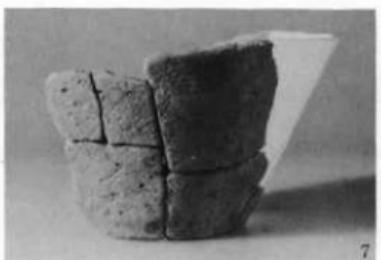
图版 21 御冢台遗迹



3



4



7



8



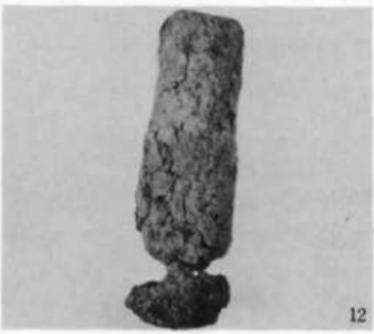
9



10

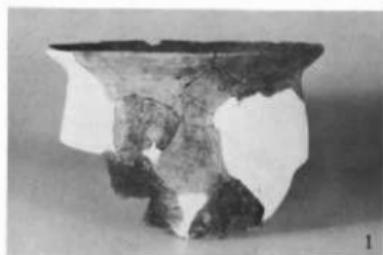


11



12

6 (010)号跨出土遗物〔2〕



1



2



3

(1) 7 (011)号跡出土遺物



1



2



3



4

(2) 8 (012)号跡出土遺物〔1〕

図版 23 御塚台遺跡



5



6



7



8



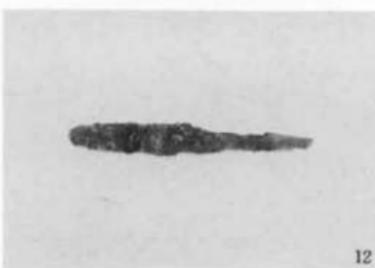
9



10

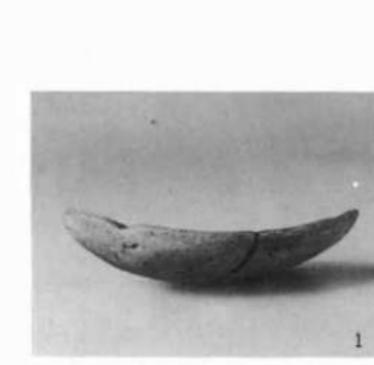
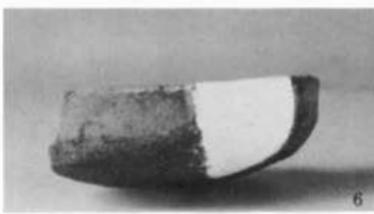


11



12

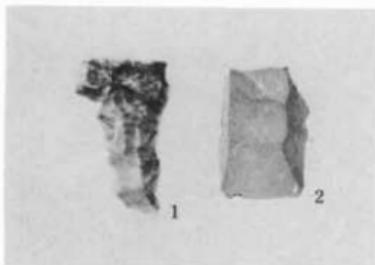
8 (012)号躰出土遺物(2)



(1) 9(013)号跡出土遺物

(2) 10(014)号跡出土遺物

図版 25 御塚台遺跡



(1) 先土器時代出土遺物



(2) 包含層出土遺物



昭和55年9月20日 印刷

昭和55年9月30日 発行

千葉東南部ニュータウン9

—六通遺跡・御塚台遺跡—

発行 財団法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1-3-13

印刷 旭印刷株式会社
千葉市古市場町474-265(ちば印刷園地内)
TEL 0472-68-2605代
